

ロ 家人狼狽

ハ 夫人の沈勇

ニ 遂に火災を免かる

乙 物事にあわてぬこと

1 吉就夫人の例話考察

2 非常時の心得

3 平素の心得

4 不時呼集に就て

#### 四 指導 計畫

1 吉就夫人の例話から入るがよいだらう。この例話を説くに當つては、先づ吉就夫人の人と爲りについて大體の概念を與へ然る後に本課の教材に入るがよい。それでなくては一體誰の事を話すのか子供に對しては何等の感興もなければ注意も喚起せないであらう。第一毛利吉就といふ人から我々には今までに何等知る所がない。毛利元就の末孫であらう、位の想像がづくに過ぎない。それで吉就夫人を説くには吉就についても説き、かくてその夫人についても大體の略傳を説いて本教材の背景を作つて置く必要がある。

2 本教材の中心點はどこまでも吉就夫人の沈着といふことで家人の狼狽を戒しめ、非常危急の場合に事の順序を定め如何にも思慮ある行動をとつたといふ所に存する。この場合の處置に對して十分味はしむる所がなければならぬ。

らぬ。

3 非常有事の際は勿論、平素よく事を處するには沈着にして思慮深き行動をとるやうに心がけしむることが大切である。

4 修身書教師用には不時呼集についての注意を掲げてゐるが中等學校に於てはいさ知らず、小學校に於てはさうした施設はしてゐない所が多からうと思ふ。それは恐らくは一般社會のさうした、警鐘とか警笛とかに對する常識を養ふといふことに過ぎないものであらうかとも想像される。

5 非常時の心得については教授者の經驗談でもあれば非常に力ある教材となるから是非之を話して聞かせる事がない。尋常三年生位の兒童にはさうした經驗は恐らくはないであらう。あつても自ら之に處したのではなくて人の指圖によつたものに過ぎない。

#### 五 教材解説・説話要領

##### 甲 毛利吉就夫人の例話

###### 1 毛利吉就夫人の略傳

今から凡そ三百五十年前は世に謂ふ戰國の時代で、この戰國時代に北條早雲・上杉謙信・武田信玄など、並んでえらい大將に毛利元就といふものがあつたことはよく人の知る所である。毛利元就は實にえらい大將で、長門に居城を構へてその所在十餘國を平定してゐた。元就は又非常に忠義の心が深く、時の天皇正親町天皇に澤山な費用を献じたこともある。



毛利元就の子孫は代々長門にあつて毛利元就の志をついだ。この元就から六世の孫に吉就といふ者があつた。この吉就の妻が即ち今日お話せんとする吉就夫人である。吉就夫人は今から凡そ二百三十年程前の人である。父は若狭國の小濱の藩主酒井忠隆である。忠隆は實に立派な藩主であつた。學問もあり武藝にも長じ、騎馬、水練、射術何一つ出来ないことのない立派な大名であつた。その上領民や部下を愛することも亦非常に深かつたのでよく忠隆に心服してゐた。さうした立派な父の女として生れたのが吉就夫人であるから、夫人の人と爲りも亦想像に難くはない。吉就に嫁してからはよく夫に仕へ、よくその道を守つて家を治めたが、不幸にも、夫吉就は若くして病のために早逝した。そのため夫人は若くして寡婦となつてしまつた。寡婦となつてからは江戸麻布に邸を構へてそこに寂しく暮し、貞節を守つて亡夫の供養をその一生の仕事とした。亡夫の命日には髪を少しづつ、切つて亡夫に捧げ、以てその貞節を誓つたことは有名な話である。

## 2 吉就夫人の沈着

4 或年火災起り屋敷危険に類す 吉就夫人はかやうに萬事に心の行届いた立派な婦人であつた。何時も何一つ取亂したこともない婦人であつた。平素、何一つ取亂さぬ彼女の女は、又非常の場合に臨んでも常に落ちついて事に處し、事を過るやうなことはなかつた。

元祿十二年のことである。その頃は既に夫吉就と死別して麻布の邸に寂しい生活を送つてゐた。その屋敷の近邊に火災が起つた。火は見る／＼中に燃えひろがつた。折悪しくも折からの風が一層はけしくなつたので、火焰は愈々はけしく、遂に夫人の屋敷も危険に類して來た。

□ 家人の狼狽 火焰はもう／＼と立ち上り、わい／＼騒ぎ立てる火事場の騒ぎは手に取るやうに聞える。火の子は

どん／＼屋敷の内に飛んで來る。夫人の屋敷内でも家人達が前後にうろたへた。そして屋敷内にある人達は、唯家中をあつちに走り、こつちに走りうろたへ廻つてゐるばかりであつた。そして愈々危険になると皆奥方の前に出て顔色も失つて、『早く／＼、どこかへお移りになつたがよろしう御座いませう。おかれては大變です。早く／＼』とせき立てた。火事場に於ける火の勢ほど恐ろしくも早いものはない。見るまにひろがつて行く。時を失すると全く取りかへしのつかぬことにもなつて了ふから、家人達がかう云つてせき立てるのも無理もないことであつた。

ハ 夫人の沈着 不斷落ちついて取り亂したくない夫人は、かうした時にも決してうろたへて事を損するやうなことはなかつた。召使達がうろたへて息もせき／＼、せき立てる聲を靜かに聞きながら、少しのうろたへた様子もなくせき込んだ風も見せず、落ちついた様子で、『各々落ちついて聞けよ。今急に立退いたならば、自分に供をして出て行く者共は、後に残した衣類その他の道具が心にかゝつて心配であらう。その上屋敷の内は廣いことなれば、只今さう急に立退かなくとも別に差支はあるまい。この家に火がかゝつたらともかく、まだこの家には火はかゝつてもるないから、各々達は先づ自分の大切にしている衣類雜具を取りかたづけよ。かうした時にはよくうろたへて却つて自分の部屋から火を發するやうなこともあるから、よく心を落つけて、氣をつけよ。屋敷内の女子供は特に氣をつけよ。立退くときは必ず自分と一緒に立退けよ。各々勝手に立退くとあぶないから特に氣をつけよ。』とて一同を訓戒した。

ニ 遂に火災を免かる 奥方の如何にも落つきはらつた態度に召使達は全く正氣にかへつた。そして一同皆一人残らず、何一つ取亂したことなく、各々自分の持物の整理が出來た。いざといへばすぐにも自分の大切なものは持つて立退くだけの用意が出來た。

自分の用意が出來ると家人達は一層よく落ついて來た。いざとなれば飛び出すまで、ある。愈々となるまでには



ともかく皆火を防げといふので、必死になつて火を防いだ。そのために遂にこの屋敷は全く火災から免かれた。そして何一つとして焼かれたものもなく怪我したのものもなかつた。

## 乙 物事にあわてぬこと

### 1 吉就夫人の例話考察

主なる設問

- イ 吉就夫人は平素どんな心がけの人でしたか。
- ロ 吉就夫人の屋敷の近所に火事があつた時家の人たちはどうしましたか。
- ハ 奥方は家人達をどう云つてさとししましたか。
- ニ 奥方の屋敷が火災から免れることを得たのはどうしてですか。
- ホ 吉就夫人について感心する所はどんなことですか。

等の如く問を發し、吉就夫人が女乍らも、かゝる危急の場合に泰然自若少しも動ずる所なく、周到なる思慮をめぐらし、事の順序を定め、その處置を誤らなかつたことを十分に理會せしむる。

かくて之に引續いて我々は、かゝる非常の時に如何に處すべきかについて兒童と共に考察して行く。

### 2 非常時の心得

もしこの場合吉就の奥方が、家の人々と同じやうにあわてたうろたへたならば一體どういふ結果になつてゐたであらうか？それは恐らくはその屋敷も焼けたであらう。その家財道具も焼けたであらう。家人達の持物も燃えてしまつたであらう。もつと火は燃え廣がつて行つて、どんな大火になつてしまつたか知れない、之を思ふと吉就の奥方のと

つた處置は誠に立派なものである。

我々はさうした、思ひがけない大事に、さういつも出會ふものではないが、時に、かうした大事の場合に遭遇することも決してないとは云へない。吉就の奥方のやうに大火に出會ふとか、或は大地震に見舞はれるとか、或は大洪水に遭遇するとか、いふやうなことなどは即ちこれである。所がかうした大事件が突然に出來すると、多くは、その事の餘りに大きく餘りに突發的なるによつて、全く驚愕その度を失ふに至るのである。そして何が何やら分らなくなつてしまふ。——教授者にその經驗あらば之を話すがよい。又兒童の身邊に近くさうした例があるならそれを話してもよい——例へば自分の家に火がついて驚きの餘り、たゞほんやりと煙草盆を持つたまゝ、その火事を見てゐたといふ話もあるが、大抵はうろたへあわて、何も思慮が廻らず考へが働かなくなつてしまふ。

それでかゝる場合、最も大切なことは、先づ『自分の心を落ちつけること』である。自分の心を落ちつけて後『事の大小をよく考へてその處置を考へること』である。そして後、考へた處置法によつて敏捷に、順序よく處してその處置を誤らぬやうにすることが大切である。然し、それは言ふべくして、實際その場に遭遇すると決して思ふやうにはならぬが、とも角も事にあはてず、うろたへず、事の大小順序をよく考へてその處置を誤らぬやうにすることが大切である。

### 3 平素の心得

所が、さうした非常大事の場合に、事にあわてず、うろたへず誤りなき處置をするといふことは日頃の心がけが何より第一である。

『ではどんな心がけが大切であらうか？——答辯をさせ之を基礎にして——』



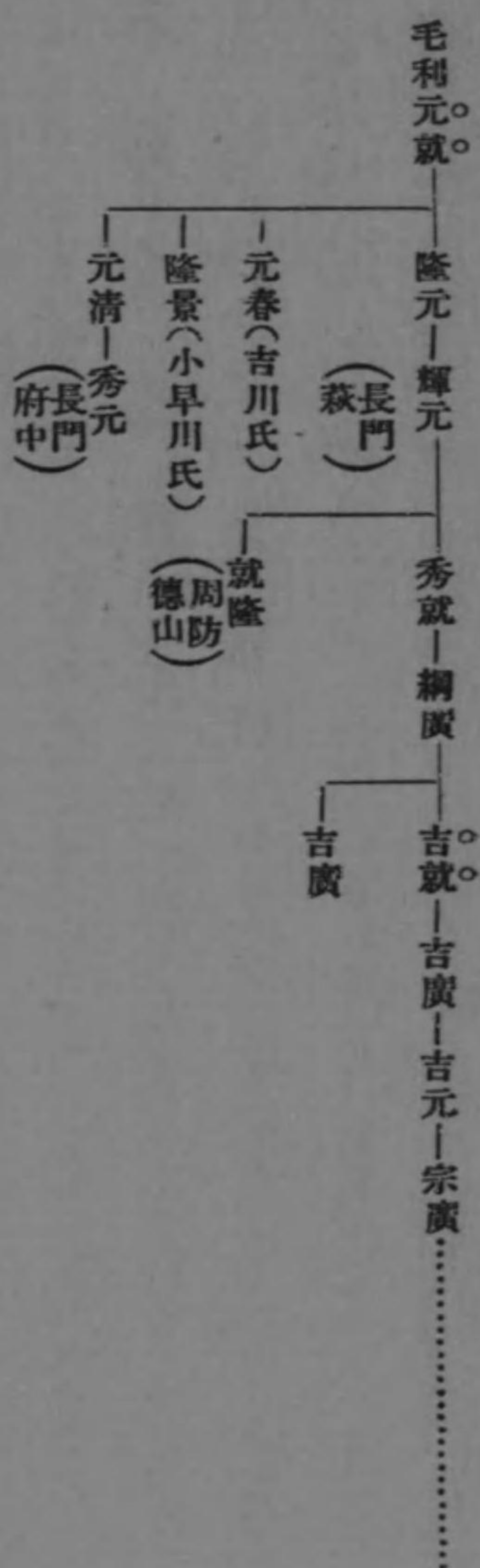
- 物事はよく考へてなすやうに心がけること。
- 事をなすには常に仕事の順序を立てて爲すこと。
- 決して急ぎすぎたり、うろたへたりして、事を仕損ぜぬやうに心がけること。
- 何でも亂雑によいかげんな仕事をせぬこと。
- 落付いて事をなすやう習慣づけること。

4 不時呼集について

軍隊や、中等學校などの寄宿舎では不時呼集といつてさうした非常時に落度のないやうに、うろたへたりすることのないやうに平生練習をすることがある。不時呼集の喇叭や合圖はちやんときまつてゐる。その喇叭を聞くや皆一定の服装をして所定の場所に集合せねばならぬ。この時、うろたへる人は洋服を裏がへしに着たり或は大切な品物を忘れたりする。かゝる場合にも十分落つて失敗のないやうに氣をつけることが大切である。

六 參考資料

□吉就の系圖



□吉就夫人の父酒井忠隆略傳

酒井忠隆は、忠直の長子にして、小字を千熊丸と曰ひ、靱負と更む。忠隆從五位下に叙し、靱負佐と稱す。後天和二年封を襲いで從四位下に進み、遠江守と稱す。貞享元年の歳且に當り、世臣篠原某死して子なく、嗣を養ひて祀承を承けしめんと請ふ。老臣相議して曰く、歳且祝賀中なるを以て、五日を歴て後に之を聞かんと。忠隆其の言の終るを俟たずして曰く、篠原氏は累世の宿臣なり、今死に臨み嗣を請ふ、是れ猶豫すべからず、速に其の請ふ處を許して死なしめん。是れ士を愛するの道なりと。乃ち其の弟をして後と爲さしむ。且つ諸老を諭して曰く、苟も武人の懼る所は、死に非ず、死して繼なきなり。故に死して繼なきものあらば、深く其の嗣を絶つを憐惜し、偏く其の所縁に索め、以て其の嗣をして絶えざらんと欲すと。衆皆之を感戴すと云ふ。忠隆文を講じ理學を好み又武を修めて善く騎射の術に達し、傍ら水練に熟すと云ふ。貞享三年國に在り、病に罹りて尋て卒す。子忠固嗣ぐ。(大日本人名辭書)



## 第十五 皇大神宮

## 一 目的及び教材観

祖先崇拜は我が國民道德の樞軸である、恐多くも我が皇室におかせられてもこの大精神を體し給ひ、御平常は云ふまでもなく、事ある毎にこの精神を發揮し給ふことは、國民のよく拜察し奉る所である。而して伊勢の皇大神宮は我が皇室、第一の御祖先を御祭り申す、いともかしこき御宮にて、上、皇室の御尊崇は別けて御深きものあらせ給ふことは、こゝに申すもかしこき極みである。

畏きことながら、皇室一番の御祖先は又我が國に於ては我が國家、我が國民の第一の御祖先にて在します。是、我が國に於ては、その國家の成立上、歴史的に、上皇室は常に、國民の大家にましますからである。かくして皇室の御尊崇いとも御深くまします皇大神宮は又國民にとつても最も大切な御宮であることは今更申すまでもなく、古來よくこの精神を辨へ、我が國民はせめて一生一度は伊勢参りをと念願もし且實行もして來た次第である、この、我が國民、即ち吾々にとつて、最も大切な御宮、皇大神宮の御事について、その、御祭神、御祭事、御神域、國民としての心得等について十分に知るといふことは實に國民としての義務であるといはねばならぬ。それと共に又それは次代の國民を作る國民教育に於ても亦大切なことである。

本課は修身書教師用書に

「皇大神宮の御事を知らしめて忠君愛國の精神を養はしむるを以て本課の目的とす」とある通り、この大切な皇大神宮の御事について知らしめんとするものである。この皇大神宮そのものをほんとに理解せしむること、これが實に本課の第一義の目的である。

修身書の目的には、皇大神宮の御事を知らしめて忠君愛國の精神を養ふ云々とあるが、皇大神宮の御事をほんとに理解せしむること、そのことがそのまゝ、忠君愛國の精神を養ふことになるのであつて、皇大神宮の御事を説くことと忠君愛國の精神を養ふことが別に存すると解すべきではあるまい。

かくて皇大神宮に對して尊崇の精神を養ふと共に、延いて一般の神社に對する敬神の心を養ふやうにすることは本課に因んだ一つの目的である。この點についても教授者は意を用ふる所がなければならぬ。是亦、そのことが忠君愛國の國民的精神を陶冶することになるのである。

## 二 教材系統

尋六、皇大神宮。高二、建國。

## 三 指導要項

- 1 皇大神宮に對する兒童の既有觀念の整理
- 2 御祭神天照大神
- 3 皇室の御尊崇と重なる祭典



- 4 國民の覺悟と心得
- 5 神域及社殿

#### 四 指導計畫

- 1 修身書の説話要領は大體次の如き要項によつてゐる。  
皇大神宮の社殿及神域  
御祭神と我が皇室の御崇敬  
我が國民の心得

然し兒童に説いて行く場合に於ては大様前掲の指導要項の如き順序で説いて行く方が説き易いであらうと思ふ。

- 2 本課の教材取扱に當つては特に言語態度を謹み、ゆめにも、その尊嚴を失するやうのことなきを期せねばならぬ。
- 3 皇大神宮の御事について十分の理解を得させれば、皇大神宮に對して國民は如何なる覺悟心得が必要であるかは自ら各自に創造し得る所であらうがそれを基礎にして十分の指導をして置くことが大切である。
- 4 申すまでもなく伊勢神宮には内宮と外宮とあつて、皇大神宮はその中の内宮を申上げ奉るものであることを指導者は十分知つてゐなければならぬ。

#### 五 教材解説・説話要領

##### 1 皇大神宮に對する兒童の既有觀念の整理

お伊勢参りといへば汽車や汽船のない頃から一生一度はどんな難儀苦勞はしても必ず致さねばとは我が國民の一番大きな願であつた。交通の便利になつた今日では愈々お伊勢参りは年々盛になつて、伊勢神宮では毎日々々大變な参拜者で、特に春や秋の氣候のよい時期になると驚くばかりの参拜者である。皆さんの中ではお父さんなりに連れられて伊勢参拜をした人もあるかも知れないし、又伊勢神宮のことに就いてお話を聞いた人もあらうが、之に就いて知つてゐることがあるならば何でも答へて見よ。又自分が調べたことでもあればそれも答へて見よ。などの如くに問ひ、既有の觀念を全部表現させ、かくて諄々と次の如き順序で説いて行くがよい。

##### 2 御祭神天照大神

それでは先づその神様はどんな方であらうか。それから述べることにする。

日本の國を治めて下さる一番尊いお方が天皇陛下でございますことは誰でも知つてゐるであらう。只今の天皇陛下は我が日本國に於て天皇の御位におつきになつた一番最初の御先祖から百二十四番目のお方でいらせられる。即ち百二十四代目の天皇が今上天皇陛下でございます。

第一番目即ち第一代の天皇は、どなたであつたかはよく知つてゐるに違ない。即ち神武天皇である。神武天皇は、東の方の國の悪者共をお平けになつて、はじめて天皇の御位に即き給うた。それから代々この天皇の御子孫の方が次々に天皇の御位にお即きになつた。それが今までもお續きになり、只今の天皇陛下はそれから百二十四代、年數にすると二千五百年といふ長い間である。そして之から先も亦今迄のやうに我が日本の國はこの天皇陛下の御子孫の方々が天皇の御位にお即きになつて、何時までも何時までも我が國を治めて下さるのである。



それでは第一代の天皇でいらせられる神武天皇様より以前はどうであつたかと云ふと、先づ一番はじめに天照大神といふえらい神様がお出になつた。天照大神は大變おえらい方で、徳の高い、お情深い神様でゐられた。そして御孫にあたらせられる、瓊々杵尊をこの日本の國に降し給うた。瓊々杵尊をこの日本國にお降しになる時、天照大神が申し給ふには、「この日本の國は我が子孫が頭となつて治めねばならぬ國である。お前は之から日本の國に行つて治めよ。天皇の御位の榮えることは天が何時までも續くと同じやうに、又地が何時までたつても絶えることがないと同様に何時までも絶えることはない。」と仰せ給うた。そして更に三つの寶をお授けになつた。それが即ち三種の神器と申して日本の一番尊い寶である。その寶と申すは、鏡と玉と劍の三つである。そしてその鏡をお示しになつて、この鏡を見ることは自分を見るが如くせよと仰せ給うた。

そこで瓊々杵尊は天照大神のお言葉を拜し、更にこの三つの寶を捧じてこの日本の國にお降りになつた。そして代々日向の國にゐてこの國を治め給うた。この瓊々杵尊から三代目の方が即ち神武天皇である。そこで、日本の天皇陛下の一番の御先祖にまします方はこの天照大神であらせ給ふ。この天照大神をお祭り申してゐるのが伊勢神宮である。即ち天照大神の御靈の代りとして瓊々杵尊をこの國に降し給ふ時、授け給うたお鏡即ち八咫鏡と申し奉るこの鏡をお祭りしてゐるのである。

伊勢神宮は之を又皇大神宮とも申し奉る。皇大神宮はかういふ神様をお祭りしてゐるのであるから日本の國でどんなに尊いお社であるかはよく分るに違ない。即ち日本で一番尊い天皇陛下の一番御先祖のお方をお祭り申上げてゐるのである。

### 3 皇室の御崇敬と重なる祭典

皇大神宮はかやうに尊いお社であるから、我が皇室でも代々非常に之をお敬ひになる。何か國に大事があつたり、又は皇室に大きな事があると態々御親ら御参拜になる。

只今の天皇陛下も今までに何回となく御参拜になつた。大正四年七月六日最初の御参拜を行はせ給うて以來

- 立太子禮御親告のため……………大正五年十二月十日
  - 御成年式御報告のため……………大正八年五月七日
  - 海外御巡遊御奉告のため……………大正十年二月二十三日
  - 海外御巡遊御歸還御奉告のため……………大正十年九月十一日
  - 攝政御就任御奉告のため……………大正十年十二月十三日
  - 御大婚御奉告のため(妃殿下御同列)……………大正十三年二月二十四日
  - 即位禮及大嘗祭後御親謁の儀(皇后陛下御同列)……………昭和四年十一月二十一日
- の如く御参拜になり、何か重なることがある度に皇大神宮に御奉告になるのである。之全く我が皇室最初の御先祖天照大神を祀る大事な社であるからである。更に又毎年々々の重要な祭日には必ず勅使を差遣はされて幣帛を捧げ給ふのを例とし給ふ。

皇大神宮の重なる祭典はといへば大別して、大祭、中祭、小祭の三種とする。大祭に屬するものには、イハヒマツリ祈年祭、ツキミサイ神嘗祭、カミナシマツリ新嘗祭と二十年毎の式年遷宮祭と臨時奉幣祭とである。いま、之についてその大略を述べると次の通りである。

〔祈年祭〕 キネンサイ又はトシゴヒノマツリと云ふ。二月十七日に取行はせられる。年はトシ稻穀の意味でコヒ祈は請の意



で稻作の初に當りこの年内に風雨の災なく穀物が豊かに實るやうにと民を思召す御誠意を披瀝せしめ給ふ祭典である。

〔神御衣祭〕 カムミヅノマツリ又は御衣祭とも申して居る。五月十四日と十月十四日とに皇大神宮及荒祭宮とに和妙、荒妙の兩種の神衣を奉る祭である。和妙の御衣は、柔和なる織物の意にて絹布をいひ、今は羽二重を申し、荒妙の御衣は粗糸の織物の義にて麻布をいふ。この御衣を織つて奉らせ給ふ祭典が即ち神御衣祭で年々夏冬の更衣の事がある通り皇祖の大神にも夏涼冬暖の御誠を盡し遊ばさんとの御心よりこの祭典を皇室にて取行はしめ給ふもので誠に御孝道の一と拜察し奉ることが出来る。

〔月次祭〕 ツキナミサイといふ。六月十六、七の兩日十二月十六、七日の兩日一年兩度の祭典である。この祭典はもと其の名の示す通り月々の御祭であつたのを六月と十二月とに定めて鄭重に祭儀を行はせらるゝことになつたものであるが猶其の起原の月次なりしよりこの祭の名に従はれたものと見える。神宮に於ては最も大切な祭としてこの兩月次祭と神嘗祭とを合せて三節祭とも申して居る。又三時祭とも申して居る。

〔神嘗祭〕 カムナメサイで十月十七日である。神嘗とは神新饗で御先祖の大神に其の年の新穀を奉るを申すのである。それで昔はこの祭を神嘗祭と訓んだものであるが後世音便を以て神嘗若しくは神嘗と稱へ或は又神嘗祭と音讀するやうになつた。

〔新嘗祭〕 ニヒナメマツリで十一月二十三日にこの祭典を執行される。新嘗の本義は新饗で嘗、嘗はその音便である。我が天皇陛下に於かせられては今年の新穀を初めて開食し給ふに就てまづ普く天神地祇に御供へあそばす祭になつてゐる。然るに神宮に於ては十月十七日に神嘗祭を執行はせられた上の事なればこの祭は専ら宮中の御祭

典に屬し宮中神嘉殿に於て十分嚴重なる御儀式が行せられる。

〔遷宮祭〕 セングウサイは二十年毎の宮殿造替に際し大神の御神體を新宮殿へ遷御し奉る御祭り、最近は昭和四年十月二日に取行はせられた。

〔臨時奉幣祭〕 恒例の大祭以外に國家に大事ある場合には其の事の前か若しくは後に於て必ず使を神宮に差遣はされて、幣帛を奉り皇祖に事の由を先づ參らせられ、或は神祐を仰ぎ或は神恩を謝し奉るが例である。之を臨時奉幣祭と申し昔からこの例が澤山あつたものである。近くは昭和三年執行はせられた即位大禮に於ても臨時奉幣の御儀が執行された。即ち昭和三年一月十七日、この年の十一月十日に即位の禮、同十四日より十五日に亘りて大嘗祭の行はせられることが確定告示になると、一月十九日に勅使を差立てられ臨時奉幣の御儀が行はれた。

神宮祭典の大祭といふのは大樞右の如きもので、中祭には、日別朝夕大御饗祭、歳旦祭、元始祭、紀元節祭、風日祈祭、天長節祭であるが之についてはその詳細の點については略する——参考書、鈴木暢幸謹編伊勢神宮と神社一七頁——

而してこの祭典の執行せられる精神は、全く皇室におかせられて、國民を率ゐて尊祖孝道の大道を履ませ給ふものであつて宮中より勅便を差立て、幣帛を給ふ時には、神宮勅使御發遣の儀として宮中に於て儀式を行ひ必ず天皇陛下は御自ら幣物を御覽の上、宮内大臣祭文を勅使に授け幣物を辛櫃に納め、式を終つて御發遣に相成る。之亦全く皇大神宮を重んじ給ふ尊い御精神と拜察し奉る次第である。

#### 4 國民の心得

恐れ多くも我が皇室は、我が國の宗家に在します。我が國の宗家にまします皇室の御先祖をお祭り申上げた皇大神



宮は又恐れ多き極み乍ら我が國民の第一番の先祖にましますこと、に説くまでもない。皇室の尊崇し給ふ所は又國民の尊崇せねばならぬこと、に申すまでもない。さればこそ、昔からこのかた、一生一度はどうかお伊勢参りだけはといつて汽車や、汽船もない不便な時から我が國民は之を一生の願として、お参りをしたものである。汽船が出来、交通の便利な時代になると愈々参拜者は年毎に増加して、一年中参拜者は絶える時がなく特に春秋の氣候のよい時には宇治山田市はこの詣客で毎日々々非常な雑沓を來すといふ有様である。

我等も日本國民と生れたからには日頃皇大神宮の尊いはれをよく心にしめて、せめて一生一度なりと、出来れば數多い程望ましいことであるが皇大神宮に参拜して日頃の願を果したいものである。皇大神宮に参拜するものは心から崇敬の誠を致しかりそめにも禮を失するやうのことがあつてはならない。参拜者として守るべき心得をあげて見ると次の如くである。

皇大神宮参拜者心得

- 一 域内全般に亘つて禁ぜらるゝ事。
- イ 敬意を缺ける扮装。
- ロ 喫烟又は痰唾を吐下すること。
- ハ 域内静肅を亂す所爲。
- ニ 寫眞機を携帯し又撮影すること。
- 二 拜所に於て禁ぜらるゝ事。
- イ 帽子、外套、襟巻を着装すること。

ロ、他人に妨害を及ぼす虞ある物品を携帯すること。

### 5 御神域社殿

それでは我が國にとつて一番大切な社である、この皇大神宮はどこにあつてその御社の有様はどんな模様であるかに就いて少しく話して置くことにしよう。

皇大神宮は伊勢の宇治山田市の郊外に鎮坐し在します。それで伊勢大神宮と稱し又民間ではお伊勢様とも申上ける次第である。伊勢大神宮は實は内宮と外宮とに分れ、皇大神宮と申すは内宮のことである。参宮鐵道に乗り山田驛に下車して向ふに見える鬱蒼たる森林の中に外宮がある。豊受大神を祀り奉る。この外宮から約一里半、六キロ位の所まで行くと内宮神苑即ち皇大神宮の神苑の入口に達する。この間自動車電車の便がある。こゝを進めば幾ばくもなくして大鳥居がある。この大鳥居をくぐるとそこは宇治橋である。宇治橋はかの有名な五十鈴川に架けられた橋である。橋を渡ると又鳥居がある。この鳥居をくぐりぬけると左右には松、櫻、楓などの樹木が美しく植えられ、下は美しい芝生で一面緑の毛氈を布きつめたやうである。参道は美しい小石を布き清淨の氣が身に迫るのを覚える。樹間の空地には日清日露の戦役に於ける戦利品が備へられ、特に砲身の巨大なものが目につく。

かくて参道を愈々進めばこゝに内宮一の鳥居に達する。この一の鳥居をくぐりぬけると祓所がある。祓所まで達すると神々しさ身に迫り自ら襟を正さしむる感がある。道の兩側には千古の大樹老杉が鬱々蒼々として生ひ繁り奥床しい氣分で満たされる。かくて此處の祓所から右に折れて下ると、こゝが五十鈴川の御手洗場となる。五十鈴川の清流は又見るからに清々しく人々は手を洗ひ口を清め容儀を改め身も心も一時に清淨の氣で滿される。

こゝを引きかへして眞直に進むとやがて第二の鳥居に達する。この邊更に老樹大杉鬱蒼として並び立ち、神々しさ



たとへんに物もない。かくして進むこと暫くにして大宮院の石段下となる。大宮院と申すは正殿を中心にして打ちめぐらせる御垣内のことである。

石段を上げれば正殿の御垣内となる。即ち大宮院である。大宮院の敷地は同じ廣さの敷地が東西に相並び二十年毎に東西替るく新しい社殿を御造營になつて御遷宮になる。只今は西の敷地に鎮座します。昭和四年は恰度二十年目の式年に相當するのでその年の秋、社殿の新營成り十月二日を以て遷宮祭が執行され御遷宮に相成つたものである。

——第五十八回の正遷宮。

この石段を上りつめると外玉垣南御門に達する。こゝで参拜者はうやくしく禮拜するのである。襟を正し身をひきしめて拍手を打つと何とはなしに身はシーンと引きしまり、西行法師の

何事の在しますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる、

そのまゝの氣が身に迫るを覺ゆる。御殿の構造は神明造と云ひ、全くの素木造りで萱葺の誠に古風な奥床しい造りで御質素なれども神々しきこと限りなく、千木高く聳え勝男木が嚴乎として立並び、思はずその神々しい神氣に打たるの思がする。皇大神宮の神域は現在九十四町歩ある。それに大正十一年五月帝室御料林である神路山、鳥路山の地五千四百四十町歩も皇室からの特別の思召で神宮司廳に御下賜になり現在では非常に廣い神域となつた次第である。

## 第十六 祝 日

### 一 目的及び教材觀

修身書教師用書に本課の目的を「祝日のいはれを知らしめて愛國心を養はしむるを以て本課の目的とす」と掲げてある。之を以て本課の目的とする所は略明瞭であるといへよう。即ち、先づ祝日の意味を理會させることがそれである。而してその目的は單にそれに止まらない、更にその意味を理會させることによつて愛國心を涵養しようといふのである。それでこゝではこの二つの目的が明瞭に存在してゐる。然しこの二つの目的は決して別々に存在するのでなしに結局は一である。一であるものを両面から見ると過ぎないであらう。即ち祝日のいはれを本當に理會せしむるといふことそのことが取りも直さず一面から見れば愛國心の教養といふ國民的な陶冶になるのであり、更に祝日といふ教材によつて愛國心の教養をしようとすれば、單に愛國心々々々と言つたとて仕様がなないこと、それにはどうしても祝日そのもの、意義を十分に理會させるといふことではなければならぬからである。

一家に誕生、結婚その他の慶事があるやうに、一國にとつても亦國家として祝すべく慶すべき日がある。之即ち祝日である。祝日は國家の一大行事であつて、この祝日を國民が擧つて相共に祝ふ所に非常に國家としての深い意味がある。而して我が國の祝日は四つある。この四つの祝日は各々そのいはれを異にしてゐる。同じ祝ふにしても各々の祝日のいはれを十分に納得して祝ふことになると、その祝意に一層の深味がある。されば國民がその各々の祝日



のいはれを理會するといふことは國民の一つの義務であるともいふべきである。而して國民精神の陶冶とか、國民的統一などいふことはかうした國家的行事を國を擧げて行ふといふことに依つて極めて鮮明になつて行くものである。それで國民的精神の陶冶といふ上から見ても、又各國民が國家に對する義務といふ上からも祝日のいはれを十分に説いて聞かせるといふことは國民教育上頗る重要な事であるといはねばならぬ。

## 二 教材系統

零四、祝日、大祭日。

## 三 指導要項

- 1 祝日
- 2 天長節
- 3 新年
- 4 紀元節
- 5 明治節
- 6 國民の心得

## 四 指導計畫

- 1 本課は祝日各々のいはれを眞に理會せしむればよいのであるから、平易に解いて聞かせ、子供乍らにその祝日のいはれを十分理會せしむるやうにする。
- 2 ほんとうに之を理會せしむるには出来る丈兒童の實際經驗と連絡づけるやうにせねばならぬ。新年には新年獨特の兒童の生活があり、天長節には又運動會を行つて奉祝の意を表したり、それ／＼兒童にとつての、生活があるから、かうした生活と連絡づけて説話を進めることが大切であつて、さうすることによつて彼等の生活に非常な意味を附與することになつてよい指導をすることになる。
- 3 眞の理會を得たならば又その大様を記憶させることも大切なことであると思ふ。よく覚えさせるのである。

## 五 教材解説・説話要領

1 祝日

家に誕生の祝や、祖先の祭があり、又町村に於てもそれ／＼豊年祝やその他記念日としての祝があるやうに我が國家にも又さうした祝日がある。新年、紀元節、天長節、明治節の四つが實にそれである。この祝日は、國家として、又國民として祝ふべき大切な日である。而して我が國は大家族の趣をなして君と民との間は恰かも家長と家族との如き關係をなし、皇室と國民とは實に離るべからざる關係がある。故に國民の祝日は又皇室の祝日であり、皇室の祝日は又國民の祝日である。故にこの日は皇室に於かせられては嚴肅なる御儀式を擧げさせられ、又拜賀、宴會等のことを行はせられる。

今この祝日の各々に就いて述べると次の如くである。



2 天 長 節

天長節は今上陛下の御降誕日を祝ふ祝日である。今上天皇陛下は大正天皇の第一の皇子として明治三十四年四月二十九日に御降誕遊ばされた。それで毎年四月二十九日を天長節として陛下の萬歳を祝し壽ぎ奉る次第である。

皇室に於かせられては、この日掌典長をして賢所、皇靈殿、神殿に於て御祭を行はしめられる。賢所、皇靈殿、神殿の三殿を宮中三殿と申し奉る。賢所をカシコドコロと申し上げ、天照大神を齋きまつる所である。天照大神は伊勢にもいつきまつられてあることは前課に於て述べた所であるが、又宮中にも歴代相傳へ給うた寶鏡の御模造を御靈代としてこの賢所にお祀り遊ばされてある。皇靈殿は賢所の西にある社殿であつて、その間は御廊下を以てつゞけられてある。御構へは賢所と略同様であつて歴代の天皇、皇后を祀り奉る所である。神殿は賢所の東に位置し、お構へ又賢所と略同じく天地の神々を御祀り申した所である。

天長節にはこの宮中三殿に於て御祭典を挙げさせ給ふのであるが、この日は早且より御殿のお飾りをなし、定刻に至れば宮内省の勅任官、奉任官の總代各々一名が床に着くと神樂歌が奏せられ、その間に御殿の御開扉が行はせられる。かくて神饌幣物を供せられ、その嚴肅なることは實に身も心も遠き神代の昔にかへる思がするといふことである。かくて掌典長が祝詞を奏し終れば、天皇陛下には御東帯、黄檀染御袍の御祭服に御笏を持たせられ、式部長官の御先導にて出御まします。侍從御劔を奉じ侍從長、侍從、侍從武官御後に従ひ、天皇陛下は御拜禮遊ばされて御入御になる。次いで諸員の拜禮があつて神樂歌の奏せられる中に、幣物、神饌を撤下し御閉扉となり祭典を終らせられる。かくて又豊明殿に於て皇族をはじめ群臣及び各國大使公使に輔宴を給ふ。

宮中に於てはかくもおごそかな御祭典が行はせられるが、國民も亦この日を心からお祝ひ申上げ、陛下の萬歳を壽

ぐのである。學校諸官署に於ては嚴かな儀式を挙げ、御眞影に拜禮してその萬歳を祝ふのである。この日は全國の儀式場に於て

今日の吉日は大君の

生れたまひし吉日なり

今日の吉日は御光の

さして給ひし吉日なり

光あまねき君が代を

いはへもろ人諸共に

恵あまねき君が代を

祝へ諸人もろ共に

(黒川眞頼作歌)

と心から歌つてその心を表はすのである。又民間の會社や商店その他でもこの日を休んで家毎に國旗をか、けて祝意を表する。又學校によると式後大運動會を開き、大學藝會等を催して祝意を表する所もある。

3 新 年

新年は一月一日で年の始である。この日も大事な祝日であつて、學校でも儀式が挙げられて、

年の始のためしとて

終なき世のめでたさを

松竹立て、門ごとに

祝ふ今日こそ樂しけれ

初日の光さし出でて

四方にかどやく今朝の空

君が御影にたぐへつ、

あふぎ見るこそ尊けれ

(千家尊福作歌)

と聲たからかに歌つてこの日を祝ふのである。この日家々では祖先を祭り松竹を門毎に立て、お雑煮を祝つてこの佳き日を擧つて祝ふ。この日は全國津々浦々皆業を休んで或は遊技としては紙凧を上げ羽子をつき歌留多會を催すなど全く歡樂の氣が天下に充滿する。



この日皇室におかせられては祭典を執行し給ひ、又皇族群臣各國大公使の賀をうけさせられ又宴會をも催し給ふ。宮中におかせられては、新年に於ては略々三つの大きな行事を行ひ給ふ。四方拜と朝拜と新年宴會とがそれである。

**四方拜** 一月一日の朝天皇陛下は早朝未明にお床をはなれ給ひ、先づ四方拜の儀を取り行はせられる。四方拜は一月一日の朝未明に神嘉殿の南の御庭に假屋を造り、寶薦を敷き御屏風を立て廻らし正面に玉座をしつらへ、かくて諸々の準備が整ふと午前五時半やつと東の空が白らむ頃をひ、天皇陛下には御東帯御袍の御祭服を召され御出御になり伊勢皇大神宮を始め奉り、天津神、國津神、大正天皇、明治天皇の御陵、武藏の水川神社、山城の上下の加茂神社、男山八幡宮、尾張の熱田神宮、常陸の鹿島神宮等と順次に御拜禮を行はせられ、天下安泰、萬民幸福の儀を祈らせ給ふ。この御拜が終ると賢所、皇靈殿、神殿の御拜があつて入御遊ばされる。之が四方拜の御儀である。この四方拜の御儀が終らせられると歳旦祭の御式が取り行はせられる。これは略々天長節の御式と同様と承る。

**朝拜** 朝拜は新年の御慶を天皇陛下に言上する意味から出来てゐる御儀式である。朝賀、又は拜賀ともいふのは之である。朝拜の御儀は二日に亘つて取り行はせられる。一月一日と二日とである。天皇陛下には四方拜の御儀をすませ給ふと、やがて天皇陛下皇后陛下お揃ひで宮中正殿に御出御になり、皇族の方々がその御側に列立遊ばされる。かくてこゝに群臣の拜賀を受けさせ給ふのである。群臣の拜賀は一日に参内する者と二日に参内する者と身分や官等によつて分けられ宮内省式部職から官報を以て告示することになつてゐる。

**新年宴會** 新年宴會は一月五日に行はせられる御儀である。新年宴會はこの日内外の文部百官に豊明殿に於て天皇陛下から酒饌を賜はるのである。この日は酒饌を賜はるのみならず天皇陛下は親しく勅語を賜ひ、總理大臣は諸臣を代表して奉賀の詞を言上し、外國大公使の首席大使が之等を代表して奉賀の詞を申述べる。而して宴會中は御庭先に

舞樂臺を造り、古風の舞樂を奏する。之が即ち新年宴會の御儀である。それで新年の祝日といふと一月一日二日及五日の三日間をいふのである。

#### 4 紀元節

紀元節は實に建國の記念日であつて、二月十一日に相當することも國民周知の事實である。神代の昔、天照大神の御孫瓊杵尊がこの國に御降りになり、その御數代は日向の國の高千穂の宮に於て靜かに臣民共に恩徳を施し仁政を布き給うたのである。そのために都に近い九州の南部地方は何時も泰平無事で人民は王化に霑ひ皆安樂に暮すことが出来た。所が都を遠く離れた地方は尙惡者共が多くはびこつて今に王化に霑はず力まかせに土地を奪つたり又物を盗んだりして官民を苦しめた。そこで神武天皇は日向國を舟出しまして東の國へと向はせ給ひ、九州の東海岸に沿うてお舟をお進めになり、瀬戸内海を経て大和に入り色々の艱難辛苦をお續けになり、七年もかゝつてやつと天下を御平定になつた。そこで神武天皇は大和の畝傍山の東南の麓に橿原宮を造つて三種の神器を宮中にまつり、こゝに目出度く即位の式を挙げさせられ、人皇第一代の天皇におなり遊ばされた。この日が恰も只今の陽曆に改めて二月十一日に相當するのでこの日を紀元節としてお祝ひするのである。——國史には元年正月朔とあるが之を陽曆に改めると二月十一日に當る。之は明治五年から始つた御儀である。——

紀元節には宮中に於ては宮中三殿に於て特に大切なお祭典を親祭し給ふ。この日天皇陛下には御東帯の祭服を召し給ひ群臣を率ゐて賢所、神殿、皇靈殿の御祭典を執行し給ひ、御内陣に入つて御拜あり、之が終ると群臣の御拜があつて朝の祭典が終り、又午後には夕の御祭典が行はせられると承はる。この日又天皇陛下には正午豊明殿に御出御になり、文武百官、及外國大公使に酒饌を賜はる。この日又御庭先に於ては久米舞と稱する古風の舞樂を奏する。



而して學校官署では儀式をあげ御眞影に禮拜し

雲に聳ゆる高千穂の

高根おろしに草も木も

なびきふしけむ大御代を

仰ぐ今日こそ樂しけれ』

海原なせる埴安の

池の面よりなほ廣き

惠の浪に浴みし代を

仰ぐ今日こそ樂しけれ』

天津日嗣の高御座

千代萬代に動きなき

基定めしそのかみを

仰ぐ今日こそ樂しけれ』

空に輝く日の本の

萬づの國に類なき

國の御柱たてし世を

仰ぐ今日こそ樂しけれ』

(高崎正風作歌)

と聲高らかに歌ひ祝ひ、日本國津々浦々残る所なく國旗をか、けて祝ふのである。

建國の當初よりこゝに二千五百九十年(昭和五年)代を重ねること百二十四、皇統連綿として千代萬代に動きなきは實に我が國の他國に秀づる所であつて、國民として又とない最も大なる誇であり光榮である。

5 明治 節

明治の四十五年間に於ける我が國の大發展は實に世界の奇蹟として驚異とする所である。之偏に明治大帝陛下の御英明に在りし、政に御勵精遊ばされたことによる事はこゝに言ふまでもないことである。即ちその初年に於て維新の大業を遂げ給ひ、五ヶ條の國是を定めさせられ、廢藩置縣を御斷行になり、明治二十二年には皇室典範及び大日本帝國憲法を制定御發布になり立憲政治を創始し給ひ、或は教育に或は兵制に一として發展せざるなく又外國との交通

盛にして條約を結び、又國威を海外に發揚し給ふなど、實にこの四十五年間の一大發展は列邦の驚嘆する所である。

そこでこの明治天皇の御盛徳を仰ぎ且この明治の盛事を追憶する所あらしめんとして明治天皇御降誕の日十一月三日を明治節と定め給うたのである。明治節の制定は昭和二年三月三日の詔書により、こゝに御制定になつたものである。今その詔書によつてその御精神の程を伺ひ奉ることが出来る。

詔 書

朕カ皇祖考明治天皇盛徳大業夙ニ曠古ノ隆運ヲ啓カセタマヘリ茲ニ十一月三日ヲ明治節ト定メ臣民ト共ニ永ク天

皇ノ遺徳ヲ仰キ明治ノ昭代ヲ追憶スル所アラントス

御名御璽

昭和二年三月三日

内閣總理大臣 若 槻 禮 次 郎 副 署

とある。之によつてその御精神の程を拜察することが出来る。それで昭和二年から十一月三日は明治節として祝日の祭典その他の御儀が行はせられる筈であるが昭和二年は諒閣中にて別に何等のお催しもなく、民間でも別に儀式を擧げる等のことも行はれなかつた。然し昭和三年よりは正式にその式典が擧げさせられることになつた。明治節に於ける祭典は略天長節と同様であつて、宮中三殿の祭典を行はせ給ひ、天皇陛下は親拜の後豊明殿に於て各皇族をはじめ各國大公使、大勳位親任官以下大官約一千名を御召しの上御宴を御開き給ひ、且優渥なる勅語を賜はることになつてゐる。

又民間でもこの日には儀式が行はせられ、懸賞をもつて募集され之に當選した奉祝歌が聲高く

一 亞細亞の東日出づる處

聖の君の現れまして



古き天土とさせる霧を  
大御光に限なくはらひ  
教あまねく道あきらけく  
治めたまへる御代尊

二 惠の波は八州に餘り  
御稜威風は海原越えて  
神の依させる御業を弘め  
民の榮行く力を展ばし

外つ國國の史にも著く  
留めたまへる御名畏  
三 秋の空すみ菊香高き  
今日のよき日を皆ことほぎて

定めましける御憲を崇め  
諭しましける御勅を守り  
代々木の森代々長へに  
仰ぎまつらん大帝

と歌はれる。尙この日は各地舉つて運動會を催したり、その他種々の催物をしてこの日を祝ふ。更に明治神宮外苑神宮競技場に於てはこの日を中心にして盛大なる競技會が行はれる。

6 祭日に於ける國民の心得

祝日は我が國に於て最も大切な式日である。それであるから上來述べたやうに官中に於かせられても極めて御丁重にして嚴かな御祭典を取行はせられ、更に色々のお催を行はせ給ふのである。

國民たるものはよくその各々の祝日のいはれを辨へ、謹んでその各々のいはれに相應しい祝意を表することに氣をつけねばならぬ。

7 祭日に於ける國民の心得附説

我が國にはこの四つの祝日の外に尙七ツの祭日がある。即ち

元 始 祭	一月三日
春季皇靈祭	春分の日
神武天皇祭	四月三日
秋季皇靈祭	秋分の日
神 嘗 祭	十月十七日
新 嘗 祭	十一月二十三日
大正天皇祭	十二月二十五日

の七つである。この日も亦それごとく國家として大切な日であるから、官中では祭典を行はせられ、諸官署學校、銀行會社等は各々休業してその意を表する。我々は國旗をかゝけて國民としての眞心を發揮すべきである。



## 第十七 儉 約

## 一 目的及び教材観

「無益に物を費さず常に儉約を守るべきを教ふるを以て本課の目的とす」とは修身書教師用書に掲げられたる本課の目的である。何事に限らず、物をみだりにすること、無益にするといふことはその物の存在する眞の意義を發揮せしめないことであつて一種の罪惡である。物はすべて、何等か人生へ寄與せしむるやう、反面から見れば無益に終らしめないやうにすることが大切であつて、之を無益に終らしめてはならない。されば、吾々は、物を用ふに當つては常に自ら心の中に一つのつゝしみをもち、無益浪費をつゝしむ所がなければならぬ。

然し、兎角人は物をみだりにし、粗末に取扱ひ易いものである。然し、それは一つの罪惡であるといふことを深く心の中に悟る所がなければならぬ。それと共に、一身一家の經濟、引いて一國の經濟といふやうな、功利的な見地に立つて考へて見ても、物をみだりにするといふことは由々しき事であつて、そのためにやがては生活の脅威を感じ、その報ひは決してよいものではない。

かく物をみだりにせぬと共に、又身分相應の贅澤に陥ることもつゝしむ所がなければならぬ。人間には、名譽心があり、美的追求の欲望があつて、人よりも美しいもの、人より綺麗にといった氣持も働き、自分獨りとして考へても出来るだけ便利に、しかも美しくといった氣持が私達を支配する。さうした心が増長して行くと、ついに贅澤になつ

てしまふ。然し、儉約、質素が、禮儀にもとるやうな事であつては、それは眞の儉約ではない。

儉約といひ質素といふはその人その人の身分地位に應じて考ふべきことであつて、おしなべて一概にはいへない事である。分に過ぎるといふことが贅澤である。

かくて無益の費を省き浪費をつゝしむ、贅澤をさけ、以て半面には大いに勞働に精を出し、かくて餘裕は之を有利有益の業に用ひ、又は貯蓄をして非常有事の備にするといふことはこの上もなく大切なことである。

## 二 教材系統

尋一、物を粗末に扱ふな。 尋五、儉約。 高一、質素。 高二、恭儉。

## 三 指導要項

甲 徳川光圀の例話

1 徳川光圀の略傳

イ 徳川光圀の生立

ロ 光圀の尊王心と大日本史

2 光圀の儉約と日常生活

イ 光圀の衣服

ロ 其の食膳



ハ 其の居室

3 女中等に紙漉場を見せた話

イ 光圀殊の外紙を大切にす

ロ 女中に紙漉場を見せた話

4 光圀が家臣等を戒しめた言葉

5 光圀は決して吝嗇ではなかつた

乙 儉約の必要

1 光圀の例話考察

2 儉約の必要

3 儉約を守るについての心得

4 儉約と貯蓄

5 儉約は決して吝嗇でない

四 指導 計畫

1 本課の例話は有名な徳川光圀である、光圀は單に儉約を守つたから偉いのではない。その人と爲りについてもその大様を説いてその人格的背景を描いてやるといふことが大切である。

2 光圀の儉約を説くについては、その人格的背景は勿論、尙、時代の背景、身分上の背景の上に説くことが大切

である。身は二十八萬石の大名であり、しかも封建時代の階級的勢力の強い時代に於て、かくの如き儉約の守られたといふことは實に普通人にとつては非常なよき教訓である。

3 儉約について兒童直接の問題は物品の購求とその使用法である。別けて其使用方が最も直接の關係を有する。

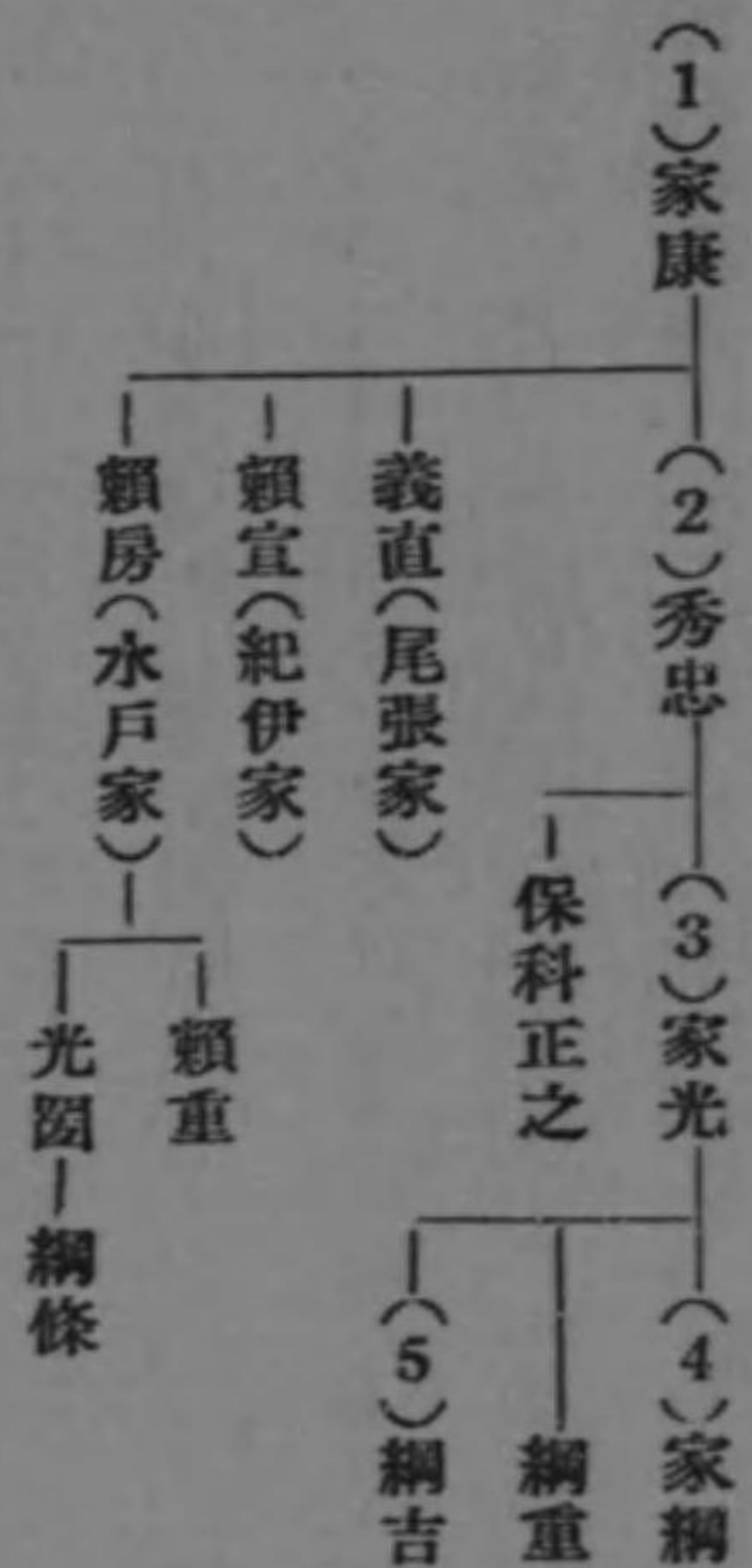
この點については十分實際的にその使用法、物の購求方等について指導する所があつてほしい。

五 教材解説・説話領要

甲 徳川光圀の例話

1 徳川光圀の略傳

4 徳川光圀の生立 徳川家康と言へば誰でも知つてゐる通り徳川幕府第一代目の將軍である。徳川家康の第四子頼房の第二子が即ちこゝに述べんとする徳川光圀である、今その系圖を示すと次の通りである。



光圀の生れたのは今から凡そ二百五十年前(寛永五年)幼名を千代松と言ひ、家康の孫だけあつて幼い時から勇氣もあれば學問もよく出來た。僅か六歳の時に



ふる雪がおしろいならば手に取りて小がうの顔にぬりたくぞある

と詠んで人々を驚かしたこともあつた。小がうとは千代松の妹である。又七歳の時に江戸小石川なる水戸家の屋敷に於て或晩父の頼房は晝間に殺した罪人の首をとりに行つて来いと命じた。仕置場は櫻の馬場といふ所にあるので邸から五町ばかりも隔つてゐる。しかも途中には小山もあれば、繁つた森もあつて、眞晝でもこゝを通る人は一寸小氣味の悪い所であつた。それに、夕方から降り出した小雨は、しきりと降り一寸先も見えぬ眞黒暗である。この様な物さびしい暗夜にもかゝらず、たつた七歳の千代松は少しの臆する色もなく、たゞ一人仕置場の獄門臺に攀ぢ上り、手探りに生首を取り、髪をひつゝかみながら、提げて見たが首があんまり重いので、紐をつけてする／＼と引すりながら途中休み／＼して漸く邸に歸つて来た。邸では父の頼房をはじめ一同の者、時刻になつても歸つて来ぬので心配でならぬ。わけても頼房は「臆試しとは云ひながら年行かぬ者を」と之又氣が氣でならぬ。

一同の者共、痛く氣をもみ心をいらだたせてゐる所へ「おそくなりまして」と悠々然として歸つて来た。一同の驚き一方ならず、父頼房の喜びは又一通りではなかつた。遂に喪美に名刀一振を興へた程であつた。

かくの如く幼少からすぐれた素質を備へてゐた光圀は長じて文武兩道ながら衆に秀で、水戸家の第二代目をつぎ賢君として譽が高かつた。

□ 光圀の尊王心と大日本史 光圀は偉大なる人格者であつただけに、その事蹟に富んでゐる。しかしわけて特筆すべきことの一つは非常に尊王の心に富んでゐたといふことである。

毎年正月元旦には早朝未明に床をはなれ沐浴して烏帽子、直垂をつけ、庭に下り立つて西の方遙かに京都の御所を拜し、次に徳川累代の祖先に禮拜したいふことである。又楠木正成戦死の場所である兵庫湊川に「嗚呼忠臣楠氏之墓」

と刻ませてその墓碑を建て、今にその墓碑は湊川神社の境内に存してゐる。之なども、楠木正成の如き大忠臣が、その當時多くは知られずゐるのを非常に之を嘆いてゐることで、一つにはその忠節を國民に知らせ、又一つには楠木氏の忠誠を萬世までも傳へんとする真心である。その外光圀が尊王の精神に富んでゐたことを物語る話はいくらも傳へられてゐる。

が特に光圀の世界にも誇るに足る大事業は大日本史の編纂である、本書は神武天皇から第百代、後小松天皇に至るまでの國史である。一々のことについて充分な調査をとけ、正邪善惡を區別し、特に國體の分明については細心の注意を拂つた。本書は光圀によつて手を染められ、全部完成したのは明治三十九年であつた。全部で四百三卷、業を始めてから二百五十年、子孫十二代其の志を受け繼いで遂に完成したもの、その研究に於てその量の多いことに於て、その長年月を費した點に於て、その研究にたづさはつた學者の數に於て世界に未だかくの如きものはないと言はれるものである。

かの維新の大業はこの大日本史の編纂によつてその氣運を作つたことは實に大であるといはれてゐる。

隠居の後光圀は中納言に任ぜられ水戸黃門とも稱した。晩年諸國行脚をなし、名高い水戸黃門記がある次第である。元祿十三年七十三歳を以て逝いた。謚して義公といふ。

朝廷に於ては特に從二位權大納言を贈られたが、更に明治二年十二月二十五日に從一位を追贈され、越えて明治三十三年には位階最高の正一位をさへ追贈された。之全く光圀の高潔なる人格と偉大なる功績との然らしむる所で光圀の光榮實に此の上もなしといふべきであらう。

## 2 光圀の儉約と日常生活



光圀人品にすぐれ、衆人の模範とすべき行が多かつたが、その中でよく儉約を守つたお話を述べると次の如くである。光圀の儉約は誠に行届いたもので、日常の生活一切が誠につまじやかなものであつて、何一つ贅澤と思はれるものはなかつた。

イ 光圀の衣服 光圀の衣服は常に質素なものであつた。正服の外不斷の服は縫ひ綴りをしてまで之を用ひ、やぶれて用に堪へないやうにならねば、決して之を改めて造るやうなことはなかつた。彼は何時も茶縮緬の頭巾を用ひてゐたが、この頭巾の如きは四十年間も用ひたといふことである。袴なども平素用ひたものはその糸目が切れ、そこそこにつぎのしたものであつたといふことである。

そのやうに自分自ら質素を旨としたが、夫人にも質素をすゝめ、決して絹布の類を用ひしめず、召使の者にも地を曳くやうな衣服は之を用ひることを禁止したといふことである。

ロ 其の食膳 衣服について質素であつた光圀は食物も亦非常に質素なものであつた。朝夕の膳は一汁二菜又は時に三菜であつたといふ。そして決して山海の珍味といつたやうなものは用ひず、極あつさりしたもので、魚鳥の如きものでも多く之を用ひなかつたといふことである。

ハ 其の居室 その居室の如きも極めて狭く且質素なものであつた。それについてかつて尾張公が光圀の居室に通されて餘りの龜末に驚き入り、且感心してしまつたといふ話がある。感服の餘り尾張公は自分の館に歸ると、家臣を集め戒めて言ふには「本日水戸殿の居間に案内があつたので、あのやうな學者であるから定めし唐模様にも美々しく飾り立て、あること、思ひの外、入つて見ると部屋は非常に狭く、而も非常に龜末なものである。そして驚いたことには天井や壁などは皆反古で張り、我が方から遣はした書翰などもその中に見えた。あまりのことに仔細を尋ね

たら、公は之で十分事足りる。天井と壁とは塵を防ぐ爲に手づから張られたとの事であつた。又心安きまゝに給仕には召使の女中共が出たが、孰れも容貌も美しきものは少く、衣服なども至つて粗末であつた。是等の趣を其方共へも後日の心得の爲に特に聞かせて置く。」とのことであつた。聞きゐた士ども、餘りのことに驚き入つたとのことである。

之が徳川御三家の一、水戸二十八萬石の大名の生活であつた。名もなき凡夫の生活ならばいざ知らず、徳川全盛の時代に於て飛ぶ鳥も落す權威のあつた、御三家の中の一、水戸家の生活と思へば、それが如何に質素であり儉約であつたか、實に想像するだにその徹底したものであつたことに驚かされる。

### 3 女中等に紙漉場を見せた話

イ 光圀殊の外に紙を大切にす 光圀は何一つ贅澤をし物を徒らにしたものはないが、わけても紙を大切にしたいといふことである。諸方から來た書翰類もその長短の別なく之を集め之をついで詩歌の稿にはかうした反古を用ひ、疊の上などに水がこぼれても決して之を紙で拭かせるやうなことはなかつた。そして必ず布を以て拭かせたといふことである。

ロ 女中に紙漉場を見せた話 そこで奥女中等にも常に紙を粗末にしてはならぬといはしめてゐた。然し女中などには紙の大切なことを辨へずして粗末にする習慣がどうしてもなほらなかつた。光圀は何とかして此の悪い習慣をなほしたいものであると考へた末、之は女中等がどんな苦辛の末に紙が造られるものであるかといふことを知らないからであるに違ない。これには一つ紙漉場を女中等に直接見せるが一番よからうと思つて愈々之を見せることにした。

それから或村の紙漉場に沿へる川の上に棧敷を造らせて置いて、北風の身を切るやうな或冬の寒い日に女中共を差



し遣はしてその棧敷の上から紙漉女の働く有様を見させた。その棧敷や板の上などに結ぶ霜は雪よりも白く、汀の霜柱は針の如く立つてゐる、又そこ／＼の水溜りには水さへはり、その寒さは實に堪へられない有様であつた。この寒さに川の中に入つて働く女の寒さはどんなであらうかなどと思つて、棧敷の上になつてゐると、まもなく數多の紙すき女がこの寒さをもいとはず、脛もあらはに跣足のまゝ、霜の上をふみ水を破つて川に入り餘念もなく立働いた。

この有様を見てゐた女中たちは見てゐてさへ身を切らるゝ、思がした。そこで痛く紙漉女等の辛苦の程に感じ且同情して歸つた。女中共は歸ると光圀にその日の模様を残らず物語つた。そこで光圀はすかさず「紙を漉く有様を實際に眺めると一枚の紙と雖も之を造るといふことは決して容易なことではない。一枚の紙も紙すき女の人たちがあの寒風に吹かれながら水を破つて水に入り、非常な難儀苦勞をして出来るものである。自分などは之を思ふと決して一枚の紙と雖も之を粗末にしては相濟まぬではないか。」と懇に説いて聞かせたので、女中等も「如何にも」とよく光圀の戒めによつて悔悟し、之からは決して一枚の紙も粗末にすることはなかつたといふことである。

#### 4 光圀が家臣等を戒めた言葉

徳川御三家の一、二十八萬石の光圀である。一寸やそつとの贅澤をしたとて家にこたへることのないのは勿論、世人も亦之に對して惡評などする者が誰あらう。何不自由のない身の上であり乍らも、かくの如く質素儉約を自ら實行して來たことは、實に尊くも又けだかい次第と感ぜざるを得ない。

光圀が常にその家臣等を戒めてゐた言葉があるが、之などは實に水戸の家臣などに限らず一般の人々又何時如何なる時代の人達にもよい戒であると感ずる次第である。

『上は天下國家の主から下は庶人に至るまで皆節儉を以て最上の徳とすべきである。今日は天下泰平でよく治つて

ゐるので人々は何時とはなしに心が弛み勝ちになり、奢侈贅澤になつて來て、衣服や馬鞍、その他刀の類から日常の諸器具食物の類に至るまで皆美を争つて止まる所がない。こんな有様では久しからずして天下は皆困窮に陥つてしまつてどうともすることは出来ないであらう。人の頭に立つ人はせめて漢の文帝の如き儉約を守つた人を手本として身持を慎しむべきである。又下々の士や庶人も身の程に隨つて儉約を守つたら親類友達を助けることも出來、又子供への色々の諸藝を躑けることも出來て結構なことに違ない。但し考へねばならぬことは節儉と吝嗇とはともすると紛るゝものであるから、その區別をよく辨へて間違の起らぬやうにすべきである。上なる人が吝嗇となれば諸人がなつかず、下なるものが吝嗇になれば親類や友達が睦び合はないで人情をかぐことになる。』と。

#### 5 光圀の儉約は決して吝嗇ではなかつた

儉約と吝嗇との同一でないことを知つてゐた光圀は實に儉約ではあつたが決して吝嗇ではなかつた。それは彼が貧しい者と見ればよく金品を與へ米穀を恵んだことでも分るであらうし、又特に寛文十二年に起つた常陸一帯の大旱魃は遂にこの邊一帯を饑饉に陥らしめ、糧食がなくて苦しむ者が澤山であつたが、光圀は少しも惜しむ色もなく自分の米倉を開いて窮民に給與した事でも明らかである。

大日本史編修に關してはその入費のかさんだことは實に夥しいものであつた。或は人を遣はして材料の蒐集にあたりしめ、或は澤山な學者達を養ふなど、その費用は實に莫大を極めたのであつたが、かかる有用な費用に對しては彼は決して之を惜しむやうなことはなかつた。

これでこそ眞の儉約であるといはねばならぬ。儉約は決して有用の費用を惜しむものではない。



## 乙 儉約の必要

## 1 光圀の例話考察

主なる説問

- イ 光圀はどんな身分の人であつたか。
  - ロ 光圀は日頃どんな暮らしをしていましたか。
  - その着物は、その食物は、その居間は。
  - ハ 女中達が紙を粗末にするのを見てどんなことをしたか。
  - ニ 女中達は紙漉場から歸つてどんなことを話したか。
  - ホ それから女中達はどうしたか。
  - ヘ それでは光圀は吝嗇な人であつたか。
- 等の發問をなし、光圀の身分、彼の儉約について十分理會せしめ、次の訓辭に入る。

## 2 儉約の必要

物は決して之を無暗に費してはならぬ、一枚の紙といへば之を金高にして見れば勿論それは僅かなものであるに違ないが、しかし金高にしては僅かなものであつても、之を浪費することになればほんとにその物を役立たせてやらぬことになる。私達は凡ての物に對して、それ等のものをほんとに役立たせてやるやうに心がけるといふことは實に大切なことである。

一本の鉛筆半截の紙一片のゴムでも、之を粗末に亂雑に使用することなく、之をほんとに使用して役立たせることに

氣をつけねばならぬ。

なる程一枚の紙、一片の鉛筆を金高に換算して見たならば僅かなものであるに違ないが、その物の出来た由來に就いて考へて見ると、中々容易なことではない。光圀は女中たちが紙を粗末にするので紙漉場を見せたのであるが、これによつて成程一枚の紙でも容易なことでは出来るものではないと氣づくとなか／＼粗末には出来ない。そこで非常に之を丁寧に取扱ふやうになつた。そのやうなもので我々は凡てどんな些少なものであつても之をその出来た由來について考へて見ると並大抵なことでは出来ない。澤山な人手と手數と努力と時間とを要してゐるものであることに氣づいて十分に丁寧に儉約して出来る丈けつ、ましく使はねばならぬ。

一つの物についてはさうであるが同じ用に供するものでも決して贅澤に陥つてはならぬ。出来る丈け我慢して贅澤に陥らぬやう氣をつけることは大切なことである。然し世の中が日一日と進歩發展して行くと人々はどうしても贅澤に陥るやうになつて来る。現今は皆の人々が餘りに華美に流れてゐるのに困り切つてゐる有様でないだらうか。いま少しく健實な質素な風潮といふものを養はねばならぬ。それには國民全體が今一度心をウントひきしめることが大切である。人心がハイタイチクワンするとそれが財に向へば放縱になり、贅澤三昧に耽るやうにもなつて来る。それであるから人々は常に心をひきしめて弛めぬやう心がけてゐると、儉約などいふことも實行されるやうになる。光圀公が儉約をよく實行し得られたのは一つは實にひきしまつた生活をつゞけた事に起因するであらうと思ふ。とにかく儉約といふことは大切なことであつて之を實行するにはどこまでも我々は何時も心をひきしめてゐるといふことが大切であると思ふ。

## 3 儉約を守るについての注意



我々が儉約をなすについての注意は色々あるが、その重なるものを言へば、

イ 品物を丁寧に使へよ 品物を丁寧に使ふといふことは儉約としての大なるもの、一つである。一年二年も使用出来るものを僅か半ケ年で使ひ古して他の品物とかへるといふことになつては之をどうしても儉約といふわけには行かぬ。一年よりも二年、二年よりも三年、三年よりも四年と一年でも一日でも長く使用に堪へるやうに使ふ。それには丁寧に取扱ふといふことが大切である。即ち、

(一) 破損せぬやうに使用せよ。

(二) 破損したら修繕して使用せよ。

といふ二つの事項を堅く守ることが大切である。

ロ 廢物を利用せよ 然しどんな品物でも何時かは破損して使用に堪へなくなる。然しそれを又そのまま、廢棄してはならぬ。何にか役立つではないかとその利用の道を考へて再度何かの使用に役立つやうにせねばならぬ。

例へば鉛筆で書き古した半紙は又お習字に使はれ、又お習字に使つて入らないやうになれば、之を塵紙に使用することも出来る。廢物を利用するといふことは、確かに忘れてはならぬ儉約の一つである。我々はよく工夫して利用の道を考ふべきであると思ふ。

ハ 贅澤な品物を求むるな 品物は決して贅澤なものを求めてはならぬ。贅澤から贅澤と贅澤を追つて行くことになると何時まで行つても果しがなくなるであらう。必や贅澤に陥ることを慎まねばならぬ。

ニ 丈夫な物を求めよ 贅澤に陥らぬやうにといふので安つぱいものを求めて、すぐに破損するやうなものを求むるのも決して儉約とは云へない。「安物買ひの錢失ひ」といふことがあるが、かゝることに陥つてはならぬ。どこまでも

も丈夫な品物を求むることに氣をつけねばならぬ。

ホ 不用な品物を求むるな 我々は時々價が安いといふので不用なものを求めるやうなことがないでもない。之位不經濟なことはない。我々はどこまでも不用な品物を求めるが如きことは一切さけるやうに氣をつけねばならぬ。

#### 4 儉約と貯蓄

儉約をすると共に餘つたものは之を貯蓄するといふことも、大切なことである。人は、何時如何なる災難に會はんとも限らぬ。かゝるとき日頃儉約してその餘りを貯蓄して置けばそれがどれ位役に立つか知れない。こゝに一人の男があつて日頃よく儉約してその餘りは常に貯蓄してゐた所が不圖したことが原因となつて病氣になつたとする。かゝる場合少しの貯もない人は十分な養生も出来ないで、その養生の出来ないといふことからあたら一命を失はねばならぬことに立至らぬとも限らぬ。所が貯ある者は安心して養生も出来、従つてそのため再び健康な身體に恢復するといふやうな事も、世の中には随分多いことである。それで我々は何時も餘裕あるものはその次の用にたしなむといふことが大切である。

イ 郵便貯金 子供達が貯金をするのに最も便利なのは郵便貯金である、子供達も或は益正月、その他父母兄弟、又は親類知人等からいくらかづつの金などを不時に貰ふことが珍しくない。かゝる金は之を浪費することなくして僅かづつなりとも貯金して置くと何時の間にやら澤山な金高にもなるものである、それは實に、「塵も積れば山となる」である。僅かだからと言つて浪費してしまへば何時まで経つても貯金の出来ることはないが、僅かづつでもかまはないからその時々貯へて置くと、いつの間にも驚く程の金高にもなつてしまふものである。いくらかづつであつても貯金をする習慣を子供の中から養ふといふことはそれだけでも大切なことであると思ふ。



## 5 儉約は決して吝嗇ではない

儉約々々と言つてケチンボウになつてはならない。即ち吝嗇家になつてはならない。儉約は日常の費用を出来るだけ辛抱するのであつて決して出すべき金も出さぬといふのではない。世の中にはよく儉約の餘り、出すべき金も惜しむ人があるが、それは褒めたことではない。大事な寄附金を拒んだり、又納税を怠つたりするがそれは誠にけしからぬことであると言はねばならぬ。

ほんとに有用な必要な金を出すために儉約するのである。その點になると光圀の儉約は誠に立派なものといふべきではないだらうか。儉約と吝嗇との異なるといふことをほんとうに分らせるためによい材料は國語讀本卷六に出てる次の文章である。

## けんやくと義捐

或村に大火事があつて一村ほとんど丸焼けになつた、其のとなり村の青年たちが見かねて方々へ義捐金をつのりに出た、或物持の所へ行くと下男がまだ使へる小籠を捨てたと言つて主人がひどくしかつてゐた。青年たちは之を聞いてさゝやき合つた。「こまかな人だ。これではとても義捐はしてくれない」「さうかも知れない」さて主人に火事の話をして義捐金のことを言ひ出すと「それは氣の毒だ」と言つてたくさん金を出した上に榎や豆の種を分けて上げてよといつた。その歸り途で青年たちは「こまかな人が出す時には出すね」「全くだ。あんな小言を言ふ程だから此の義捐が出来たのだらう」「さうだ、／＼」と言ひ合つた。よく味ふべき文でこの心を教師は背景にもつて儉約を説かぬととかく儉約と吝嗇とが一緒になつてしまふ。

## 第十八

## 慈

## 善

## 一 目的及び教材觀

人生の表面を皮相的にながめた時、そこに何等の苦もなき人にとつては、恰かも一の歡樂境の如くにも見えるに違ない。然し一步をその眞の内相に踏み込み、廣く人生の凡ゆる方面を眺めて行くと、決して人生は單なる歡樂境とのみには見られない。「働けど働けど尙我が生活樂にならざり、ちつと手を見る」と啄木が詠んだが、さうした貧苦、働けど働けど尙日々の生活に追はれ／＼喘ぎ／＼苦しむ者も決して少しとしない。現代に於ては失業者と稱せられる者は年々その増加を示し、衣食に苦しむ者の數は日に／＼増加を示してゐる。それは決して生活に苦しむ者に限らない生れ乍らにして盲なるあり、啞なるあり、聾なるあり、又精神の薄弱なるあり、實に種々様々である。而して又一時的な變動として戰亂のために良民が苦しみ、又は天變地異のために多くの人々の苦しむ場合などあけて來ると限りはないが、兎に角現實としてこの世は決して幸福のみに充されてゐないは事實である。

而して人は本性として、かゝる不幸の者を見た時、同情憐愍の情を有してゐる。この本性としての同情の心をそのまゝ發揮して、之等に對して恵みを施して、その身を立ててやるやうにすることは大切な事と云はねばならぬ。大切なことであるといふよりも、それは人間當然の道であり、人間本來の生活そのものである。然しこの本性を妨けて、醜き姿となつて私達を支配して行くものは實に私利であり私欲である。されば一面慈善同情の施しはそこに斷乎とし



て私利を去るでなければ遂げられない所であるといはねばならぬ。

本課は修身書教師用書の目的に「他人の疾苦に同情し慈善を施すべきことを教ふるを以て本課の目的とす」とある通り、自己の私利私欲を去つて他人の疾苦困窮に同情して慈善を施すやう教育するのがその目的で社會生活の上から亦人間生活の上からも頗る大切な課である。

## 二 教材系統

尋一、おもひやり。 尋二、人の難儀をすくへ。 尋四、博愛。 尋五、博愛。 尋六、慈善。 高一、同情。 高二、博愛。

## 三 指導要項

### 甲 今右衛門一家の例話

- 1 天明の大飢饉
- 2 鶴岡町民の慈善
- 3 鈴木今右衛門一家の慈善
  - イ 今右衛門の慈善
  - ロ 其の妻の慈善
  - ハ 其の娘の慈善

### 乙 慈善に對する訓辭

- 1 例話の考察
- 2 慈善の必要（附格言の取扱）
- 3 特に公事のための不具廢疾者に對する心得
- 4 慈善の心得
- 5 慈善と儉約

## 四 指導計畫

- 1 先づ例話を取扱ふがよい。本例話をほんとに理會せしむるには、第一に天明の飢饉の慘狀を説くことが大切である。飢饉の慘狀を説くには封建時代の割據的な時代的背景と交通機關の不備による救濟困難等を説いて十分飢饉の有様を描くことが大切である。
- 2 今右衛門一家の慈善については十分にその内面的の精神的過程を描き、しかも自分がかゝる事情にあるとき一體どうするであらうかと比較對象して考へしめ、その尊い内面的精神を味はしむることが大切である。
- 3 慈善は必要であるが徒らに物を恵むことが眞の慈善にあらざることの理會せしむることが必要である。それと共に相手は兒童で未だ生産力のない彼等であるから金品を恵むといふことがさう自由になるわけでない。その邊の心得は極細心に注意を與へぬととんだ失敗を招く憂もなしとせない。
- 4 停車場、又は自分の學校等に慈善箱のある所は、この際、その精神を説き、之に對する心得を知らして置いて



ほしい。著者は、一年生の時から學級内での拾物は、その拾主の分らないものは、子供の代表者をして、慈善箱に納めることにしてゐる。

- 5 特に戦争又は公事のために不具廢疾となつた人に對しての心得、之は教師用書にも特に注意を擧げてゐるが、この注意を忘れないやうに取扱つてほしい。その理由はこゝに述べるまでもあるまい。
- 6 慈善と儉約の關係はこゝでよく説いて聞かせることが大切である。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 鈴木今右衛門一家の例話

#### 1 天明の大飢饉

4 天明の大飢饉 今から凡そ百四十年前程前、天明の前後は餘程年まはりが悪かつたと見え、内を見ても外を見てもかんばしくない事ばかりのやうである。その頃は徳川幕府が一切の政治の權を握つてゐた。將軍は第十代家治である家治自身は大變立派な將軍であつたが、側に仕へた田沼意次が勝手氣儘に振舞つて著しく政治は亂れ、人々は惡政に苦しまされた。その末期が即ち天明である。

天明の頃と云へば幕府の政治も亂れてゐたが尙それよりも人民の困つたのはあの大飢饉である。この時の飢饉は餘程はけしかつたものと見え、天明の頃と云へば今でさへ誰でも『あの大飢饉の頃か』と思出される位人々の腦裡に深刻に刻みつけられてゐる。この時の飢饉は何時もの飢饉とは全く異なつてゐた。普通の凶作とか飢饉とか云ふと一年位でその翌年はともかく作物は採れるものであるが、天明の飢饉はさうではなく凶作の起つたのが天明二年でこれが

ら毎年々々の凶作でそれが天明六年まで滿五ヶ年全く五穀が實のらず不作續きであつたのであるからたまらない。それが奥羽地方の大部分を襲つたのであるからその被害困窮は察すべしである。

その五ヶ年の凶作の中で最も激しかつたのが、かの天明三年の凶作である。この年はどうした天候の關係であつたか不思議に雨の多い年であつた。春から毎日々々だらしない鬱陶しい雨が降り續いて太陽の光を見る日は極々稀であつた。それに六月に入つてからは愈々雨も激しくなり六月十日頃からは大雨となり、十六七日の兩日は非常な大雨で各所の川は皆非常な氾濫をして大變な洪水であつた。特にあの利根川の大洪水は非常なものであつたと傳へられてゐる。そのため、田は流され畑はつぶされその惨状は目もあてられぬ有様となつてしまつた。それに又困つたことにはその翌月の七月には上野から信濃を中心にして地震があり、それに信州の淺間山が大噴火をして石を飛ばし熔岩を流し灰を降らした。この災害を被つたのが實に附近三十五ヶ村方二十里に廣がり死んだ者さへ三萬五千人といふのであるから大變な大騒ぎであつたに違ない。

春から降り續いた雨は夏になつても止まなかつた。秋になつても思はしい天候ではなかつた。それに冬にも入らぬ前からどうした不順な年まはりが大變な寒氣を催して秋口の頃から人々は綿入を出して著たさうである。春から降り續いた雨は尙止まず、それに大洪水はあり、それさへ困るのに剩へ地震だ大噴火だと來たから人民達はたまらない。田畑は全く不作で米粒一つ採れない有様になつてしまつた。その前年が豊作で、もあればまあ人々も何とかして餓を凌ぐ事も出來たであらうに、前の年も飢饉と來てゐるのであるから人々は全く糧米に行詰つてしまつた。食ふにも米粒一つなくなつてしまつた。

□ 其の慘狀 只今のやうに一國がしつかり治つてゐれば直ちにそれ等の窮民を救ふことも出來たであらうが、まだ



その當時は大名が互にその領土を私有し而もその當時は大名同志は互に、戈こそ交へないがその割據的な精神の非常に強い時代である。それに交通運搬の便はなし、奥州殆んど全般に亘るこの大飢饉をどうすることも出来なかつた。それであるから奥州の人々は皆今や全く餓に迫つたのである。はじめの程は、ともかく救助の道も講ぜられてあつたであらうが、範圍は廣しそれに久しきに亘る飢饉のことであるからどうする事も出来ない有様であつた。

全く糧食の盡きた住民等は餓に堪へられない。それかと云つて食はぬわけには行かぬ彼等は争つて木の皮をけつり木の葉を摘みとつて之を食つた。それでも糧食は足らなかつた。遂には木の根までも掘つて食はねばならぬ破目に陥つた。木の根も掘りつくした、彼等は野に出で畑に出て草といふ草は、毒草でない限りは之を掘りとつて食つたのである。しかし之でも食糧の足りやう筈はない。餓に迫つた窮民達は皆路傍にゴロ／＼して人々の恵みを乞ふ有様となつたが、それでも食糧は自由にならぬ有様であつた。そのために日に／＼餓死する者が非常に數に上つた。そして特に悲惨の眉をひそめさせる話は、餓に狂ふ窮民達が餓死する者があると寄つてたかつてその死人の肉を貪り食つたといふことである。その慘狀を察すべきではないか。それに又困つたことにはかうした大洪水があつたり、淋雨が續くと自然衛生状態が思はしくない。その爲又非常な悪疫が流行し出して、唯さへ困苦に堪へない人々を更に一層苦しめたといふことである。

## 2 鶴岡町民の慈善

鶴岡は只今山形縣に屬し今でも屈指の一都邑で人口二萬を越え相當に繁華な町である。しかしその當時は酒井氏の城下にあたり、その繁華な事は現今の比でなかつた。天明の此の飢饉が襲ふと附近一帶から餓に迫つた窮民達が續々と城下鶴岡に押寄せた。當時城下と云へば物資の最も集つてゐる所であるから、彼等の押寄せたのも無理もない事であつた。

ある。而してその數は實に夥しい數に上り、往來はそれ等の人々で押合ふ程の人混を生じたといふ事である。かくて鶴岡の町民達は之等の窮民に對して心から同情をした。そして人々は皆力を合せて出来る丈の救恤をしたといふ事である。町はづれにゐた一僧の如きは東奔西走著ある人を説いて「かゝる折こそ慈善を施さねば日頃の儉約が役には立つまい」と云つて金品の喜捨を願つて之等窮民を救つたといふ事である。

## 3 鈴木今右衛門一家の慈善

かゝる非常の場合に於て、貧民を救つて慈善を施した人々も少なくないが、此處に今右衛門一家打揃つての慈善の如きは實に感ずるに餘りある千古の美談である。

1 今右衛門の慈善 今右衛門は始めの程は御中間小頭を勤め侍の下役であつたが、若い時から心がけのしつかりした人であつて、よく勤めも勵み又生活も質素で儉約を守つたので、年々貯蓄も増して行つた。そこで晩年は全く役目を引いて田地を耕作して働いてゐた。日頃心掛けのよい今右衛門の事であるから家産は年々増す一方であつた。

所が今度の大飢饉が襲つた。往來に出て見ると窮民が押合つてゐる有様、それに日に幾人となんく物を乞ふ者がやつて来る。平素慈悲同情の心の厚い今右衛門がどうしてぢつとしてゐられよう。彼は身代の續く限り金を出し穀類を出して之等の人々を救つたのである。それでもまだ貧民は絶えなかつた。若い中から働いてやつと作り上げた身代である。之を惜し氣もなく窮民達に施すことは、並大抵の事ではない。しかし今右衛門は之等の貧民達をそのまゝ見殺しにする事はどうしても出来なかつた。自分の財産よりも人々の命の大切な事をつく／＼感じた彼は、思ひ切つてそれ等の田や畠も賣り、又それでも足りないで諸道具までも賣り拂つて之が救助にあてたのである。

自分の財産、特に難儀、苦勞の末にやつと作り上げた財産を手離す苦しみは察するに難くない。之等の欲心を断ち



切つて人々に恵んだ彼の精神こそ實に尊いものではないだらうか。

□ 其の妻の慈善 夫は慈悲同情の心に厚いが、その妻は欲心が深いと人々に爪弾きされる人も世には少なくはないものであるが、今右衛門の一家は一家打揃つて慈悲同情の心に厚く、慈善の精神に富んでゐた。今右衛門に仕へたその妻も亦氣立てやさしく憐れみ深い女であつた。そこで夫今右衛門が貧民のために自分の身代を賣り、更に家財を賣拂つてまで窮民等を救はふとする尊い精神に對しては決して一言半句の反對すらしなかつた。夫が如何に貧民のためにと思つても、夫婦二人で辛苦を重ねて作り上げた財産のことであるから、妻の反對があれば思ふやうにはならぬのであるが、彼の妻は反對しないばかりか二人はよく力を併せて家産を抛つて之等の救助にあたつたのである。それに就ては實に感すべき一つの逸話が殘されてある。——原據は大泉叢書——

家財道具を賣拂つて貧民の救助に骨を折つた今右衛門一家には最早餘す所の衣類道具も殆どなくなつてしまつた。その妻も今は残す衣裳二つのみとなつて了つた。それでも哀れみを乞ふ窮民達はその跡を絶たぬ。何とかしてこれ等の人々を救つてやりたいと願ふ妻は今はどうすることも出来ない。女にとつて命に次いで大事な晴の衣裳、之を賣拂うて人を救ふより外には道はなくなつた。如何に慈善の心に富む人であつたからと云つて晴の衣裳を手ばなすことは容易なことではないが、彼の妻は欲をおさへて遂に思切つてこの残したたつた二つの衣裳も遂に賣拂ふことにした。之を知つた時には流石の今右衛門もためらはすには居られなかつた。『お前はその晴衣も賣るのか、それは誠に結構なことではあるが、女は男と違つて外に出るのに着換への一つもなくては困るであらう。せめてその晴衣だけは残して置いたがよからう。』『私もはじめはそんなにも思ひましたが、よく考へて見ると外へ出るに困るからいつそ賣つてしまいたいと存するので御座います。こんな着換への一つもあれば外へ出ようとする心も起りませうし、さうすれば

櫛も簪も入り用になります。それでも着がへ一つもないやうに賣つてしまへば外に出る心も起りませぬ。又従つて櫛や簪も無用となりませう。無用なものは皆賣拂つて之で一人でも澤山な人が救へますならば私は之に越した望はございません。』きつぱりと云ひ切つた妻の言葉に始めて妻の心が分つた今右衛門は『いやよく言つてくれた。よく分つた。』遂に承諾をしてたつた二つ残つた着換へまでも賣拂つて人々を救ふ資に供したのである。人の困難を思ひ之を一入でも澤山救はうとする尊い心には萬人頭の下るを覺えずにはゐられない。

□ 其の娘の慈善 今右衛門夫妻の慈善は誠に感ずるに餘りがあるが、又その子も感心な子供であつた。今右衛門夫婦の間には一人の娘があつた。その頃丁度十二位であつた。或日のことこの娘と同じ歳頃の少女が飢につかれ、やせ衰へて今右衛門の門口に立つて食物を乞うた。その頃は冬も最中を過ぎてゐたのであるが、餘寒が殊の外きびしく雪を交へたはけしい風は身を切るやうであつた。それに門に立つて物を乞ふ少女を見ると、やせ衰へたからだにたつた一枚の單衣しか纏つてゐない。そして寒風に吹かれてガタ／＼と震へてゐるといふ有様である。『ワガ身ヲツメツテ人ノ痛サヲ知レ』と格言にあるが、自分がそのやうな有様であつたら一體どんなであらう。かう思ふと自分が全く身を切らるゝ思ひがせずには居られない。

今右衛門夫妻はこの少女の有様を見て見るに見かね、母はすぐにその娘を呼んで『お前は綿入二枚も重ねて暖かさうにしてゐるがこの女の子を見よ、この寒い日にたつた單衣一枚ではないか。なんと不感ではないか。見れば歳頃も汝と同じ位のやうだ。きつとゆきたけも合ふに違ない。お前の綿入を一枚脱いでこの子にお上げなさい。』とすゝめるとその娘も惜しい自分の着物ではあるが相手のみすほらしい様子を見ては可哀相でならない。兩親の云ひつけを得心して上の方に着てゐた上等の方の綿入を脱いでこの少女に與へたといふことである。この娘の有様を見てゐた父と母



とは自分の子ながらよい心掛けであると内心非常に喜んだ。何と美しい話ではないか。親子三人が揃ひも揃つてかくも美しい心を持つて世の憐れなる人々を救ひ助けたといふことは實に感じて尙餘あることであると言はねばならぬ。

## 乙 慈善に對する訓辭

### 1 例話考察

主なる設問

- 天明の飢饉はどんな有様でしたか。
- その時鈴木今右衛門はどんなことをしましたか。
- その時妻はどうしましたか。
- その妻が晴衣を賣らんとした時今右衛門は何といひましたか。
- それに妻は何と答へましたか。
- その娘はどうしましたか。

○ 今右衛門一家の人は、財産や、着物などはもういらなと思つてゐたのでせうか、——ここに私利私欲はありながらも、之を抑へて、人間本來の道に則つた尊い生活の存することを説いてほしい。即ちほしいには違ひがそのほしい心を抑えて、慈善を施したといふ大精神である——

以上の如くに發問し、天明の飢饉の有様、この時に於ける今右衛門一家の慈善的行爲を復習し且つ、その内的精神を十分に味はしめ、理會せしむることが大切である。かくて次の訓辭に入る。

### 2 慈善の必要

鈴木今右衛門一家はかゝる天明の大飢饉に際して一切の財産をなげうつて、あはれな人々を救つてやつた。然し、あはれな人々は決してあの時のやうな大飢饉の時ばかりに限らない。いつでもあはれな人々は世の中に少くない。皆さ人も大方は『之はかはいさうな人だ』と思ふやうな人に出會つたり又はさうした人を見たりした事があるに違ひない。——こゝで問を發して、兒童の経験した世の哀れなる人について發表させるがよい——世の中には親もなければ兄弟もなく全くの『身なし子』の人もあれば、生れながらに盲の人もあり又聾の人もあり啞もある。又その他手足の不由な人、病氣に苦しむ人、不具廢疾の上に生活に困つてゐる人、あけ来たれば、數限りもないことである。

私たちはかうしたあはれな人々に對してはどうせねばならぬだらうか。格言に『ワガ身ヲツメツテ人ノ痛サヲ知レ』といふことがあるが、さうしたあはれな人を見た時には、自分があんな目に遭つたら一體どんなに苦しいことだらうかと、自分の身になつて見なければならぬ。さうするとあはれみの心が心の奥底から湧いて來るに違ひない。

盲で何一つ見えない人を見たら、一體自分があんなに盲であつたらどうだらう。かう考へるとほんとうにさうした人たちをあはれませずにはゐられない。我が身をつめれば痛い。それと同様に人の身もつめれば痛い。自分が盲であつたらさぞつらい事であらう。同様に盲の人は自分達が思ふ程以上につらいのである。さう考へるとどうしても私達はさうした人々に對して悪口をたゝいたり、徒らをしていぢめたりすることの出来ないのは勿論、進んでかうした人々をあはれみいたはるといふ心が起らざるを得ない。私達はどうかしてかうした哀れな人々を助けるやうに骨を折りたいものである。

### 3 特に公事のための不具廢疾者に對する心得



特に大事なことは、或は戦争に行つて敵の丸の中つて、手足の自由を失つたり、又は敵兵の刃にかつて手足をなくしたり、兩眼を失ひ、或は、顔に大きな負傷をして醜い痕を残してゐるとかいふやうな人は大分多い。之等は多くは日露戦争での負傷者である。皆さんも大方は、戦争に行つて兩脚をなくしてゐる人、一足をなくしてゐる人、片手兩手を失つてゐる人を見たことがあるに違ない。かうした人に對してはどんな注意が必要であるかは、こゝに述べるまでもないことである。

是等の人は御國のために、一身一家を顧みず、命を的にして働いた人々、いはゞ、吾々の身代り、國民の身代りになつて働いた人々である。雨霞と飛び来る弾丸の中をもとせす進み敵陣目がけて突撃し、目覚しい働をした人で、そのために名譽の負傷をした人々である。御國のために、否自分達のためにかうした不具者廢疾者となつて不幸不自由な月日を送つてゐる人達であると思ふ時、私達はどうしてもさうした人たちに心からの感謝の心、あゝ有難いといふ心、が浮ばないわけには行かない。と同時にさうした人たちに尊敬の念が起つて来るに違ない、私達はかうした人達に對しては心から感謝の念をもち、かうした人を敬ふ所がなければならぬ。

それは決して戦争に限らない。巡查の人が強盜と戦つて不具者になつたり、その他公の事でさうした不具者となつた人に對しては特に尊敬の念をもつべきである。

#### 4 慈善の心得

世のあはれな人々を見れば誰しも「あゝ可愛想だ」と思はない人はない。この可愛想だと思ふ心が是等の人を何とかしたいといふ心になる。しかし之を實現して是等の人々を救ひ助けてやるといふことになるとなか／＼容易に出来ない。可愛想だとは思ひながら救ふといふことの出来ないのは救ふといふことになる、何か自分の金品なり勞力な

りを費さねばならぬから、さうなると人は欲が起つて来てなか／＼思ふやうに行かぬのである。しかし鈴木今右衛門一家の人々は皆えらかつた。欲を抑へ、身分に應じてかうした人々を救ひ助けてやるやうにせねばならぬ。之が慈善である。

だが、人を救ひ助けるといふ事は單に金や品物を恵み與へるといふことだけではない。金や品物を與へて却つてよくない事もある。即ちからだも丈夫な仕事も十分出来る人に金品を與へて自由にさせたならその人は決して仕事もせない怠惰者となつてしまふであらう。慈善は「その人の身の立ち行くやう」にしてやるといふことが大切である。

世のあはれな人々を救ひ助けるといつても、子供達はまだ一人立の出来ない身の上であるから金品を恵むといふことは勝手には出来ない。そこはお父さんやお母さん方の指圖に従ふことが大切である。唯、鉛筆が短くなつて使はれないやうになつたら、捨てないで慈善箱に入れるとかいふやうな事は誰にも出来る事であり、拾物の主がなければ先生と相談の上、慈善箱に入れるといふやうな事は大切な事で子供達にも出来ることである。

#### 5 慈善と儉約

世のあはれな人々を救ひ助けるために、金品を出す人は世にも決して少くはない。よく／＼考へて見ると是等の人々はよく金や品物を役立つやうに使ふ人である。即ち世の中のために値打のある使方をする人であつて感心の外はない。所がかうした、大事の場合に金品を出すためには日頃儉約を守つて、無駄使ひをせずに貯蓄でもして置かねば大事の場合に出さうにも出せない。儉約を守り、大事の費用として慈善事業などには思ひ切つて、惜しまず出す、是程尊いことは又とはあるまい。



## 第十九 恩を忘れるな

### 一 目的及び教材観

修身の教師用書に「人より受けたる恩は忘るゝことなく、進みては之を報いんと心掛けしむるを以て本課の目的とす」と指示してある通り、本課に於てその目的とする所は人から受けた恩は之を忘るゝ事なく、更に進んでその受けた恩に對しては之を報いるやう心掛けしむることに存する。思ふに、私たちが生をこの世に享受し、日々その生を全うして行くことは、實に無限無量の大恩あるによるものである。見よ、既に、父母の恩はすぐ目前に之を見ることが出来る。かくして祖先代々の恩があり、國の恩、君の恩、社會の恩、一として容易に背け得ぬものはない。一粒の米の中にも、一葉の葉書の中にも、一枚の紙片の中にすら靜かに之を眺むれば無限の恩がこもつてゐる。かく廣い意味に恩といふことを解したとき、吾々の一々の生活はこの恩に對する報謝の生活となつて實現されて行くことにならねばならぬ。かくしてこそ吾々の生活は尊いものとなつて来る。それこそほんとうに崇高なものとなつて來ると思はれる。されば人間の生活がそれ自身他の動物の生活と異なる所以は之を一面から見れば實に恩を知るといふことである。恩に感じて生活する時吾々は眞に功利的な見解、私欲、私利、我執から脱却し得るのである。

本課に於ては兒童をさうした根本恩とも稱すべきものに觸れしめようといふ所は不可能でもあり、又それを要求するものとも思はれないけれども、兎も角直接に何かお蔭になつてゐるといふやうなことから、その恩を感ぜしめ一歩

は一歩と深いものに深めて行くといふことが何よりも大切なことであらう。

### 二 教材系統

尋二、恩を忘れるな。 尋五、謝恩。

### 三 指導要項

甲 佐吉の例話

- 1 佐吉の人と爲り
  - イ 佐吉の生立
  - ロ 佐吉の正直
  - ハ 佐吉の孝行
  - ニ 佐吉の善行
  - ホ 領主の表彰
- 2 佐吉恩を忘れず
  - イ 佐吉の奉公
  - ロ 佐吉の勉強
  - ハ 佐吉の解雇



ニ 佐吉恩を忘れず

ホ 佐吉の報恩

乙 恩に対する訓辭

1 佐吉の例話考察

2 恩を忘れぬこと

イ 恩

ロ 恩を忘れぬこと

3 更に恩は之を報ゆべきこと

### 四 指導計畫

1 教授の出発は例話の説話から入るがよいかと思ふ。又、自分の受けた恩について之を發表せしめ、進んで之に對する心得を説き、『之についてはこんな美しい話がある』といつて例話に移つて行くやうにしてもよい。

2 例話に於ては單に佐吉の報恩についてのみでなしに、彼の人と爲りについても説き、かくて後、恩に報いた話をするがよい。

3 主家の爲に働き乍らもこゝを解雇された。然し、佐吉は之をうらまないのみか、之に柔順に従ひ且その恩を感じて之に報ひ、特に主家倒産後の彼の美しき行爲について十分に味はしめることが本課教材の中心であるからこの點について十分用意あるべきである。

4 恩については兒童自身に於ても既に知る所あるものであるから、これを機會に之を發表せしめ、以てこの際之を明確にしてやることは大切なことで、その上、恩に對しての心得をも説き、恩に對する人の道を感じ得させることが大切である。

5 本課では恩については『人から受けた恩』として恩を限定してゐる。勿論、こゝでは、人から受けた恩を中心にした取扱でなければならぬが、強ち之にこだはる必要はあるまい、父母の恩、師の恩についても兒童達が發表して之を問題にするならば之をもやつぱり恩として取扱ひ之に對しの道を説くことにしたい。『いやそれは只今は問題外だ』などはねつけてはならない。

### 五 教材解説・説話要領

甲 永田佐吉の例話

1 永田佐吉の人と爲り

イ 佐吉の生立 永田佐吉は今から百二三十年前の人で生地は美濃國(岐阜縣)羽島郡(その當時羽栗郡)竹ヶ鼻である。佐吉の名は百數十年後の今日に至るも尙土地の人から忘れられない。永田佐吉とは云はないで、佛佐吉、佛佐吉で通り地方の人の尊敬的になつてゐる。佐吉は人々から佛といはれる程立派な人物であつた。親孝行で、しかも正直で、親切で、情深くて決して他人から後指さされるやうなことのなかつた人である。それで何時ともなく佛佐吉と綽名をいはれるやうになつてしまひ、それが今に傳つて佛佐吉で通つてゐる次第である。

ロ 佐吉の正直 佐吉は氣の毒にも非常に貧しい家に生れた。僅か十一歳只今の子供にすると尋常四年生頃から他家



へ奉公に出て行かねばならぬ有様であつた。彼が奉公に出たのは名古屋の或紙屋であつた。正直で眞面目に働く佐助はいつの間にもやら朋輩仲間にもねまれて遂に此處を追はれることになつた。しかし彼は主人を更に怨むこともなく、それからは綿の仲買を始めてやつとその生活を支へてゐた。

生活は貧しくて苦しかつたが、苦しい中にあり乍ら、決して横着で暴利を貪るやうなことはなかつた。ほんとうの貧乏仲買で商買に大事な秤さへ備へることが出来ない。それで佐吉は品物を買ふにも賣るにも見切りで賣買をした。それが決して自分から目方をつけない。先方が云ふがまゝである。一貫あると云へばそれで買ひ入れ、五貫しかないと云へばそれで賣渡すといふ有様で全く先方の意に任せて一言半句の文句も云はねば悪い顔一つしないで取引をしたといふことが傳つてゐる。そんな有様で横着なこと一度したことがなし、人を疑つたことがなく、正直に商賣するのでだん／＼と土地の人々の信用を得るやうになつた。佐吉はこのやうに言ふがまゝの賣買をするので先方も横着は云へない。二貫目しかない品を、二貫五百目あると云へば佐吉は少しの疑ふ色もなく之を買ふので、さうした掛値などは少しだつて云へなくなり、却つて二貫五百目ある物も二貫目位に目方を引いてさへ言ふやうになつたといふことである。以て佐吉がどんなに正直であつたかを知ることが出来る。

ハ 佐吉の信心と孝行 佐吉は佛教を信すること非常に厚く全く佛に歸依してゐた。佐吉は不幸にも父に早く死別れ母とも別れて繼母に仕へる身であつたが、非常に孝心が厚く、誰一人、その孝養の至れり盡せりの有様に感心しないものはなかつた。佐吉ははじめの程こそ貧しい商賣をしてゐたが、正直に商賣するので土地の人々から非常に信用を博し、後には大きな商人となり得たが、彼が可成商賣が繁昌してからのことである。彼は神社やお寺の參詣を思ひ立ち諸國を巡つたことがあつた。不幸にもその途中佐吉は大病におかされてしまつた。佐吉はこれで死んだとて自分の

身は惜しくはないが孝心深い彼は常に母の身の上のことばかり案じ、何とかして全快し、今一度母に會ひたいものと赤誠を捧げて佛様に念じ祈つた。所が佐吉の誠意が佛にも通じたものか、さすがの大病も何時とはなしに全快して、無事自分の家に歸り、久々でその母に見え非常に佛の功德を感謝した。母にこの事を話すと母の云ふことには、『それは全く佛様の功德に違ない。何とかしてその御恩を報じなければならぬ。それには佛像を作つてどこかよい土地を見立て、建てるがよからう』と話した。

母からその話を聞いた佐吉は『成程』と感じて、早速京都の鑄物屋に依頼して大佛像を鑄てもらひ船に積んでその佛像を運ぶことにした。船が遠州灘まで來ると、大變な風が起つて船が轉覆しさうである。初めの中は、我慢もしたらうが荷物をそのまゝにしては、どうしても助かりさうにない。やむなく積んだ荷物は皆海中に投じてしまつた。そして大事な佛像までも投げ捨て、しまつた。そしてやつこのことで舟人たちは陸に舟をつけた。それから恐る／＼佐吉の許に行つて事の次第を述べて謝罪した。大事な佛像のことではあり、大目玉を頂戴すること、思ひの外、佐吉は『それは何としても天災で致方がないが、佛像を積んで難船に會ひお佛様を海に沈めたのは却つてよかつた。遠州洋はかねてから航海の困難な所と聞いてゐる。之からはその佛様が船を守つて下さるから安心して航海も出来よう。それを思ふと佛様のお指圖であつたのかも知れない。却つてそれはよいことをしてくれた』と言つて更に咎むる色さへなく、別にいま一體を鑄て之を建てたといふことである。この像様は今に昔のまゝ、残されてあるといふ。

ニ 佐吉の善行 其の他佐吉の善行は數限りがない。道路が壊れると之を普請をし、橋が破れると之を架けかへ、又人の迷ふ所には道しるべを建つるなど實に感すべき行が多かつた。佐吉が自費を投じて架けた石橋や道しるべの如きは今にそのまゝ、残つてゐるものが多いとのことである。その他にも佐吉の善行を語る逸話が多い。



※ 領主の表彰 佐吉の名が評判高くなると何時しか領主の耳にも入り、澤山な米を賞として賜りその上有難い事は外に何なりと望があるならば申出でよとの御沙汰さへあつたといふことである。

かくて寛政元年十月十日八十九歳の高齡を以てその天壽を終へた。佐吉の如きは實に人々の模範といふべきである

## 2 佐吉の恩を忘れざりし話

佐吉はかやうに善行が多くて佛佐吉とさへ云はれてゐるが、特に受けた恩については深く之を感じ忘れるやうなことはなかつた。忘れないばかりか折があれば之に報いんと心掛けた感心な人のである。

1 佐吉の奉公 前にも述べたやうに佐吉の生家は貧しかつたので僅か十一歳にして奉公に出なくてはならぬ身の上であつた。名古屋のさる紙屋に奉公した彼は僅かに十一歳でしかなかつたが、生來正直で眞面目な彼は主家のために一心不亂に働いた。かけひななく働く上に人の仕事までも引受けてする程の眞面目さであつたので主人も大變喜んで「佐吉、佐吉」と言つて可愛がつてゐた。

2 佐吉の勉強 佐吉は貧しい家に生れ奉公の身の上ではあつたが學問を好み暇ある毎に勉強に志した。それでも奉公の身の上ではあり思ふやうな勉強も出来なかつた。ゆつくりと机に向ひ座にすわつて學問に熱中するといふ暇は到底なかつた。用事のひま／＼に砂の上に書いて字を稽古し、使の途中で書物を見る位の事であつた。それに先生について教を受けるといふことは全然出来ない相談であつた。それでその折々に物の分つた人に會ふとかねての不審やらぬ所を問ひ正して之を知るといふ有様であつた。それでも熱心といふ心は恐ろしいものである。雨だれの一滴々も石を穿つといふが實にその通りである。かくも困難をしてやる勉強も時のたつに従つてだん／＼と進んで來た。後には目に見えるやうに上達した。さうなると又本人も一層精が出る。佐吉は、店の用事もすつかり終り、人々が皆寝

る頃になると、その後で、こつそり人々の安眠を妨げないやうに、床をぬけ出して、心ゆくばかり自分の好きな勉強に熱中した。主家の仕事は何一つおろそかにせず、その上、その餘暇には熱心自分の勉強をしたといふことは感心な話である。

3 佐吉の解雇 「佐吉、佐吉」と言つて可愛がられ、それに末頼母しい男であると主人に見込まれた佐吉が遂にその店を解雇されて追出されることになつた。佐吉が解雇されるといふことは全く不思議なことであるが、それには又深いわけがあつた。

佐吉の奉公してゐた紙屋は相當に大きな店であつたから、佐吉よりも外にまだ多くの奉公人がゐた。澤山ゐる奉公人の中には勿論正直で眞面目な人も多かつたであらうが、又中には心の曲つた不眞面目な者もないではなかつた。それ等心の曲つた人々には佐吉が憎く、てしかたがない。第一佐吉が主人から人一倍に可愛がられ仲間の誰よりも信用の厚いのが氣に食はなかつた。「佐吉の野郎悪い奴だ」と常に考へてゐたものである。人を嫉むといふこと程罪なことではないが、どうかすると我々はかうした嫉妬心のために自分の人格に傷をつけることがあるが氣をつけねばならぬことである。第二に、彼が何時も暇のある毎に勉強ばかりして遊び相手になるでなし、話相手になるでなし、唯ツンとして勉強ばかりしてゐることは彼等仲間の非常な反感を買つたらしかつた。「佐吉の野郎、生意氣な奴だ」と言つて蔭口を叩くのが彼等仲間だつた。そしてとう／＼その時が來た。仲間の者が主人にかう言つて讒言した。「御主人、どうぞ佐吉には暇をとらせて下さい」「どうして佐吉に暇をとらせるのだ。」「いや佐吉はうはばかり飾つて御主人の目の前では大變よく働くやうに見せかけて蔭に廻るとお話になりません。どうぞ暇をやつて下さい。」「佐吉に限つてそんなことはあるまいと自分は思ふが」いや全く佐吉は大の横着者の大怠け者であります。勉強にこと寄せてそれも碌



な勉強も出来ない癖に店の仕事など少しも致しません。』そんなことがあるだらうかね』『いや全くです。一日も早く追出して戴かぬと店のためによくはないと思ひます。』『それではよく佐吉に言ひ聞かせてやつたらどうだらうか。』『いやいや、それはもう全く無駄なことです。今まで私などがいくら忠告したか分りませんが、からつきし駄目でした。』かう言つて主人に事を構へ、事實をこしらへて讒言をした。日頃佐吉の忠實な働き振りを知つてゐる主人が是位の事を信用する筈はない。けれ共奉公人等は皆一緒になつて佐吉の解雇を主人に迫つた。しかし主人は何時までも解雇しないものだから、遂に彼等は、『佐吉を解雇して下さいさるか、それとも私等皆にお暇を下さるか、二つの一つ、どつちかに決めて下さい。』かう言つて猛烈に詰め寄るので主人も、『佐吉もかうした仲間の反感ある所にゐる事は面白いことでもあるまいし又將來の爲にも得策ではあるまい』と、遂に事情を話して彼を解雇し、その店を出すことにした。佐吉はこの店に厄介になること約三年、住み馴れた店のことでもあり、又この店を出されて仕舞へば何れへ自分の身を振りむけるかさへ分らないので、頗る驚いたに違ひないが、主人の命とあらば致方もないこと遂に主人や仲間の者にも丁重に暇乞をしてこの家を去ることにした。

二 佐吉恩を忘れず 仕事も眞面目に、何一つ心に疚しいこともないのに愈々店を出されることになつたのであるから唯の人ならこれつきりで主人を恨み、人を恨む處であるが彼に限つて何等さうしたことはなかつた。ひたすら自分の至らなかつた事を心の中で却つて氣の毒に思つてゐる位であつた。

主家を出た彼は自分の生家に歸つて綿の仲買をすることに決めた。根が正直の佐吉のことであるから、決して横着をやらねば不正なこともしない。前に記して置いた通り資本なしの商賣のこと、て商賣道具さへ備へてない。大事な秤さへもない始末であつた。それでも彼は人の云ふに任せて正直に取引をしたので秤なしでも結構にやつて行けた。

そして日々に地方の人々の信用を受け、『佐吉なら間違はない』と云つて皆『佐吉、佐吉』と云つて彼との取引を喜んでしてくれた。そのために日に月に商賣も繁昌し、だん／＼立派な商人となることが出来た。然しこゝに感心なことは實に出歩いて働く中にも決して三年の間、御世話になつた主家の大恩を忘れたことはなかつた。時々主人から可愛がられたことなどを思ひ出して有難がつてゐた。『あんなこともあつた』『それからこんなこともあつた』など、獨言を云ひながら主人の大恩に感じてゐた。そのやうな有様であつたから商賣上の用事などで主家の附近まで行くことがあると、決して缺かさず主家を訪れてその安否を尋ねた。すると又主人も大變喜んで佐吉を迎へ何くれとなく商賣上の注意などをしてくれたりして彼のために後盾になつてやつた。そして又寒暑折々の見舞などは決して缺いた事はなかつた。寒くなつたと言つては主人の安否を尋ね、暑いといつては又主人の起居を伺ふといふ有様であつた。

ホ 佐吉の報恩 有爲轉變は世の習とは申せ、餘りに早い世の中の變轉ではある。彼が主家を出てから十年とたゝぬ中に、さしにも盛んであつた主家の紙屋は、奸悪なる雇人等のために全く零落してしまつた。家盛んなれば訪ふ人々も亦従つて繁く、家衰ふれば又従つて訪ぬる人も少なくなるが世の常である。その例に洩れず零落し果てた後の主家は全く寂しいものであつた。特に困つた事には杖柱と頼む主人がその後幾年と経たぬ中にこの世を去つてしまつた。一家の困窮は一層募るばかりである。かうなると又一層出入する人々の足は一段と少なくなつて、今は全くその遺族は生活にも苦しみ淋しい生活を繰返してゐるに過ぎなかつた。然しかうした中にも決して昔と變らぬ氣持で主家を慰めてくれたのは實にこの佐吉であつた。舊主家に對する佐吉の心は家が盛んであらうが、衰へてしまふがそんなことには無關係であつた。受けた大恩に變りはない。何時でも主家を訪れて之を慰めてゐたのである。しかも主家零落後は舊恩に報いるのはこの時であるとはかりに、及ぶ限りその生活も助け、日頃の大恩に報いたといふことで全く感心



の外はない。他人から大恩を受けると受けた當座は非常に有難がるものであるが、月が立つと共にさうした心持も失せてしまふのが世の常なるに、佐吉に於てはかゝることもなく、よくその恩を忘れず、しかも主家零落の後には、一層その恩に報いんとつとめたことは實に感ずるに餘あるものといふべきであらう。

## 乙 恩に對する訓辭

### 1 佐吉の例話考察

主なる説問

- 佐吉は紙屋に奉公に行つてどんな働きをしましたか。
  - 佐吉はどうして紙屋を出されましたか。
  - 佐吉は紙屋を出されてからもその主人に對してはどんなにしましたか。
  - もとの主人の家がおちぶれてから佐吉はどうしましたか。
  - 佐吉の行で最も感心することはどんなことですか。
- 等の間を出して佐吉の行爲について考へさせ、佐吉が常にもとの主家を忘れず、その恩を感じ、之に報いんとつとめた尊い精神をしつかりと擲かませる。かくて次の訓辭に入つて行く。

### 2 恩を忘れざること

考へて見ると恩を受けてゐるのは佐吉ばかりでなく私たちもみんなから非常に澤山な恩を受けてゐる。「先づどんな恩を受けてゐませうか」考へて見ませう。——とて兒童に考へさせ之を一々發表させる——

さういふやうに考へて來ると非常に澤山な恩がある。先づ第一は、家にあつては父母の大恩を蒙り、學校にあつて

は師の恩を受け、更に大きくは君の恩、國の恩と數限りない恩を受けてこそ私達は生きてゐられる。

その他、電車の中、道を歩く時、病氣の時など考へて來る、皆各々特別の恩を受けてゐる人が多い——兒童の發表する恩は私が電車の中で席がなくなつて困つてゐたら……とか、私が病氣の時……といったやうなものが多いから之を受取つて取扱ふ——私たちはかうした恩に對してはどうすることが大切であらうか。それは第一に「受けた恩を決して忘れないこと」である。私たちは受けた恩を深く感じて之を決して忘れない。機會ある毎に之を思ひ出して見るといふことが大切である。即ち恩を深く知るといふことである。次には

### 3 恩に報ふること

恩に對してはどうかしてその幾分なりと報ひるといふことが大切である。即ち恩返しをすることである。佐吉は常に受けた恩を忘れず更に恩返しをしようつとめた。又實際恩返しをしたのであるが、私達もかうありたいと思ふ。

父母教師の大恩に對してはどうしたら恩返しにならうか——兒童に考へさせて發表させる——

それには

- いひつけをよく守ること。
- 心配をかけないこと。

の二が大事なことである。之をよく守れば大きな恩返しになる。そして大きくなつてからは、父母や、教師の望みを自分が遂げてやるといふことが最も大きな恩返しの一つである。父母や師は立派な人になつて呉れるやうに常に望んでゐる。この望を自分の子供や生徒が遂げて呉れるならば父母や教師はどんなに喜ぶことであらう。之こそ實に立派な恩返しであらう。その他、各兒童の受けてゐる恩に對しての報恩の道については一々懇切に指導してやるよすが。



## 第二十 寛 大

### 一 目的及び教材観

明治天皇の御製に

淺みとり澄み渡りたる大空の廣きを己が心ともがな

といふのがある。味へば味ふ程その大御心の程が偲ばれ、如何にもと我が心に相響くこと深きものがある。吾々人間はどうせ孤獨の生活をなすことは一瞬時と雖も出来ない。のがれんとしてのがれることの出来ないものは、之實に我々の社會生活である。私達は生きてゐる限り、相互相交つて生活を遂げてゐるのである。所が他の人と相互相交つて生活をするといふことになる、私の生活が或は不用意のために、又は思はざる不測のために、他人に損害を與へ不快を與へることも決して皆無とはいへない。と同時に自分も他人のさうした過失から、不快を感じたり、或は損失を蒙るなりすることは決して少なくない。過失といふことは、お互に出来るだけ之を避けねばならぬ事勿論乍ら、人は何處までも人であつて神ではない。神ならぬ私達たるが故に我々は決して過失なしと確言し保證する事は出来ない。或は自己の思慮の不足のために、乃至は思はざる不時不意の出来事のために過失を生ずるといふことは往々あり勝ちであつて、稀なことではない。所が相互他人の過失を一々咎め立てして、之を責めてゐるのであつては決して圓滿なる社會生活は出来ないであらう。それは家庭生活などいふ一小社會一特殊社會であり乍らもさうであると思はれる。

まして他人相互の一般社會に於てをやである。かくては實に社會とは劍の刃の如く、又荆棘の如く、人生の楽しみ果して何處にか有らんやであらう。そこで相互、神ならぬ身であれば、出来るだけ心を寛大にしてその過失を赦し合つて行く處に、人生生活の温かさがあり、そこに人生生活としての樂土が存する。かくして明治大帝陛下の御製の御心がヒシ／＼と胸にこたへるのを覺ゆる次第である。本課は實に、教師用に「人に對しては常に寛大にしてその過を恕するやうに教ふる」ことがその目的であつて、人と交る上に於て、即ち社會生活を遂げる上に於て、それは家庭生活であらうが、學校生活であらうが、その他一切の社會生活の上から實に大切な教材と見ねばならぬと思はれる。

### 二 教材系統

尋二、人の過を許せ。 尋五、度量。 高一、寛容。

### 三 指導要項

甲 貝原益軒の例話

1 貝原益軒の人と爲り

イ 益軒の生立

ロ 益軒の學問

ハ 益軒の著述

ニ 益軒旅行を好む



ホ 益軒の德行

2 貝原益軒の寛大

イ 若者愛育の牡丹の花を折る

ロ 若者人を頼んで罪を謝す

ハ 益軒の寛大

乙 人は寛大なるべきこと

1 益軒の例話考察

2 人の過は之を許せ

3 一時の怒によつて人に非道なる仕向をなさぬこと

#### 四 指導計畫

1 教授は益軒の例話から入るがよからう。益軒が愛育の牡丹を折られて之を許したといふ一逸話が本課の中心教材である。然し、益軒の人格は決して之だけを以てその全體を推すことは出来ない。寧ろ、その全體的人格の上からこの逸話を取扱つた時、この逸話も、非常に力あるものになる。それで先づ益軒その人の人と爲りを簡單にでも説き益軒についての全體の常識を與へその上に本課の中心教材を説くやうにしたいと思ふ。

2 本課教材の中心である益軒が愛育の牡丹を折られ乍ら快く之を許したといふことは十分益軒の内心の過程、内面的な動きを味はせるやうにしたい。秘藏愛育の牡丹である。どんな人だつて、之を折られたと聞いたなら「惜しいこ

とをした」と惜しまぬ人はなからう。大事なものを惜しむ心、それは人間である以上、皆變りはあるまい。然しその惜しむ心を抑へてよく人を容れた所に彼の生活の尊貴なる所がある。この内面的な心の動きこそ、聴くものをして感動させ、人格的陶冶の尊い價値を發揮するものである。こゝに十分の用意あるべきである。

3 兒童の感情は粗野である。彼等はよく怒りよく争ふ。然し、之に對して少しばかりでも後悔の氣持を感じ得るならばやがてその非を悟り寛容の尊い精神への萌芽である。さうした氣持をよく伸展せしむるやう努むべきであらうと思ふ。

### 五 教材解説・指導要領

#### 甲 貝原益軒の例話

1 貝原益軒の人と爲り

4 益軒の生立 貝原益軒は今から凡そ三百年前（寛永七年十一月十四日）福岡城内の官舎に生れた。父は利貞號を寛齋と言ひ筑前黒田侯の侍醫であつた。資性温厚にして篤實、醫としても令名あり、又學者としても重きをなした人である。されば益軒は幼時より極めて善良なる家庭教育を受け、誠に恵まれたる境遇にあつたわけである。それに性來發明な彼は幼い時から學を好み、七歳の時には既に文字を解し、草子の類を讀むことすら出来たといふことである。九歳の時に兄から文字を習つたが、其頃、三體詩の絶句を口づてに教へた所が、遂に之を暗誦し一生之を忘れなかつたといふことさへ傳へられてゐる。

家は藩侯の侍醫ではあつたが、暮し向は決して裕福ではなかつた。そのため、別に師を選んで之について學問する



といふことは出来なかつた。特に益軒は四番目の男の子で、彼には三人の兄があつた。それで彼ばかりが師を選ぶといふことは決して出来ないことであつた。幸、次兄存齋は學問に長じてゐたので、學問は次兄存齋に教はつてゐた。頭がよい上に熱心であつたので益軒の學問はメキ／＼と上達したのである。

父寛齋は將來、やはり自分の業を繼がせて醫者にしたいとの考から、十四歳の頃から醫業のことを教へたのであるが、彼二十八歳になつた時、彼は一生學者として立つべき好運命が到來した。それは、彼の才學が漸く藩侯に認められて、彼は藩侯の命によつて、京都に遊學することになつた一事である。彼にとつては、實に一生の一大事であつた。明暦三年四月の朔日、彼は喜び勇んで家郷を發し、海路大阪を経て京都に入つた。そして當時第一流の學者として世の尊信を恣にしてゐた、松永尺五、山崎闇齋を訪ね、又木下順庵の門に出入して研學實に六年、三十三歳の時彼は家郷福岡に歸つて來たのである。

福岡に歸ると直ぐに藩の儒官に擢でられ、その職に在ること實に四十餘年、七拾餘歳にして致仕するまで、藩侯のために經學を講じて治國安民の策を説き、下は子弟の教育に當り、諄々として教へて倦まず、又他面に於ては一層學問の研究に精進して穩健、圓熟なる學問はいやが上にも發展し、實に一世一代の大學者となり得たのである。徳川時代は學者の簇出せること、實に兩後の筈のやうであつたが、益軒の如きは又萬群の隨一であつた。

益軒四十餘年間の儒官生活に於ては三世の藩侯に歴任し、その恩寵を蒙り、采祿は累りに加増され、七十餘歳致仕して後も尙藩侯から月々の俸祿を賜はり、優遇愈々厚く老後は朝夕讀書と著述に従ひ、正徳四年八月二十七日八十五歳の高齡を以て福岡城下に長逝した。荒津、金龍寺に葬られた。

□ 益軒の學問 益軒は實に博學多才あらゆる方面に造詣が深く、後世の學者達をして驚かしむるものが多い。然し

何と言つても儒官であつたわけ、その本職として研鑽したものは、やつぱり儒學であつた。儒學の中でも益軒は朱子學派に屬してゐた。當時は前にも記したやうに儒學の勃興實に古今にその比なく名高い學者が頻りに現はれた。益軒は又その中でも特に一頭角を現はし、學問に於ても德行に於ても他に秀づるとも決して劣る所はなかつた。かの性狷介、よく人を難じて而も快しとしてゐた太宰春台でさへ、他の學者は一も二もなくけなされて居つたに反し、益軒のみは『博學洽聞、海内無比』と云つて激賞してゐたといふ一事を以てしても、如何にその學問の秀でてゐたかと窺はれるであらう。

益軒は儒學に秀でたのみならず、醫學についても又非常にその研究が深かつた。曾つて次兄存齋が病を得て、生命危篤に陥り、あらゆる治療を試みたが病は日に／＼募るばかりである。醫者も皆快癒覺束なしと申渡し、全く匙を投げてゐる有様であつた。益軒にとつては大事な兄であり、どうにかして今一度健かなる兄の顔を拜したいものと、自ら研究して薬を作り兄にすゝめた所、十日を出でずして全快したといふことである。以て益軒がその道にも如何に精通してゐたかを察することが出来ると思ふ。

更に又農事についても深い卓見があり、教育法に就いては更に非凡の意見を有し、益軒あつて我が國にも教育史を飾る教育理論家があると言はれ、その教育説は英國の大教育學者、ロックと並び稱せられる程である。

ハ 益軒の著述 益軒の學問はかくの如く、深くして廣く、實に博學多識殆んど通ぜざるものはなかつた。さればその蘊蓄を傾けた所の著述も亦實に多數に上り、百數十種に及ぶと稱せられる。經學に關するもの、外は皆假名交り文を用ひ、行交流麗にして而も平易、よく人をして解し易からしめ、世道人心に裨益したことは實に偉大なものであつた。

その重なるものとしては『慎思録』六卷がある。之は彼晩年の力作で道德に關するもの、最後の一大力作には有名



なる『大疑錄』二卷がある。之は朱子學の難點を論じたものである。通俗的なものとしては、所謂益軒十訓として有名な、五常訓、大和俗訓、和俗童子訓、初學訓、文訓、武訓、家道訓、藥訓、君子訓、養生訓がある。その他、旅行記、醫業、農業等に關するものも多數ある。

ニ 益軒性旅行を好む 益軒は性旅行を好み、暇ある毎に旅行をした。儒官として在職中、四十餘年間の中に京都に上りしこと二十四回、江戸に使用すること十二回にも及んだ。之は勿論藩命によることであつたが、性よく旅行を好んだこともその重なる原因である。交通の不便な當時に於て、京都に二十四回、江戸に十二回も上ることは實に大したこと、大抵の者の出来ぬことであらう。

特に老年に於ては室東軒を伴ひ常に旅行をことゝした。かくて天下その足跡を印せざる所少なく、その旅行記は積んで山をなす。諸州巡覽記、西北紀行、續諸州巡覽記、京城勝覽、南迎紀行、吾嬭路記、日光名所記、有馬名所記、天之橋立之圖、松島之圖、駿島之圖、筑前名寄等實に數十冊の多き上る。

ホ 益軒の德行 益軒はかくの如く學問にもすぐれてゐたが、彼のえらい所は決して學問にすぐれてゐたことばかりではなかつた。又その徳の高いことに於ても人を感心させることが多かつた。忠實事に勵み、よく身體の健康に注意したが如きは、人のよく知る所であり、更に又、彼は如何に學問に名高くなつても決して高慢振るといふやうなことは更になかつた。それに就いて面白い逸話が殘されてゐる。琵琶湖を舟で渡る時、舟の中で一青年が頻りに學を講じ當時の大學者達をけなしてゐたが、益軒は之を靜かに聽いてゐるのみであつた。舟が着いて互に後日のために名乗りを上げることになつて、益軒が自分の姓名を名乗ると、一青年は自分の名前も名乗らず、かくれるやうに行つて了つたといふことである。

その他にも色々益軒の高德を傳へる話が多い。次に話す例話の如きも亦益軒の人格の一面を見るに面白い話であるといふことが出来よう。

## 2 貝原益軒の寛大

1 若者愛育の牡丹の花を折る 或時のこと、益軒が外に出るので或る若者にその留守を頼んだ。その若者は、終日留守居するのも退屈なので、隣家の友人が來たのを幸、二人で戯れに相撲を取ることにした。二人はエンヤ、エンヤと取つてゐる中に、だん／＼相撲に調子がのつて來て面白くなつて來た。二人は我を忘れて盛にとつた。餘り調子が乗り過ぎて、ふとしたことから、益軒が日頃愛育してゐた牡丹の花を折つてしまつた。二人の驚きは一通りではなかつた。無理はないことである。この牡丹は、益軒が非常な努力をして作つたもので日頃我が子のやうに大事にしてゐたものである。二人の若者が青くなつた筈である。

□ 若者人を頼んで謝罪す さあ大變、今までの面白さは何處へやら飛んでしまつた。今までの面白さは恐しさに變り、心配に變つた。

「一體どうしたらよからうか」

「さあどうしたらよいだらうか」

「あゝ、どうしよう」

「……………」

「……………」

いくら相談して見た所で一度折れた牡丹が元の通りになる氣づかいはない。遂に、二人は隣の主人を頼んで、こと



の次第を正直に言つてその罪を謝すことにした。一度過をした以上、その過を正直に謝すといふことは誠に正當な道であつてさうあるべきことである。決して如何なる叱責があらうと正直にありのまゝを謝すべきもので、之をかくしだてなどするならば罪を更に重ねることになる。こゝに二人の若者が正直に過を謝すべく人を頼んだのは實に正當な處置と言はねばならぬ。

ハ 益軒寛大よく之を許す 謝罪を頼まれた隣家の主人も、益軒にとつては大事な牡丹ではあり、それに戯をして折つたのであるから、この事件は只ではすむまい。どうなることかと至極心配して居つた。

さて益軒が歸宅したので、恐る／＼事の次第をありのまゝ話にした。自分が日頃大事に育てた、牡丹の折られたことをはじめて聞かされた益軒も、はじめは一寸驚いたに違ない。又「惜しいことをした」と思つたに違ひない。吾々の如き修養至らぬ者なら、すぐ青筋立て、怒る所であるが、修養の至つた人は流石にえらいものである。惜しいものであるとは思つても、決して故意に折つたのでもないし、怒つて見た所が今更仕方のないことで、寛大よく之を赦してやつた。そしてそのいふことが實に面白い。少しの怒れる様子も見せずに「自分が牡丹を植ゑてゐるのは、之を見て楽しまんがためである。どうして楽しむために植ゑてゐる牡丹を折つたからといつて之を怒ることが出来ようか」流石に徳の高い人はえらいもので、その心の廣いには全く吾々凡人は頭の下るを覺ゆる次第である。

## 乙 人は寛大なるべきこと

### 1 貝原益軒の例話考察

主なる設問

○ 貝原益軒はどんなにして勉強しましたか。

○ 貝原益軒はどんな人物でしたか。

○ 益軒の留守中に若者がどんなことをしましたか。

○ 牡丹を折つたとき若ものはどう思ひましたか。

○ 益軒について感心な所はどんなことですか。

等の發問を試み、益軒の人と爲り、及びその寛大について、益軒の内面的精神を理會せしめ、ついで次ぎの説話に入る。

### 2 人の過は之を許せ

益軒が若者が誤つて大事な牡丹を折つたのを快く許してやつた事は誠に感心なことである。私達も決して過のないといふことは出来ない。皆さんも何か過失を仕出でかしたことがありますか——一々發表させて見るがよい——そんなに過を仕出かすといふことは決してよいことではない。出来るだけ過過は起らぬやうにつとめなければならぬ。けれども過を仕出かした時にはしかたがない。そんな時にはどうしたらよいのですか——詫ぶべきことを發表させる。——さう、かの若者達のやうに詫びねばなりません。——尋一、第十八過をかくすなどの連絡——所が、人が過をして、自分の物をこはされたり、又はなくされたりすることがありますね、そんな時にどうせねばなりませんか。——答へさせる——それでは相手の人が何か自分のものをこはしたり、なくしたり、又はボールを打つ、けたりした時、之を許したことがありますか——答へさせる——

吾々は益軒のやうに心を廣くして、人の過は之を許してやることが大切である。吾々は常に他の人々と共同し、一緒になつてくらしめてゐるものである。家庭に於ても又は學校に於てもその外世の中に於ても皆他の人々と一緒になつ



てくらしてゐる。それであるから自分のなすこと云ふことは皆相手の人に影響する。又、他人のことも自分に影響して來るのである。人が何か自分に對して過でもされるといふことになる、その影響することは大きい。頭にボールを投げつけられたり、其の他種々のことがあるに違ひない。所がこんな場合に、事毎に怒を發して、云ひ争ひをしてゐたら、世の中に過の絶えざる限り世の中は喧嘩口論の絶え間はあるまい。それと共に事毎に怒つたり叱つたりしてゐるのであつたら後には人も相手にはしてくれないで、他の人々と相共々に楽しくらしをして行くことも出來なくなるに違ひない。

それで、吾々は常に他人の過に對しては、決して之を叱つてはならぬ。又怒つてもならぬ、廣い心になつて、之を許してやるだけの大きな所がなければならぬ。その點になると益軒の如きは實に見上げたもので自分が長い間丹精をこらして作り上げた牡丹を折られてさへ之を叱るでなし、とがむるでなし、せむるでなし、樂しむためのものを、折つたからといつて、どうして之を叱ることが出來ようと大きい所を見せてゐる。流石に徳高く、修養の積んだ人々は感心なもので唯の凡人であつたら顔を眞赤にして、聲高く怒る所であらう。私達は常に益軒のこの襟度を學ぶべきであらうと思ふ。

### 3 一時の怒に乗じて人に非道なる仕向をなさぬこと

わけて氣をつくべきことは、我々は一時の怒に乗じて人に非道なる仕向をなすことである。「カツ」と一時に怒つた時に全く前後の辨さへも分らなくなつてしまつて、怒にまかせて或は人をなぐり、或は悪口雜言をなし、或は罵倒する等のことも少くないことであるが、かゝる事は、すぐその後には「あんなつまらぬ事に、どうしてあんなにまで怒つたか」と深い後悔があるやうに、決してほめた事ではない。十分氣をつくべきことである。どこまでも廣い心、

大きな心になつて事を處置をして行くことが大切である。

もし又自分が過を仕出かした時にどうせねばならぬかについては十分皆知つてゐる事であらうと思ふ。正直に詫ぶべきである。ゆめにも、之を人に轉嫁したり之をかくりしてはならない。

## 六 参考資料

### 貝原益軒年譜

- 一、寛永七年一歳十一月十四日福岡城内の東邸に生る。父は寛齋。
- 一、寛永十二年六歳夏四月三日母三毛門氏を喪ふ。素と豊前の人。
- 一、寛永十三年七歳未だ嘗て書字の教を受けざるも自ら國字を知り好みて草子を讀む。また猿樂の俗謡を好む。然れども里巷淫喪の歌曲を好まず、疾走跳擲せず、幼少より戲慢淨媒の語を出さず、又兒輩に従うて戯れ遊ぶを喜ばず。
- 寛永十五年九歳、此春兄存齋の教を受け始めて書字を學ぶ。たゞ國字は已に善く誦んずるが故に復た學ばず、深く讀書を好むも家甚貧くして書なく、且つ山中の僻居（八歳の時同國穂波郡八木山の知行所に移る）師なし徒に時日を費すのみ。此歳また三體詩絶句の口授を仲兄存齋に受け酷だ悦んで朝夕復讀し旬日の間盡く背誦し身を終るまで是を忘れず。
- 八木山に加藤田氏あり、平家物語を藏す。卷を追ふて之を借り朝夕批讀して幾んど寢食を忘るゝに至る。また保元平治物語を讀む。
- 一、寛永二十癸未十四歳父寛齋かねて醫藥のことに通ず、故に従ふて藥性及び食物の性を知る、且つ醫學正傳、醫方撰要、萬病回春等を讀み、粗々醫藥の事を知る。
- 一、慶安四年辛卯二十二歳冬十二月眼を病み且つ火疔を患へ、久しく書を讀むこと能はざるに苦しむ。
- 一、承應元年壬辰二十三歳舊病まだ癒えず、冬に及びて稍輕快なり。



- 一、同三年甲午二十五歳六月に及びて疾を患ふ。冬長崎に遊ぶこと二回多く書を読む。
- 一、明暦元年乙未二十六歳此時醫となるの計法に決す。
- 一、明暦丁酉二十八歳此年國主光之より京都遊學の命あり、四月朔海路郷を發し大坂を経て京都に入り、四洞院に居る。此月始めて松永尺五、及山崎闇齋を訪ふ。
- 一、寛永二年壬寅三十三歳五月初京都を發す京にあること六年初めて歸省す。
- 一、寛文四年甲辰三十五歳京都よりの歸途風浪に逢うて兵庫に寄泊し往いて淡川に楠公の墓を押す自ら碑を立てんと欲したるは此時なり。
- 一、寛文五平乙巳三十六歳冬十二月三日父寛齋卒中を病んで福岡の家に逝く。年六十九。訃至る。十八日哀慟して食を廢する兩日。來りて慰問する者多し。
- 一、延寶五年丁巳四十八歳秋七月痲を患ふ。世子綱政藥を賜ふ。
- 一、天和三年癸亥五十四歳伯兄家時遠賀郡吉田村の家に於て熱を患へ幾んど將に死せんとす。叔父樂軒と同じく馳せ行きて看護最勉め、病勢益々甚しく諸醫手を束ぬるや、自ら處方を檢し藥數貼を投じて奇効を奏し全く癒ゆ。
- 一、正徳三年癸巳八十四歳養生訓を著はす。
- 一、正徳四年甲午八十五歳夏四月二十日また病あり、手足痲痺す、是より遂に起たず八月廿七日寅時を以て正寢に歿す。嗣子重春及び親戚門人皆侍して側にあり、西町金龍寺の龍潛庵に葬る。

## 第二十一 健 康

### 一 目的及び教材觀

「衛生を重んじ身體の健康を増進するやう心掛けしむるを以て本課の目的とす」とは修身書教師用書に掲げられたる本課の目的である。身體の健康といふ事は何れの方面から考へても頗る重要なものである。先づ之を個人の上から見てもその重要なことが肯ける。我々が人として生れた上からは、その人として爲すべき種々重要なものが存する。父母に仕へその老後を養ふもその一であり、子女の教養を完全に遂げて次代の後繼者を造るも亦之我々個人に與へられたる民族的否人類的な使命であり、更に一家一村一郷、一國、其の他一切人生への貢獻をより大ならしめるも亦個人に與へられたる重要な責任である。而して是等の使命を全うする上からは色々の條件がそこには擧げられるに違ないが、身體の健康といふことも重要な條件の一であると云ふことは、此處に多くの説明を要せぬことであらう。何故かなら身體健全ならずしては到底その使命をより完全に果すことは不可能であるからである。

更に又之を家庭生活の上から見ても家族相互の健康の重要なことは容易に肯くことが出来る。家族の中に唯一人たりとも不健康なものがあるとすれば、これによる家庭生活の陰鬱さ、物質的影響等は、蓋し想像以上のものがあるに違ない。この意味から見ても、その家族がお互に健康に注意をするといふことは實に大切なことである。更に、之を一國の盛衰といふやうな大眼目から見てもそれは實に大切で、一國の盛衰は一にか、つて國民保健の如何にある



ことが大である。されば何れの國家もその國民の保健については、特に意を用ふるわけである。我が國に於ても特に近來國民保健については識者の注意する所となり、或は體育デーとか、或は明治神宮競技等の施設を行ひ、一般に體育保健の精神普及に努めてゐる。かく健康といふことは何れの見地から見ても頗る大切なことであつて、本課の如きはここの意味に於て實に重要な課といふべきであらう。

## 二 教材系統

尋一、たべものにきをつけよ。 尋二、からだを丈夫にせよ。 尋四、身體。 尋五、衛生。 高一、身體。

## 三 指導要項

### 甲 貝原益軒の例話

#### 1 貝原益軒の養生

#### 2 益軒の大事業とその健康

### 乙 身體の健康に對する訓辭

#### 1 益軒の例話考察

#### 2 健康の必要

#### 3 薬より養生

#### 4 公衆衛生について

## 四 指導計畫

### 1 先づ貝原益軒の例話を説くがよからう。益軒の例話の中には

イ 病弱な素質を以て生れた益軒が養生につとめたために尙且つ八十五歳の健康な高齢を保ち得たこと。

ロ その長年の生存と健康とを徒費する所なく、之を學問の研究に努め、その研究は愈々廣く益々深く、その上多くの著述をなして世道人心に非常な裨益を與へたこと。

この二つの教訓が含まれてゐるから、この點を十分に兒童に味はしむることが大切である。

2 健康増進の方法については各自にその努めてゐる所あらば之を發表せしめ、且つ各兒童にその注意すべきことを考へしめ、その實行を促進せしむるがよい。

3 健康に關する注意は單に一日や二日之に意を用ひたとて別にその健康にどうと云ふことはあるまい。永續的持久的の注意が大切である。この點も十分に説いて聞かせることが大切で之、亦益軒の生涯は最もよい教訓である。

4 公衆衛生については特に尋常五年に至つて詳細に説くことになつてゐるが本課に於ても之に因んで説いて置くがよからう。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 貝原益軒の例話

#### 1 貝原益軒の養生



日々の衛生に注意し養生に氣をつければ、日々の健康が勝れ、よく長壽を全うすることが出来るものである。かの貝原益軒の如きは實にそのよい例である。

益軒は前の課に於ても述べたやうに、實に八十五歳の長壽を全うし得た人である。天性健康な人であつても八十五歳の長壽を全うするといふことは決して容易なことではないに違ない。世には天性頑丈な身體を有し、日頃健康な人も決して少なくはない。けれども八十五歳の長命を全うする人は決して多いとは云へない。天性健康な人にして尚且つ八十五歳の長壽を全うすることは困難であるに、益軒は天性決して健康な身體ではなかつたばかりか寧ろその幼時は病弱であつたといふことである。そのため、益軒の両親は「この子が丈夫になるであらうか」とさへ危ぶんでゐた位であつたといふ。にもか、はらず、天性病弱にも似ず、益軒が非常に健康な身體となり、その上八十五歳の高齡を保ち得たに就ては、そこに何かの原因がなければならぬ。それでなければ誰よりも早くこの世を去つてゐたに違ない。彼がこのやうな病弱の質を天に享けながらも尚且つ八十五歳の高齡を保ち得たに就ては、そこに非常に尊い教訓が含まれてゐるのである。それは終始一貫、彼が健康に非常な注意をしたといふことである。益軒は自分の身體の虚弱なることを十分に自覺してゐたから、日頃如何なる場所、如何なる時に於ても自分の健康を害ふが如きことは一切之をさけたのである。そして自分が色々の書物を読んでゐる際に、養生に關することが記してあると必ず書き抜いて置いて、之を堅く守ることにした。そのため、彼の健康は年々よくなつて行つた。そして、遂には、さしもの高齡を保つことが出来るやうな身體にもなつた。

益軒がかく書物を読んでゐる際に、健康や養生に關する記事を書き抜いてこれを堅く守つたのであるが、その書き抜いたものは非常に澤山なものになつた。そこで門人の竹田定直が之を本に編むことにした。そして之に『願生輯要』

といふ書名をつけて本にした。全部で六卷からなる大部なものである。益軒はこの『願生輯要』の巻首に序文をか、けてゐる。即ち

「年を積むこと久しくして漸く數百條に至る。竊に謂へらく願生の道いさ、か具はれりと自ら覺ゆ。予の幸にして天折を免れて耄耋に至るもの乃ち職として此に由れるなり」

と云つてゐる。即ち「永い年月を費して書きあつめて来てそれが今ではもう數百條に及んだ。ひそかに考へて見るにこれで大方養生の道はつきてゐるやうに思はれる。自分が虚弱な身體を持ち乍らも若死をせず、長命今日に至ることが出来たのは全くこの本の中に書いてある事柄をよく守つたからである」といふ意味である。

之によつて考へて見るに、益軒が自ら守り自ら努めて來た、大事な養生の教訓がこの本の中に收められて居るといふことが出来る。

この願生輯要は非常に大部なものであつて、之を一通り見通すことは困難でもあり面倒でもあるので、この願生輯要の要點を更に書きぬいたものが、かの有名な養生訓といふ本である。養生訓は即ち衛生に關する心得を書いた大事な本で、益軒のこの世を逝く前年に出来上つたもので、八十幾年間の益軒の尊い経験から生れ出たものである。益軒はかくして自分の虚弱なる身體を健康にし、且つ、八十餘歳の高齡を全うし得たのである。實に吾々の好模範といふべきではあるまいか。

## 2 益軒の事業とその健康

かやうにして益軒は身體の健康に注意したが、その注意によつて得た健康は之を無益のために費した事は一つもない。養生によつて得た健康は之を先づ學問の研究に費し、その研究された學問は實に深くして廣く、一代の光彩を放



つものであつた。かくして彼のその博學多識は又彼の健康によつて十分なる努力を傾けしめても敢へてその身體に影響する所がなかつた爲多くの著述となつて現はれたのである。著はす所實に百數十種に及ぶといふ。實に千古の偉績といふべきである。一冊の著述と雖も決して容易なものではない。それが一代にして百數十種の著述を見たことは驚くの外はない。而も感じて餘りあることは、彼の精神は老後瞑目するまで、何等の耄碌を見ず、老いて益々頭腦明晰の感すらある一事である。八十歳以後彼は世を逝く八十五歳に至るまで毎年の如く大著述をしてゐる。今彼が七十歳以後に成せる著述の大様をあげると次の通りである。

- 七十歳 和子解、日本釋名。
- 七十四歳 筑前國風土記、點例、和歌紀聞、君子訓
- 七十五歳 菜譜
- 七十六歳 鄙事記
- 七十九歳 大和俗訓、大和本草
- 八十一歳 樂訓、童子訓
- 八十二歳 五常訓、家道訓
- 八十三歳 心畫軌範、自娛集
- 八十四歳 養生訓、日光名所記
- 八十五歳 慎思錄、大疑錄

以上の如くである。以て彼の事業の偉大なりし一般を窺ひ知ることが出来るであらう。

更に性旅行に興味を有し、儒官四十一年間に、江戸に上ること十二回、京都に上ること二十四回、長崎に行くこと五回、封内の諸州を巡りしことは、その幾回なりしか知らぬ程であつたといふことである。只今の如き汽車汽船の便利な時に於てすら東京へ十二回、京都へ二十四回といふが如き旅行は、普通の人では困難なことである。それが全く水盃をして出た程の昔の江戸上りを、かくも數多く遂げ得たといふことは、如何に彼が旅行に興味を有してゐたか々想像されると共に、かくの如き驚くべき度々の旅行を敢へて可能ならしめた彼の健康の程が如何にもよくうかゞはれる所である。旅行位健康を害ひ身體に悪影響を及ぼすものはないものだ、日頃健康に注意して身體の健康をはかり、且つ旅行中にも十分の注意の届く人でなければどうしてもかくまで度々の旅行は不可能であつたに違ない。何と云つてもよく養生に注意し天性は虚弱乍らも身體の健康を増進し、かゝる大事業を完成し得たといふことは感ずるに餘りあることである。

## 乙 身體の健康に注意すること

### 1 益軒の例話考察

- 益軒の小さい時にはからだが大だがどんなでありましたか。
  - そんなからだでありながら、八十五歳の長生をし、しかもその間に非常に大きな仕事を仕上けることが出来たのはどうしたわけですか。
  - それではからだは何故に大事にせねばならぬですか。
- などの如く發問し、之に答へしめ、益軒の養生について十分感得せしめ、健康の必要なる所以を考へしめ、以て次の訓辭に入る。



## 2 健康の必要

健康の大事なことは一旦病氣にかゝつて見ると直ちにしかも深刻に感得することが出来る。一旦病氣にかゝらんか先づ第一に自分の苦痛が非常なものではないか。病氣から来る苦しみは實にひどいものである。一寸とした腹痛であつてもその苦しみは並大抵ではない。少しばかりの熱があつてもそのために感ずる苦しみは並々ではない。それが三日も四日も一週間もとつくと實際やりきれない。それが一月二月三月、一年などいふやうに續くことになる。本人の苦しみは又格別である。しかもその苦しみは單に病氣からのみ来る苦しみではない。終日床に就いて居らねばならぬ所から自由に戸外に出て遊ぶことも出来なければ學校などに出て友達と共に遊ぶことも出来ず勉強することもならずその方の苦しみも亦一通ではあるまい。

それに本人だけの苦しみならいざ知らず、病氣は單にその本人だけの苦しみに限らない。特に父母やその他兄弟にまでも非常に大きな心配苦勞をかけねばならぬ。少し重い病氣にでもなると、父母は終日終夜その看護に骨身を忘れて努めねばならぬ。恐らく子供達にもその經驗があらう——各兒の經驗を發表せしめるがよい——それであるから病氣をするといふことは大きな親不孝にもなるのである。

病氣にかゝれば夫だけでも大きな不幸であるがその不幸は決してそれだけに限らない。更に又大なる不幸が伴ふ。それは折角この世に生れ乍ら、病氣のために仕事も出来ないで何一つ世の中のために働くといふことも出来ない。それでは折角この世の中に生れた甲斐がない。益軒があれ程の大きな事業を成し遂げたのも全く日頃の健康のためであつて、もし彼が養生に注意する所なく日々不健康な状態で日を送つてゐたら決してあんな仕事も出来ねば、かくも長命をすることも出来なかつたに違ひない。

我々はこの方面から考へても先づその健康をはからねばならぬ。病氣にかゝらぬやうに氣をつけねばならぬ。

## 3 薬より養生

それではそれ程大事ならだの健康を保つには一體どうすればよいのであらうか——各兒、その思ふ所をいはしめるがよい——

それには色々心得ねばならぬことが多いが先づ第一に日頃の養生が何より大切である。

格言に「薬ヨリ養生」といふことがあるがよく考へて見ると如何にもさうであるやうに思はれる。病氣にかゝつてから、やれ醫者だ、薬だとさばぐのは最早やおそい。それより大切なことは病氣にかゝらぬやうに日頃よく自分の健康に注意してよく衛生を守ることが何より大切である。病氣にかゝつてから薬によつて養生するよりも日頃よく養生し、衛生に氣をつけて病氣にかゝらぬやうにするのが第一である。薬より養生とはよくいふたものである。之を最もよく守つた吾々の模範的人物は實に貝原益軒である。

それでは日頃注意をすることには一體どんなことがあらうか。——兒童に考へさせるがよい——  
それには大様左の如き事項に互つて注意をするがよい。

## 1 飲食物の注意

- イ 暴飲暴食をせぬこと。
- ロ 間食を度々せぬこと。
- ハ 腐敗した物を食はぬこと。
- ニ 未熟の果物を食はぬこと。



ホ 營養をとること。

2 運動に對する注意

イ 適度の運動をかゝらぬこと。

ロ 餘り過激な運動は避けること。

ハ 危険な運動は避けること。

3 日光に對する注意

イ 常に日光に當るやう意を用ふべきこと。

ロ 日光消毒を時々行ふこと。

ハ 室内の採光に注意すること。

4 衣服に對する注意

イ 清潔なるものを用ふること。

ロ 無暗に厚着をせぬこと。

ハ 狭ま苦しきものを着けぬこと。

5 清潔に對する注意

イ 居室庭園等を常によく清潔にすること。

ロ 身體の清潔に注意すること。

ハ 特に手足は常に洗つて之を清潔にして置くこと。

6 其の他

イ 室内の通風に氣をつけること。

ロ 衛生上危険な場所はさけること。

ハ 深呼吸冷、水磨擦等、健康に有効なことは之を勵行すること。

以上は最も大切な事の重要な者である。是等の注意を永續する事に依て健康は増進し且之を永く保つ事が出来よう。

4 公衆衛生についての心得

更に氣をつけねばならぬことがある。人は常に共同生活をしてゐるものであるから自分の不注意が他人にとんだ迷惑をかけることが度々あり又他人の不注意が自分にとんだ迷惑を及ぼされることも決して少なくない。特に衛生に關することについてはそれが多し。自分の一寸とした不注意から赤痢等の傳染病にでもかゝることになれば、それがため他人に及ぼす迷惑は實におびたゞしいものとなる。

特に傳染病として困らせられ病氣は少くない。その中でも日本が最も困り最も多くの生命を毎年々々奪ひ去られてゐるものは肺結核である。日本は肺病國といはれる位、この病氣のため苦しまされてゐる。肺結核で年々死亡する者は實に澤山なものである。しかも困つたことにはこの病は他に傳染する病氣であるといふことである。その傳染は患者の吐く痰から來るのが最も多いといふことである。それで學校、停車場その他多數の人の集る所には必ず唾壺を備へ付けねばならぬ規則になつてゐる。そして皆一様に勝手に痰を吐くことを禁じてゐる。

吾々は學校や停車場等は勿論のことその他の場所に於ても痰を吐くことは不作法でもあり又それは公衆の衛生の上からも非常に面白くないことであるから決して所かまはず痰を吐くことはつゝしむやうに心がけ度いものである。



## 第二十二 自分の物と人の物

### 一 目的及び教材観

『自分の物と人の物との別を明かにし、正直の心を一層堅固ならしむるを以て本課の目的とす』

之、修身書教師用書にか、けた本課の目的である。之によつて之を見れば、先づ本課終局の目的は、結局は正直の心を一層堅固に徹底せしむるといふことである。而して、そのために、先づ、自分の物と人の物との區別を明瞭にしてやらう、語をかへれば他人の所有物を私せないやうにしようといふのである。由來、人生に於ける所有權といふことは、實に人にとつての眞剣な問題であるが、人が物質的生活、經濟的生活から脱却することの出来ない以上それは又、やむを得ない所であらう。さればこそこの所有權の問題は、國家最高の法、憲法にすらその第二十七條に『日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サル、コトナシ』とまで規定してある次第であらうと思はれる。我々はどこまでも自他の所有觀念を徹底的に區別せねばならぬ。然し、人間程淺ましいものはなく、唯私欲私利のために、この大切な區別を往々にして蹂躪してしまふ。それは決して兒童のみに限らない。大人であつてもさうである。大人はその區別の觀念はあり乍ら、自分の意志の弱いために即ち我が内に響く良心の聲に確乎として聽従することをようせぬためにとんでもない罪惡に陥ることすら少くないのである。往々世上に暴露される、高位大官達の疑獄事件の如き、その道筋は至極簡單明瞭で、取るべからざるものとつたといふに過ぎない。是、欲の致す所であつて、人として最も慎むべき所であ

るといはねばならぬ。

如少の折から、自他の所有物に關して確乎たる區別をあらしめて、正直の心を養ふといふ事は實に大切な事である。

### 二 教材系統

尋一、自分の物と人の物。高一、公正。

### 三 指導要項

甲 馬子の例話

- 1 馬子大金を鞍上に發見す
- 2 馬子正直に之を届く
- 3 飛脚の喜びと謝禮

乙 自分の物と人の物

- 1 例話考察
- 2 人の物についての心得
- 3 自分の物に對する心得

### 四 指導計畫

- 1 先づ正直なる馬子の例話について説くがよい。この例話に於ては人の財布しかも誰一人、見てもるなければ知



- りもせない財布を拾ひ乍らも之を私せず、しかも多大の勞力を費してまでして之を落主に返却したその心情、その心根が人を感動させずには措かないのであつて、この精神を十分に味得せしむるやう意を用ひねばならぬ。
- 2 それと同時に、飛脚の感謝の情をも附帶して味はしめることが大切である。
  - 3 最後に、自分の物と人の物とに對する區別、人のものに對しての心得等について具體的に且つ懇切に指導して置く必要がある。特に、拾ひ物をした時にどうするか等については十分意を用ふべきで、この際、落し主の心情といふやうなものも十分味はしめてその處理を考へさすべきである。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 馬子の例話

#### 1 馬子大金を鞍上に發見す

昔、近江國河原市——今の滋賀縣高島郡新儀村大字安井川——は西近江路の宿場で馬子としてお役を勤める者が數人もあつた。是等の馬子は馬を牽いて宿場につめて公用に服せねばならぬ義務があつた。

馬子は馬方ともいつて、今のやうに汽車や自動車もない昔は何よりも大切な陸上の交通機關であつた。日本到る所に宿場があつて宿場々々に必ず馬子がゐて、旅人の御用をつとめたのである。この河原市の馬子の一人に中西又左衛門といふ者があつた。日頃至つて正直で土地の庄屋をさへ務める程の人物であつた。所がこの馬子、中西又左衛門について次の如き美しい話が傳へられてゐる。

或日のこと、加賀の三度飛脚が河原市にさしか、つた。三度飛脚といふのは大名の公金を持つて京都の公儀へ持つ

て上る國侍クニサマツヒのことである。この三度飛脚を馬に乗せて次の小松驛まで行つたのがこの中西又左衛門であつた。小松驛まで飛脚を運んだ馬子は、再び河原市まで歸つて来た。その日のお務めもすんだので、馬を牽いて自分の家に歸つて門に入るなり、先づ馬の鞍を下して馬を休めやうと、しめ紐を解いて鞍を馬の背から下さうとすると驚いた。鞍の上からドサツとばかり大きな財布がころがり落ちた。

「はてな」と驚き、いぶかり乍ら、財布の中を改めて見ると更に驚いた。中には金子二百兩。さては大金、一體どうしたことであらうと未だ見たことさへない大金に馬子は顔色かへたのも無理はない。

二百兩といふと大金である。馬子風情にとつては更に大金である。まだ見たことすらない大金である。お米を求めると當時の相場でざつと、三百俵分のお金である。

馬子は考へた。一體誰の財布であらう。考へた末、どうしてもこの財布は今日小松驛まで運んだ彼の飛脚のものに違ない。彼の然脚より外にこの鞍の上に乗つた者はない。「てつきりさうだ！ この大金、之を失くして飛脚はさぞや心配してゐられるに相違ない。之は一刻も早く届けねばならぬ」かう獨り言をつぶやく乍ら馬子は再び疲れた足を、輕ろやかに運んで小松の驛まで走つた。横着な馬子であつたら一體どうするであらう。見も知らぬ飛脚の金、それに誰一人見てゐるでなし、かくせばかくせる。それにこの大金、一生使つても使ひ切れぬ程の大金、知らぬ振りして我が物とするかも知れない。然し、決して他人のものを自分のものとしてはならぬ。他人の品物なら、たとへ一紙半錢と雖も之を私してはならぬ。正直なる馬子はよく人の道を辨へてゐた。彼が人の物を誰が見てるやうがるまいが、私せず、之を小松驛なる落主の下へと、返して走つたのは誠に感心の外はない。さて、小松驛まで来て様子をさぐつて見ると、彼の飛脚は、宿の都合で榎木驛まで来て宿をとつたとのこと、そこで彼は更に榎木驛までやつて行つて、や



つとの事で彼の飛脚の宿を探し出した。

## 2 馬子正直に財布を届く

話がかはつて飛脚の話、飛脚はやつと宿に着いたので「やれく」といふ氣持で早速旅装を解いて旅の疲れを休めようと座敷に通り、先づ荷物を改めて見ると外の荷物に變りはないが大事の大事の財布が見當らない。別に捨てた覚えもないから、どこかにあるに違ないと、一々荷物から一切何かから何まで探して見るがどうしてもない。

「さあ大變」かうなると飛脚の驚愕、心痛は一通りではない。然し、どう考へて見ても覚えはない。「いや待て、この大事な財布を捨てる筈はない、どこかにあるに違ない」再び一切の荷物といふ荷物は、入念に改めて探したが見當らない。愈々飛脚は顔色かへて驚いた。そして溜息をつくばかり。「も早や致方はない。どう探して見ても財布は見當らない。財布がないからには自分も覺悟を極めねばならぬ。一命以て身の潔白をあかさねば侍の顔が立たぬ」飛脚の顔色はたゞならぬ色に變つた。思へば思ふ程、自分の不注意、不用意が今更のやうに心をとがめる。「いや早や、つまらぬことを仕出來かしたものである。自分の不注意とは申し乍ら情ないことだ。自分の罪は、自分一人の苦しみではない。親兄弟までも及ぶに違ない。何と腑甲斐ないことをしたものかな」と一人で部屋の中に悶えに悶えてゐると、そこへ訪ねて來たのが先刻の馬子である。

「實はかくくの次第で……」と事の次第を残らず述べ、「もしかしたらあなたの物ではなからうか、もしさうでもあつたらどんなにか御心配になつて御出になる事かと實はすぐ様走つて來たやうな始末であります」と述べ足した。話の次第を聞いてゐた飛脚は夢かとはかり打よろこび、且今までの心配をつぶさに話した。馬子は財布の模様や中の金子などについて改めて尋ねて見ると一々符合して一點疑ふ餘地がないので「それではここに財布をお返し致します。

す。改めてお受取りを願ひます」といつて差出した。見ればまがふ方なく自分の財布、「いやはや、どうも、何と申上げて御禮を云つていひか分かりません。確に私の財布に相違ありません。有難く頂戴致します」と涙にかきくれないながらそれを丁寧に受取つた。

## 3 飛脚の喜びと謝禮

飛脚の喜びは一通りではなかつた。之をなくしたと氣づいた時の悶がはけしかつた程、その喜びは又大變なものであつた。財布を受取つた飛脚は更に語をついで云ふには

「まあ、何といふ有難いことでございます。私は何といつて御禮を申してよいやら申上げやうもありません。ほんとにあなたは私にとつて命の親であります。私はもし、この二百兩の金子がないとすれば一命を捨て、この身の潔白をあかさねばなりませんでした。その上、この罪は親兄弟にまで及ぶに違ありません。ほんとうに有難う存じます。いくら申上げてもお禮は申上げ切れません。之はほんの些少なもので私の心持に過ぎません。御禮のしるしにお收めを願ひます」といつて差出したのが金十五兩。

馬子は驚いた。「とんでもないことをなさいます、私は決して御禮金を受けやうなど、思つてこゝまで財布を持つて來たのではありません。あなたのお金をあなたにお返ししたのであつてどうしてそんな大金を受けられませうか」といつて見むきもしない。飛脚は「いや、之は全く御禮のしるし、どうぞお納めを願ひたい」といつてきかない。馬子はどうしても之を受けない。飛脚はたつての願どうぞといつて進めるがどうしても受取るやうな素振りもない。飛脚もしかたがない。「之では益々些少になつて相すみませんが之だけでも納めて下さい」といつて十五兩の中から五兩引いて十兩にして出したがそれでも取つてくれない。しかたがない更に五兩減らして五兩にしたが、やつぱり納めない



三兩にして、「是だけは是非にと」と進めたが更に受取る様子もない。飛脚も困つてしまった。とう／＼二歩に減らしてすゝめた。二歩は半兩である——四歩が一兩であるから二歩は一兩の半分——「せめて之だけは何としてもお納め下さい。之程まで云つても受取つて戴けないと私の折角の心も届きません。寝ても眠ることも出来ません、一生の願、私を助けると思つて受取つて下さい」と赤誠をこめてすゝめた。馬子も餘りの熱心さに當惑した。取れば何だか心がとがめる、取らねば先方に氣がすまない。遂に決心して「いや實は御禮の金などいたゞくつもりでございまして、却つて来てはありませんで、御禮など受けては私の本心にかまひませんが餘りのすゝめに従はないのも却つていかゞと存じます。それでは「二百文だけ有難く頂戴致しませう」やつと二百文だけを受取ることにした。二百文は一兩の百分の一、一兩を一圓とすれば二錢に當る。

餘りの事に飛脚は何とも言ふべき言葉を知らなかつた。馬子などにしては餘り心が美しいので却つて不思議にさへ思はれて「一體あなたはどいふお方でございますか」と尋ねて見た。所が馬子が答へるには「いや、別にこれといふ程の者でもありませんが私の隣村に中江與右衛門——藤樹——といふえらい方がありまして毎晩色々の講釋を聞かせて下さいます。私も時々聞きに行つて人の物はとつてはならぬものだと思つて居ますので實は今日もあの財布をお返ししたに過ぎません」

馬子の答を聞いた飛脚はさても感心な話であると感じ入つた。やがて馬子は別を告げて又河原市へと歸つて行つた。

## 乙 自分の物と人の物

### 1 馬子の例話考察

主なる設問

- 馬子が河原市から小松驛に飛脚を送り、歸つて馬の鞍を解いた時どんな事がありましたか。
- 馬子はその財布をどうしましたか。
- 飛脚は財布を捨て、どんな思をして居ましたか。
- 飛脚は財布を返されてどんなに考へましたか。
- それからどうしましたか。
- 馬子はお禮の金を何といつてことわりましたか。
- 飛脚が色々進めるので馬子はしまひにどうしましたか。
- 馬子のお話で感心する所はどんなことですか。

右の如き發問をして一々答へしめ、馬子が自他の所有物に對して明確な觀念を有し、他人の所有を私せなかつた強き信念を捉へさせたい。かくて次の如き訓辭をなす。

### 2 人の物に對する心得

我々は自分の物と、他人の物との區別をしつかりと立てねばならぬ。人の物を自分のもの、如く私することは最も慎むべきことであつて、昔から他人の物を私することは最も大きな恥としたのである。それでは他人の物についてはどんな心得が必要であらうか。——之については兒童をして考へさせるやうにしたい。そして教師は之を補説する。

- イ 他人の物は一切私せぬこと。
- ロ 無斷で借用するな。
- ハ 借用したものは大事に取扱へ。



- ニ 決して又貸ししてはならぬ。
- ホ 拾つたものは私するな。

拾物についての處置については特に十分指導してやるがよい。落主に必ず返すこと、それが分らねば教師、又は交番に提出すること等――

- ヘ 借りた物は必ず返すこと等
- 三 自分の物に対する心得

他人のものを私してはならぬと同時に自分の物は他人からその所有権を犯される道理は決してない。然し、自分の物だといつて之を粗末にしてはならぬ。自分の物については次の如き心得が大切である。

- イ 大切に取扱へよ。
- ロ みだりに之を捨て、はならぬ。
- ハ 必ず姓名を記入して置くこと。
- ニ 始末をよくすること。等。

## 第二十三 共 同

### 一 目的及び教材観

修身書の教師用書に『共同一致して事をなすの必要なることを教ふるを以て本課の目的とす』とある通り、本課の目的とする所は共同一致の必要なるを説き協同の精神を養ふことに存する。

かの淮南子に『五指ノカハルガハル彈クハ一手ノ搏ツニ如カズ』といふ名句がある。一手は五指の集つたものである。然し、五指のかはるがはる彈いた總和よりも遙かに一手の搏つ力の方が大である。之、共同の力の偉大なることを譬へて言つたものである。共同の力は實に偉大である。個々の人々が個々別々に到底爲し遂げ得られない大事業も共同の力に待てば易々として成就成功するものも決して少くとはせない。又共同の力に依るにあらざれば到底成就し能はぬ事業すら世には決して尠少とせない。例へば公衆衛生の保全の如きはその好適一例である。如何に傳染病の豫防を一人や二人でやつて見た所でどうしようもないことである。實業の發達の如き又、無二の好適例である。貿易商人がたゞ一人たりとも不正行爲があつてすら、我が國全體の貿易に至大の影響があり、それは引いて日本全體の實業に對して非常な不利益を將來する。その他事業の發達に共同の力にまつべきものは決して尠くない。

世の中の事業中考へ來れば共同の力にまつべき事は頗る多く、児童の生活中にすら共同的の作業は可なり多いのである。この共同の精神にかくる所あらんか、児童現在の生活に於ても、亦將來の生活に於ても困ることは夥しい。共



同の精神を涵養することは社会生活の上からも實に大切なこと、いはねばならぬ。

## 二 教材系統

尋六、共同。高一、共同。

## 三 指導要項

### 甲 毛利元就の例話

- 1 毛利元就の人と爲り
- 2 毛利元就三子に教ふ
  - イ 元就に三子あり
  - ロ 元就三子に教ふ
  - ハ 三子教を守り家運無事繁昌す

### 乙 共同に對する訓辭

- 1 毛利元就の例話考察
- 2 共同の必要
- 3 共同して仕事をなす上の心がけ
- 4 共同の善用

## 四 指導計畫

- 1 第一に毛利元就がその三子に教へた例話を説話するがよい。それには毛利元就の人と爲りを先づ大體兒童の腦裡に描いてやらねばならぬ。毛利元就がどんな人か、商人であるか、武士であるか、それとも農夫であるか、それさへ分らないではこの例話は生きて來ない。
- 2 長子隆元は早逝したが二子元春三子隆景の二人はよく長兄隆元の子輝元を助け宗家のために協力して家運の長久をはかつた點にも十分力を注ぐべきである。
- 3 訓辭としては共同の必要や共同して仕事をする上の注意等を説く必要があるが特にこの際意を用ふべきことはどこまでも兒童日常のさうした生活を指導するやうにしたい。共同の精神を日常の實生活の中に實地に働かすやうに具體的に指導することが大切である。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 毛利元就の例話

#### 1 毛利元就の人と爲り

毛利元就は今から凡そ三百年前の人である。當時は戰國争亂の時で群雄各地に競ひ起り、力ある武士は各々領地を私有し城を構へてその領地を支配した。安藝國吉田に郡山城といふのがあつた。今の廣島縣高田郡吉田町であつて廣島市からは可なり山奥に入つた土地である。この城主を毛利興元といつた。興元に一人の子供があつた。幸松丸



といつて之に一旦家を繼いだが不幸にも早く死んだので興元は自分の弟なる元就を迎へてこの城をつがせた。かくて元就は兄興元に迎へられて吉田、郡山の城主となつたのである。——父は弘元といひ、その長子が興元で、元就はその第二子であつた。——

元就はかの有名な大江廣元十三代の孫に當り幼少の時から氣宇頗る活潑、膽大にして常に大きな志望を胸に抱いてゐた。小學國史の中にも見えてゐる通り彼が十二才の時の事である、侍臣と共に嚴島神社（宮島）に參拜したことがあつた。侍臣は「今日は若君が安藝全國の領主におなりになるやうにと神様に祈りました」とさも元就の機嫌をとつたつもりで話すと、元就は立所に「何！ たつた安藝全國の領主か、何で天下に主となるやうに祈らなかつたのか」といつて頗る不機嫌であつたといふ。之を見ても元就の人と爲りを察する事が出来る。

當時中國に勢を振つたのは大内氏と尼子氏とであつた。大内氏は山口に根據をかまへ周防・長門・安藝・豊前等の地を領し勢頗る強く、又尼子氏は出雲に居城を構へて、隱岐・石見等其の他を領し之又勢頗る揚るものがあつた。それに引かへて毛利氏は勢全く振はず、安藝の一部を領するのみで微々たるものであつた。それで或時は大内氏に屬し又或時は尼子氏に款を通じて漸くその領地の保全を得るといつた有様であつた。

然るに、勢盛大を極めた大内氏は勢に慣れて漸く驕者に流れた。その隙に乗じて、家臣、陶晴賢スエハルカケが叛き、遂に領主大内義隆を弑してしまつた。主家に引引く不屈者と元就は直ちに義兵を起して弘治元年晴賢を嚴島に誘致して之を弑し尋いで大内氏の所領を收めて一躍大領主となつてしまつた。かくて尼子氏をも滅してその所領をも併吞して愈々勢力をはり、中國無雙の雄勢となつた。その所領、安藝・周防・長門・備中・備後・因幡・伯耆・出雲・隱岐・石見・豊前等十餘國に亘つた。

永祿三年、正親町天皇即位の大禮を舉行し給ふに當り其の費用を献上して尊皇の精神を現はし、その功を賞し給ひ大膳大夫に任ぜられた。ついで陸奥守を兼ね從四位に叙せられ元龜二年六月十四日卒した。年七十五その翌年從三位を贈られたが明治四十一年には更に正一位を追贈された。

## 2 毛利元就三子に教ふ

1 毛利元就に三子あり 毛利元就には三子があつた。長子を隆元といひ二子を元春といひ第三子を隆景といつた。長子隆元は元就の後を繼いだ。非常に孝心の深い人でよく父に事へ孝養を致したが惜しいことには父に一年先つてこの世を去つた。二子元春は十二歳の時既に父に従つて戰場に出陣し尼子氏を討つた程の勇士であつた。吉川興隆に養はれて吉川の家を繼いだ。三子隆景は小早川直平の家を繼いで小早川姓を名乗り、彼の音に名高い小早川隆景である。小早川隆景の武勇については多く世に傳はり、幼少の頃から父に従つて出陣し、いつも兄元春と先登を承つて働き、兩川——吉川・小早川——の綽名さへ唱へられてその武勇を稱せられた。特に秀吉が朝鮮に兵を出して明國をうたうとした時の如きは、明の勇將季如松を大いに碧蹄館に破り、その勇名を轟かしたことはよく人の知る所である。隆景は武勇人に勝れ、智謀又衆に秀で沈毅・英邁實に比類稀なる名將であつたので秀吉も之を重用し屢々大政軍略に參與せしめた程である。

□ 元就三子に教ふ 當時は戰國爭亂の世とて常に他の所領を伺つて隙さへあれば之を討つて自分の領土を増さんと爪牙を磨き立て、ゐる時代である。それに元就は僅かに安藝の一部しか領し得ない一小藩に過ぎなかつたが陶晴賢を討ち、太内氏を亡し、尼子氏を滅して一躍中國の權勢を一手に握る天下の大藩となつたのである、それであるから自分の歿後、又如何なる強敵が現はれて毛利氏の所領を犯さんも計り知ることは出来ない。事によると毛利氏も今が全



盛で之限りに亡びてしまはんものとも限らない。かうした心配から常に三人の子供に將來の心得を説いて聞かせ、協力一致よく力を合せて毛利氏の家運の長久をはかるやうにと教へてゐた。そして、元就が六十一才の時の事である。年六十も越せば、又いつ如何なることがあつてこの世を去らねばならん事の起らんも計り知ることが出来ない。そこで元就は三人の子供に訓戒の書を作つて與へた。時に長子隆元は三十五歳、二子元春は二十八歳、三子隆景は二十五歳であつた。

この訓戒の書物は、懇切丁寧に三人の兄弟たちの心得べきことを細々と書いたもので箇條十四項に亘る長いものである。その原本は今世に傳つてゐないがその寫本が吉川子爵家に藏せられてゐる。

是、時勢はさきに述べたやうな有様、それに丁度、この年大内義隆の子、義長が自殺して、大内氏の所領を殘らず收めた事である。自分の所領の殖えることは一方から云へば他から奪はれてしまうことである。家運が隆盛になれば又將來のことが氣にかゝり、特に三人の子供が各々姓を異にし、長じて後各々自分の所領のことにみに心をつかい、互に相分立、相反目するに於ては毛利家の家運もその長久はとても望まれないとの懸念からであつたに違ない。その訓戒書の要點は

- 一、共に毛利家を重んじてあだおろそかに思ふてならないこと。
- 二、三人の間が聊かでも仲たがひを生ずることがあつたらば三人諸共に滅亡を免れることは出来ない。それであるから三人よく心を合せ長子隆元は弟元春、隆景の所行に對して意に滿たぬ所があつても親心をもつて之を導き、決して怒るやうなことがないやうに萬事堪忍する所がなくてはならぬ。又弟元春、隆景の二人は兄隆元の振舞にあき足らぬ所があつても、兄は兄と思ふて之によく順ふ所がなくてはならぬ。

三、かくて子々孫々末代までも毛利家の家運の隆昌をはかるように。といふ事とその重なることである。

更に長子隆元には之と同時に一書を與へて長子としての心得を説く所があつた。その要點は『汝は長子であるから特によく萬事に心をつけ、かの訓戒書を無二の守として家の無事長久を圖れよ』といふのであつた。そこで三人は父元就の精神をよく呑みこみ、父の訓戒に従つて三人一身同體となつて毛利家のために盡さうと心がけることに決心した。そして、それを又三人連署で『父上の教に従ひ縦令兄弟三人は互にその姓を異にしても心を一つにして共同一致して決して隔意等生することなく必ず御訓戒の御趣意を堅く守ります』との請書を父元就に差出し三人は堅く父の訓戒に誓約したのである。この請書も又吉川家に今に傳へられてゐる。

ハ 三子教を守り家運無事繁昌す 孝心深き長子隆元は其の後六年四十一歳を一期として惜しくも病死した。時に元就は六十七才、それに隆元の長子輝元は僅かに十才であつた。それから更に八年元就は七十五才を以て波亂多き一生を終つた。かくて毛利の宗家を一身に擔ふて立つ者はその孫輝元である。輝元とつて僅かに十八歳である。

然し、元春、隆景の二人はよく父の訓戒を守り終始心を合せて若年の輝元を助けてやつたので、かくの如き亂世の時代にあり乍らよく家運の無事長久なるを得、毛利家の基礎を固めることが出来た。毛利家は其後も代々相つゞき明治維新に際しては特に王事に勤め今に毛利公爵家としてその家運は隆々たるものである。

## 乙 共同に對する訓戒

### 1 元就の例話考察

主要なる訊問



- 毛利元就はどんな人であつたか。
  - 三人の子供についてどんなことを心配してゐたか。
  - 三人の子供にわたした書き物にはどんなことが書いてあつたか。
  - その書き物を載いて三人の子供は父に對してどんなことをしたか。
  - その後毛利家はどんなになつたか。
  - 毛利家がかゝる戦亂の世によくその家の基礎を固めることが出来たのは主としてどんなことに基くか。
- 等の間を發して、かゝる戦亂、多事物騒の時勢にあり乍ら、しかも宗家毛利家は父隆元、祖父元就を失つて若年輝元が繼いだにかゝはらず依然としてその權勢を失墜する所なかりしはよく元就の死後も尙その教を兄弟よく守つたことに基因することを十分に理會せしむる。

## 2 共同の必要

毛利家は元就の死後僅かに十八才になる孫輝元がその家をついだが、かくの如き戦亂の世、大は小をうかゞひ、強は弱をねらい折もあらば他を併せんとし、隙もあらば外を併呑せんとするやうな物騒な世相にあつたにかゝはらず、よく毛利家萬代の基礎を固め得たのは之全くその子元春、隆景をはじめ子々孫々よく元就の教訓を守り共同一致して家運の隆盛に當つたからである。諺に『兄弟は他人の始め』といふことがあるがもし毛利の兄弟たちが互に分立してこの諺の如く他人の如き考で互に相反目したならば必ずや毛利家は元より吉川家も小早川家も共に滅亡してゐたかも知れない、が三人は元より、又その子々孫々、よく元就の教を傳へ、相ついでその教を守つたので今日に至るまでも續く立派な名家として隆々たる家運を持續し得たものであらうと思ふ。

これ全く共同の力の致す所であつて、人が共同してかゝれば實に偉大なる力を生ずるものである。かの一匹の虎をこま程の蟻が共力一致依てたかつて苦しめてとう／＼降参させた寓話が國語讀本に見えてゐるが實にその通りである。何でも共同して仕事をするとその力は大きくて強い。教室内の掃除でも一人や二人が綺麗にしようと思つて別に何のこともないが、教室の生徒全體がその心になつて共同してやつたら、一月はおろか一週間もかゝれば見かへるやうになるであらう。又學校全體がその氣になつて共同一致してやらなければならぬことは多い。朝禮の集り方でも一人や二人が早く集合するだけでは別に大したこともないが全校みんなが共同一致して集りを早くすることになればすぐに全體がよくなるのである。

それは又學校だけに限らない。世の中にも共同の力にまたねばならぬことは實に多い。かうして學校の建てられてゐるのも、鐵道の敷かれ、道路の通ぜられてゐるのも、橋の架けられてゐるのもよく／＼考へて見ると、皆之共同の力によつたものである。どんな金持だつて一個人を以て九州の南の端から北海道の北の果てまで鐵道を布くことは出来得まい。

その他衛生上のこと、左側通行のこと、電車、汽車の降り方乗り方等皆が共同一致の心で守つて行かねばならぬことが多い。と同時に道路の普請やその他共同の事業に一致して當らねばならぬことも多い。かゝる場合共同一致の精神が愈々發揮すればそれ等の事業は愈々立派にとけられて行く。

何といつても共同一致の精神は尊いものといはねばならぬ。

## 3 共同して仕事をなす上の心かけ

それでは共同して仕事をなす上に於て吾々はどんな心がけが大切であらうか。それはどうしてもすべての人々が皆



自分をつゝしんで行くといふことであらう。例へば教室内の掃除を十人で共同してやると考へよう。もし十人の中の一人一人が忘れてゐたのでは共同も出来まい。十人の人々は皆各々十人一組のためを思ふて銘々が、そのつとむべきことをちやんと務むるといふことでなければならぬ。自分にはつらいことがあつてもそれを我慢して精出して行かねばならぬ。それでなく、皆勝手次第に自分の好きなことをやつたり、いやになればやめてしまつたりするやうなことではとても共同の仕事はうまく行くものではない、共同の仕事をする上には常に銘々がその全體のためを思ふて自分をつゝしみ、そのつとむべきことをしつかりと務むるといふことでなければならぬ。この心がなければ到底共同して仕事をするといふことは出来ない。

#### 4 共同の善用

共同の力は實に強い。一人一人では到底出来ないことも共同の力に依る時は易々して之を成就することが出来る。そこで考へねばならぬことがある。それ程共同の力が強いものとすれば萬一この強い共同の力を悪い事に用ひたらどうであらう。それこそとんでもない大きな悪事が行はれるに違ない。世の中には共同して非常な大きな悪事をなした例は決して少くない。

又學校などでも共同してよくないことをするなど決してないとはいへない。共同していたづらをしたりするとそれは大變なことになることもある。それであるから共同して事をなす時にはよく考へてそれが良いことであつたら進んで之に加りて大いに働くべきであるが、もしも、その事がよくないことであつたら決して之に加つてはならない。そして之に對しては十分に忠告をして之を取やめさせるのが人の道である。例へば友達同志が一緒になつて道を掘つて落とし穴を作つたり、その外いたづら子供のよくやることは多いが、こんなことはつゝしまねばならぬ。

## 第二十四 近所の人

### 一 目的及び教材觀

私達が私達自身の生活を心靜かに内觀して見た時、それが深くなり廣くなればなる程、そこに明瞭になつて來る事實は、私達の生活が單なる孤單獨の生活ならずして社會共存の生活であるといふその確かであらう。私達の一切の生活、一一の大小となき生活、それ等は實に社會てふ一大組織の中に包含されたものであつて決して他の一切のそれと切斷し得るものではない。されば私達一切の生活が相互に相扶け相支持して行く場合に於ては、その生活は相互に最も幸福なる場合である。

然るに不幸にして、もしこの共存共同の精神に背反する場合に於ては、立ちどころに社會共同共存の生活はこゝに脅威を感じその生活は不幸を招來するのである。

然かも、社會共存の生活は他の人々と常に或る特殊、特別の關係の上に於て成立するものであつて、或は家族關係、親族關係、友人關係、その他職業、業務上の關係等そこには常に極めて複雑なる關係に於て或る特殊のつながりを以て相互に共存の生活が遂げられて行かねばならぬ。

私達が共存共同の生活を遂げて行く上に於て明らかにそれと氣づかれる特別關係は少くはないが、わけて地理的に接近してゐる近所近隣との相互扶助の如きは又その大きく深きもの、一つであらう。近所近隣相扶け共存共同の生活



を遂げるといふことは實に人間道德の大きなもの、一である。かくしてそのために相互の生活はより幸福にもなつて行くわけであらうと思はれる。而して近隣互に相親しみ相睦み合ふといふことは、やがて社會相愛隣保團結の基ともなるのであつて近所の人々に對して親睦相助の道を教へるといふことはやがて又社會全體の親睦和合の道を教へるといふことになる。一切の近所近隣の道を一切の人々が守ればそれはイコール社會全體であるからである。然し、人々は決して人としての道を誤りなく履み行ふとは限らない。かくなすべき事とは知り乍らも、そこには人間らしい感情、人間らしい欲、人間らしい意地などいふものがあつてその則るべき道が踏みにじられて行くことも少くない。されば、ともすれば近隣共にその親しきになれて互に相反目する事すら決して絶無とはいへない。それでは人間當然の道に違背するのみならず社會共存の精神にも反し相互に不快、不幸の生活を送らねばならぬことにもなる。幼い時から近所近隣の恩恵について相當の理解を與へ且つ近所近隣の人に對する道を教へるといふことは實に大切なことであつてそれは既に近所近隣の人に對する道を教へるといふこと自身が修身教育上大切なことなのであるが、又それが延いて社會共存生活の精神の基礎ともなるといふ上からは、それは一層大切なことである。

本課は、實に修身書教師用書に

『近所の人々に相親しみ相助くべきことを教へて隣保團結の精神を一層深く養はしむることを以て本課の目的とす』と指示してある通り、先づ近所の人に對する道として相親しみ相助くべきことを教へ隣保團結の精神を涵養せんとするものである。

## 二 教材系統

尋一、近所の人。

## 三 指導要項

甲 佐太郎の例話

- 1 佐太郎の人と爲り
  - イ 佐太郎の生立と勤勉
  - ロ 佐太郎の孝養
- 2 佐太郎近隣の人々を助く
  - イ 村の人の屋根を繕ふ
  - ロ 火災にかゝつた人を救ふ
  - ハ 其他よく村の人々に親切をつくす

乙 近所の人に對する道

- 1 佐太郎の例話考察
- 2 近隣の人に對する道

## 四 指導計畫

- 1 教授は、例話から入るもよからうし、又近隣の人に對す道の如何にあるべきか乃至は近隣の人を助け又は厄介



になつたことその他、親睦和親の現はされた経験を發表し之を出発點として、順次教授を進めてもよからう。

2 佐太郎の例話の取扱は、先づその人と爲りを説き、その人格的背景を描出し、その上に近隣の人に對して親切を盡したといふ例話を説くやうにあらせねばならぬ。それでなければ、眞にこの例話を徹底させるといふことは出来ない。

3 近隣の人に對する道について説く場合に於ては、よく兒童の経験に立脚して取扱つて行くことが大切である。即ち近所の人に非常に御世話になつた事とか、乃至は近所の人の困つてゐる時、何か手傳つたり御世話して上げたした事と等と常に密接に關係づけて説くことが大切である。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 佐太郎の例話

#### 1 佐太郎の人と爲り

1 佐太郎の生立と勤勉 佐太郎は今から約五十年前位の人で相模國足柄郡足柄村大字町田の人である。佐太郎の父は彌右衛門といつた。代々三十數石程の資産を有し村でも裕福な百姓として一般から信用もあり組頭の役までも務めた位であつた。所が父の代になつて不幸がつゞき代々相傳へた家産が傾いて田畑も多く人手に渡り、非常に困難なぐらになつてしまつた。そのため佐太郎が親から譲受けた田畑は極々僅少なものでしかなかつた。然し、佐太郎は何とかして普通りの家産を恢復し度いものであると思つて、一心不亂に働いた。その勤勉努力の有様は實によその見る目も驚く程であつた。朝は早くから、夕は遅くまで田畑にあつて働いた。しかも佐太郎の耕作は色々よく出来る

やうに研究して作るのであつて、其の作つた稲田は毎年々々他の人々のよりも遙かによく實のるといふ有様であつた。村の人々は「佐太郎の田はどうしてあんなに人のよりよく實のるのであらうか」と不思議に思ふ位であつた。それ時々佐太郎に向つて「一體どうすればあんなによく田が出来るのか」と尋ねる者も澤山あつた。かくして毎年々々の人一倍の働きは塵も積つて山となるの喻にもれず僅かづゝの貯へもいつの間にか年數を重ねるに従つて、積つて行き漸次家産の恢復も出来るやうにさへなつて來た。幾年かの後には既に田畑十一石を所有するやうになつたといふことである。之全く佐太郎の勤勉力行の賜であつた。

□ 佐太郎の孝養 佐太郎は勤勉力行の人であつたばかりではない。又非常に親孝行をした感すべき人でもあつた。小さい中から両親に事へてよく孝養をつくし、特に彼が四十五才になつた時、父彌右衛門がなくなつた後の母に盡したその至れり盡せりの孝養は近在の人々の特に感ずる所であつた。それについては次のやうな話が残つてゐる。

佐太郎の家は漸次家産を恢復したのであるが、決して昔の時代とは比べものではなかつた。食事の如きも決して三度々々お米の飯を食ふことは出来なかつた。朝は麥を粉にして之で焼餅を造つて食ふのが常であつた。そして晝と夜の二食は麥飯におかすは野菜といふ有様であつた。

所が母の食物だけは常に殊の外之を注意して造つて進めた。麥の春き方から洗方に至るまで、よく念を入れ麥粉で焼餅を造るのでも、必ず母の分だけは糯米の粉を交せておいしくして之を進めてゐたといふことである。又晝や夜の麥飯でも母の分には特に米を交へて之を炊き出来るだけ母の口に合ふやうにして之を進めてゐた。老母は非常にお茶を好んだのでお茶だけはどんな時でも之を缺がした事はなくいつも之を煎じて進めてゐる。

母のために盡くした事で面白い語が残されてある。それは佐太郎が家の中に幾本も幾本も柱をたてたといふ面白い



話である。母は年老いてから、膝の痛む病氣にかゝり數年間も苦しんだが、全快に至らず常に家の中を這ひ廻つてゐた。そして用さへなければ家の中の爐の傍で薪を焚いてその日／＼を送つてゐた。所がその爐の側には柏栗の、まはり三尺ばかりの大きさの柱が六本爐をめぐらして建て、あつた。しかもその根本は地下五尺ばかりも掘りこみ丈夫にしてある。この有様を見ると誠に不恰好でお話にならぬ變な有様であつた。村の人々は「佐太郎は變な柱を六本も建てこんでゐるが一體あれは何をするのだらうか、仕事の邪魔になつてしようがないだらうに」など、云つて不思議がつてゐるばかりで誰一人そのわけを知つてゐる者はなかつた。

所が同じ村の市兵衛といふ百姓があつて、「このやうな大きな柱を六本も建て、何になさるのか、百姓の家では柱の数が多ければ多い程仕事の邪魔になつてしようがないのだから大概な者ならいらぬ柱は皆取除いてしまふのに之は又どうしたといふのだ、お前さんに限つて用もない柱を六本も建てるとは一體何の眞似事だい」とさけすむやうに尋ねた。すると佐太郎はすました顔で答へる。その答が誠に面白く且つ感心の外ない。

「そんなに不審にお考へになるのも尤もなことでありますが、これには少々仔細がありました」といつて話したのが次の通りである。

「いや、實は私の母がまだ若い時のこと、小田原に大地震がありましたさうで、その時の地震は餘程はけしかつたと見えまして、それ以來私の母が地震をこはがるのは大變でとても一通や二通ではありません。一寸地震でも揺らうものなら大變な騒ぎなんです。それに御承知通り今はもう足腰立たぬ有様になつてしまひましたので、家の中さへ自由に歩けず四ツ這ひに這つてやつとこゝで用事をすませてゐる位であります。それですから、さあ地震だ、大風だといふ事になるととても急には外へはとび出せません。それで家だけはどんなひどい大風や地震があつても倒れる氣づか

いのないやうにと思つて實はあの通り不恰好とは知り乍ら大きな柱を建てた次第でございます。」

始めて聞かされた市兵衛「さてはそんな次第であつたか」と今更の如くに佐太郎の孝心の深いのに感入つたといふことである。之を傳へ聞いた村の人たちも、六本柱の大きな謎が解けたのみならず、佐太郎の届いた心やりに皆感心せぬはなかつたといふ。

## 2 佐太郎近隣の人々を助く

佐太郎は家にあつてはよく家産の恢復につとめ勵み、親に、事へては至孝至らざるなく、實に感すべき行が多かつたことは前に述べた所によつて明らかであるが、然し、佐太郎の感心な行は決してそのみに限らなかつた。かくの如く内に向つても感すべき澤山な行のあつた佐太郎は又外に向つても感すべき行が多かつた。それは彼が非常に親切同情の心に富み近隣の人々は勿論、よく村の貧しき人々をあはれんだことである。それについては又色々美しい話が傳へられてゐる。今それ等の二三について述べて見ることにしよう。

4 村の人の屋根を繕ふ 同じ村の或人の屋根が非常に損じてゐた。いつ見てもそれが修繕されてない。佐太郎は不思議に思つて「あなたは、なぜ、さういつまでも屋根の修繕をなさらぬのか」と尋ねて見た。すると、その人が云ふには「いや、修繕したいのは山々なんですが御見かけ通りの貧困で、見苦しいこと、は思ひ乍ら、ついそれが出來かねてゐる次第であります」と答へた

之を聞いた佐太郎は非常に之れを氣の毒に感じて、その人のため自分から、村中をかけまはり家々から藁四五把づゝを貰ひ集め、又自分も藁を與へて、屋根の修繕をさせてやつた。

本人のよろこびは一通りではなく、又佐太郎もその屋根が思つたより、よく修繕されたので我が事のやうによろこ



んだ。かうして貧しい人々を助けてやるといふことは村の人々のお互のなすべき道であつて、佐太郎の骨折りで村の貧しい人の屋根がよく出来たこと、て村の人たちもさぞよろこんだことであつたらう。

□ 火災にかゝつた人を救ふ 又或時、村の人で出火に會つて家を焼らす焼いてしまつた人があつた。佐太郎はすぐに見舞に行つて色々世話をした上自分の藪から竹を切つて行つてその人に贈りなどした。

世にあはれなるものも多いが出火に會つて焼け出された者程あはれなものは又とあるまい。臥するにその所なく、食ふに食なく、着るに衣なく、炊ぐにその器なく、盛るに碗がない。かゝる折には佐太郎は誰よりも早く出てその人の家のために働いて、色々とその家の人々が立つて行けるやうにしてやつたが世の人々もかくありたいものである。

ハ 其の他よく村の人々に親切を盡す 其の他、佐太郎が人の難儀を救つてやつたことは非常なもので、一々あけて之を數ふことも出来ない位であるといふことである。或時の事である。世右衛門孫兵衛といふものが、大變、ひどい、はやり病にかゝつたことがある。村の人々はその氣にふるれば立所にうつるといふので、哀れにも病に呻吟してゐる孫兵衛を誰一人たづねてくれる人もなければ、見舞つてくれる人一人ない。時たま見舞つてくれる人があつても病をおそれて、義理も人情もあればこそ、一言二言、物を言ふとすぐさま歸つてしまふといふ有様であつた。病氣がおそろしいから無理もないといへば無理もないことである。

所が佐太郎はこの有様を見て非常にあはれに思つた。佐太郎だつて、病氣がこわくないといふことはなかつたに違ないが、それでは孫兵衛が可愛想である。可愛想な孫兵衛に對する同情の心で一杯である。こはい病氣などといふ様子は更でない。いつもひまある毎に孫兵衛を訪ふて行つて何くれとなく看護をしてやつた。孫兵衛の家は病氣の上に家が非常に貧困で、愈々食ふにも困る有様であつたので、米を與へたり、又藥のことにまで心配をしてやつたといふ

ことである。誠に感心な話ではないか。

## 乙 近所の人に対する道

### 1 佐太郎の例話考察

主なる設問

○ 佐太郎はどんなにして家のために働きましたか。

○ 佐太郎はどんなにして母を大切にしたか。

○ 佐太郎は近所の人や村の人に對してはどんなにして親切を盡してやつたか。

○ それについてはどんな話が残つてゐるか。

○ 佐太郎のお話を聞いて最も感心する所はどんな事か。

などの如く發問し兒童に答へしめ、佐太郎がどこまでも、内にあつては母のためにつくし、外に向つては近隣のために親切をつくした精神を十分に理會せしめる。そして次の通り訓辭に入る。

### 2 近所の人に対する道

1 尋一の例話復習 「佐太郎はよく近所の人に對して親切を盡してやつたが、近所の人から大變御世話になつた話を尋常一年生の時に聞いたが覚えてゐる人ありませんか」——兒童に答へしめる。——尋一教材の話の筋は、父が用事があつて旅に出てゐる留守中母が病氣にかゝつて非常に困つてゐる、子供を近所のをばさんが見て、氣の毒に思ひ何くれとなく世話をし、その子の辨當までも拵へてやつて、學校に登校せしめたといふ話である。

□ 相互相親しみ助け合ふこと 人はどんなに威張つて見たとて一人でくらし行くことは出来ない。色々の人から



厄介になりお世話にならねばならぬ。特に身邊にあつて一緒に暮してゐるのは近所の人である。それはいつもさうであるが、何か危急な用事でもあれば特に目に見えて近所の人の御世話にならねばその用達は出来ないことすら多い。さればもし近所がなかつたり、又は近所の人々の間に仲たがひでもしてゐては直に不幸を見なければならぬ事が少くない。それで私たちはどこまでも近所の人とは常によく相親しみ互に助合つて行くやうに心がけることが大切である。それが人間としての道でもある。

子供達も何かの場合に近所の人の御世話や御厄介になつたことを知つてゐるに違ない。——各自の経験を發表せしめる——

又自分の家のお父さんなり、お母さんなりが近所の人に困つてゐるのを手傳つてやつたり、助けてやつたりされたことも知つてゐるに違ない——各自の経験發表——

かやうに近所同志は互に相助け相親しみ合つて行かねば、お互に幸福なくらしは出来得ない。凡ての人々に相親しみ、相助け合ふことも大切であるが、それは見も知らぬ人も多くて強ちさうはいかぬ場合が多いものであるが、近所の人は朝夕顔を合せ、互に知合つた仲で、只の世間の見ず知らずの人とは違ふ。そこには近所の人といふ特別の關係が存する。この特別の關係にあるお互同志が見ず知らずの人よりも特別に相親しみ、相助け合ふといふことは實に人間として大切な守るべき道であるといはねばならぬ。何か困難なことがあれば之を助けてやり、何か不幸なことがあれば之を慰めてやり互に打ちとけて親しい交をせねばならぬ。然し、世間には最も親しくせねばならぬ近所同志が却つて仲たがひになつて互に悪み合ふといふやうな事もないとはいへない。併し、それは非常な心得違ひであつて、かゝる事があつてはならぬ

ハ 互に禮儀を守ること 親しいもの程よく喧嘩をするものである。兄弟は親しいものであるが、よく喧嘩もする。親しい者程よく喧嘩するといふのはお互が、親しきに狎れて、お互の禮儀を亂すことに起因する。親しき仲にも禮儀がある。この禮儀を紊ると多くは親しい仲間ながらも仲違ひになることが多い。

近所の者同志は朝夕顔を合せて親しくなるものである。それは自然さうなるのであつて、それは又大變よい事ですさうあるべきことである。しかし、親しくなると、自然、言葉遣ひが粗略になつたり、言はなくてよいことをついつかり言つてしまつたり、だん／＼つき合つてゐる中にはその欠點などもお互にわかつて来て、そんな事を又他の人にもらしたり、兎角お互の禮儀が亂れ勝ちになつてしまふ。これがそも／＼間違の因である。そのために最も親しくせねばならぬ隣、近所が互に相反目し、相憎み合ふといふ醜い場面を現はさねばならぬことにもなつてしまふ。

近所の人には自分の最も身邊にある人達である。この近所の人達を仲よくし相親しくする程、我々の日常の生活を安らかに又、楽しくするものはない。それには親しい仲にも常に守るべき禮儀を亂さぬやうにするといふことが又半面に大切なのである。

ニ 特に注意すべきこと 特に意を用ふべきことは、我々は往々にして所謂利己主義、身勝手に陥つてしまふといふことである。例へば近所の人々が非常に困つてゐる。そんな時にはすぐにも行つて助けてやるべきであるが『あの人は自分の家が困つてゐる時にも何にもしてくれなかつたではないか。おれだつて、別にさう親切を盡す必要もあるまい』といつて助けてやらないといふやうな事は、決して世の中には珍らしいことではないが、それは凡てを利己的に考へる誤つた思違ひである。人のふむべき道は決して人がかうしたから、かうするといふやうなものではない。人はどうあつても自分は自分として人のふむべき道をふみ行つて行かねばならぬ。



近所の人は自分に對しては親切でなくとも自分は近所の人に對してはどこまでも親切でなければならぬ。然しそれは實に困難なことであるかも知れない。だがそれは人のふむべき道である。近所の人がどうしやうと自分は常に親切にしてやるだけの廣い心、深い情がほしい。かういふ心、かうした情が全般に擴がつて行つた時、人生は駘蕩たる春風の如くなごやかにして樂しき眞の人生が出現する。

## 六 參考資料

佐太郎の年譜

享保九年	紀元二三八四年	佐太郎誕生——昭和五年より二百七年前。
明和五年	四十五歳	父彌右衛門死す。
安永七年	五十二歳	領主より褒美を受く。
同 九年	五十四歳	母死す。
天明五年	五十九歳	佐太郎名主となる。
享和元年	七十五歳	八月五日歿す、町田村願成寺に葬る。

## 第二十五 公 益

### 一 目的及び教材觀

修身書教師用書に

『公益を圖りて人のため世のために盡すやう心掛けしむることを以て本課の目的とす』  
と指示してある通り本課の目的とする所は人のため世のために盡して公益を圖るやう心掛けしむるのがその要旨とする所である。

吾々は兎角物を近視眼的に見たり考へたりし易い。吾々の生活の必需品として一日もなくてはかなはず米を買ひ求めるにも、自己のお金を以て買求めるそのために買求めた、米は自分自身の買求めた米であつて、そこには百姓の辛苦苦勞のひそんでゐることは忘れ勝ちである。然し、よくよく考へて見ると金があつたのみでは如何ともすることは出来ないであらう。米あつてこそ米を求める金は役立つのであつて米なくしては金だけあつたのみではお米を買求めることは絶対不可能である。さればその前後の關係から云へば金よりも先に米があつて金も之を求めるために役立つといふわけになる。獨りそれは米ばかりに限らない。吾々の生活に必須なる一切が皆この理に従つてゐるのである。吾々が一切を自分で買求め、自分が獨力にて生活をしてゐるやうに近視眼的に考へて居る間は凡てを自己中心、利己中心に考へてゐる時であつて、その境地から一步もふみ出し得ない時は、そこには醜き争闘をすら幾度か繰返へされる



であらう。然し、一切が他から興へられ、社會の一切の賜であると考へたとき、お金でお米の買へるのも實は百姓達のお蔭であり、一枚の着物も社會より受ける賜であり、日々の生活一切が社會の洪大な無限恩であると氣づくであらう。この境地にまで吾々の生活が高まつて來た時、吾々個々の人々は一切、社會といふ一大懷の中に安らかに抱擁され、事々物々が社會の恩として眼に映するに至る。この人生眞實の相を自覺するに至つて人間は眞に人間らしくなつて來て、動物と本質的に異つた尊いものとなつて來るのである。

一切事々物々之れ社會の恩と氣づく時、吾々は之をそのまゝ受けるといふことは相濟まない。勿體ない。どうしても之に報ゆる所がなければならぬ。社會のため、人のため、世のために盡す所がなくてはならぬ。之人としての爲すべき當然の道であり、人としての義務である。更に之を擴大し、深刻に考へて見ると、人としてこの世に生を享けたからには、社會人生へ、自分として能ふだけの貢献をするといふ所があるべきで、こゝに於て眞の生甲斐もあり、人としての眞の使命をも果したことになるのである。然し、前にも述べたやうに兎角我々は近視眼的に物を見易い。利己的な利欲に支配され易い。さうした利己の見地を轉廻して大なる社會への貢献といふことに至つて眞の人生といふものが成立して行く。この意味からして公益とか、社會奉仕とかいふことは實に尊くしてしかも大切なことである。

## 二 教材系統

尋一、人に迷惑をかけるな。 尋四、公益。 尋五、公益。 尋六、公益。 高二、公益世務(二)。

## 三 指導要項

### 甲 佐太郎の例話

- 1 佐太郎の例話復習
- 2 佐太郎家業に勵む
- 3 佐太郎の公益
  - イ 他人の麥畑に土をかく
  - ロ 他人の田の用水を世話す
  - ハ 組頭となつて村のために働く
- 4 佐太郎の名譽

### 乙 公益の大切なこと

- 1 佐太郎の例話考察
- 2 人に迷惑をかけぬやう心がけること
- 3 傳染病に對する注意
- 4 進んで人のため世のため盡すべきこと

## 四 指導計畫

- 1 先づ佐太郎の例話を復習して佐太郎がよく近所の人や村の人のためにつくしたことを十分に想起せしめ、然る後に本時教材の例話に入るやうにしたい。



2 公益は人のため、世のために働くことであるが、自分の家業を等閑にすることは決してない。このことを佐太郎の例話によつて十分に味得させない。家業に精出して眞に獨立的生活が出来なくては、社會の人々に大なる迷惑をかけることになつてそれは決して公益の精神に一致しない。自分の家族をすら十分に扶助することが出来ずして家を外にして働く如きは本末を誤つてゐる。家業にも精を出して、先づ以てその身を立て、その家を齊へてこそ、社會に働いてもそこに尊い意義が存るのである。この意味は十分に例話によつても亦訓辭によつても理會せしむる所があつてほしい。

3 然し、さう云へば公益といふことを社會的な大事業とのみに解してゐるやうでもあるが、公益は決して、さうした大事業とばかり限らない。日常卑近の生活の中に公益を施すべき機會と仕事とは深山含まれてゐる。路傍の一木片、一瓦石も亦公益の對象たり得ること決して珍らしくない。實際指導に就てはかうした卑近の生活の中にも公益の尊い生活の存じ得ること、尙、目前の生活をも公益に資するやう指導する所がありたいものである。

4 傳染病については修身書にも注意をしてある通り、十分ふれるといふことは出来ないまでも兎に角ふれて置くことは大切な事である。

## 五 教材解説・説話要領

### 甲 佐太郎の例話

#### 1 佐太郎の例話復習

次の如き問答をして前時取扱教材の復習をなし、且つ本時取扱の準備をなす。

- 佐太郎はどんなにして母に事へましたか。
  - 近所の人の家の屋根が損じてゐるのを見てどうしましたか。
  - 村の人が火事にあつた時佐太郎はどんなにしてやりましたか。
  - 近所の人はお互にどうせねばならないでせうか。
  - 佐太郎の家のくらしはどんなでしたか。
  - 佐太郎はどんなにして働きましたか。
- などの如く問答して兒童の思想を本教材に導入して行く。

#### 2 佐太郎家業に勵む

佐太郎が家業に勵んだ話は前にも話したが今日も尙少しく之に附加して置くことにしたい。佐太郎の家はもとは資産も澤山あつて安樂に暮し、父の代までは村の役人までもつとめる家柄であつたが父の代になつてからは俄かに不幸がつゞいて家が貧乏になつた。彼が四十五歳の時父がなくなつてからは母一人に至らざるなき孝養をつくしながらよく家業に精を出して家運の恢復に精出した。

佐太郎の家は百姓であつた。母は年とつてもう外に出て働くことは出来ない。それで佐太郎はたつた一人で働くのであつた。それでも田を七段ばかりも作つてゐた。たつた一人で作ることであるから中々骨が折れた。然し佐太郎の働方はたゞ働くばかりではない。佐太郎は常に工夫をこらし、工面をしてどの田もどの田も不作のないやうに氣をつけた。それには先づ稻の種類をうまく考へ合せて作らねばいけないと考へた。それで早稻・中稻・晩稻と順々にうまく田にくばり合せて作つてゐた。一人で働くのであるから一しよには出来ない。先づ早稻から順々に植付けをして決し



て遅れないやうに、その稻々で時期を考へ合せて作るのである。そして又田の草取りでもその順序で順々に仕事をばけんで行く。秋になると稻が實る。自然の作用ハツクきは感心なものでさうして働いて置くと、ちやんと、早稻の方から順々に實つて行く、佐太郎は又順々早稻の方から刈取つて收穫をした。それでたつた一人で働くのであるが決して仕事と一緒になつて困るやうなことはなかつた。又肥料の施し方や、水のかけ引き、その他、田の耕し方、ならし方に至るまでいつもよく『どんなにしたらよく田が出来たらうか』と研究をしながら毎年々々耕作をしたので、後には自然の中に田や畑を作る一番よい方法を知らず識らずの中に會得した。それであるから佐太郎の田畑はいつもよい出来ばへであつた。村の人々の田は時々出来不出来があつて一様には行かなかつたが佐太郎の田畑はいつもよい出来ばへで、毎年々々、どの田もよく佐太郎の分だけはいつも上々の出来ばへであつた。村の人々の田は不作であつても同じ種類の稻であり乍ら佐太郎の作つた田は不思議によく出来るといふ有様であつた。そのため、村の人々もいつとはなしに『佐太郎の田はどうしていつもこんなによく出来るのだらうか』などといつてその田圃の附近を通る百姓達は不思議がつて通る有様であつた。それで後には佐太郎に耕作の仕方などを習ひに来る者も澤山あるといふ有様にさへなつたといふことである。

そんなにして家の仕事に工夫をこらして一心に精を出したので、一旦傾いてしまつた佐太郎の家もだん／＼盛返して来て、人の厄介にならなくとも十分暮しの出来る家となつたのである。もし佐太郎が怠け者でもあつたらとても年とつた母さへよく養つて行くといふことは出来なかつたに違ない。佐太郎が働いた一心はやがて一度は失はれた田畑も漸次買戻すことさへ出来て行くやうになつて来たのは何といつても、彼の勤勉努力の賜といふの外はない。

### 5 佐太郎の公益

佐太郎はかくの如く家の仕事に精を出したが決して自分の家の仕事ばかりに骨を折つて、世の中の人、村の人達はどんなになつてもよいといふやうな、わからずやではなかつた。自分の家の仕事にも人一倍働いたが又世の中の人のためにも、他の人の及ばない程に精を出した。家業にのみ精を出す餘り世の義理人情も辨へないといふ事はよくあることであるが、佐太郎に至つては決してそんな事はなかつた。之は又誠に感すべきことである。その中、近所の人のために働いたり、村の人の火事にあつた時には外の人とはとても及ばぬ程の世話をしやつたといふことについては既に述べた所であるが、それと共にいつも人のため、世の中のため、村のためと思つて働いた事は決して少くなかつた。いまその事について語り傳へられてゐる感心な話を二三述べて見よう。

4 他人の麥田に土をかく 或時の事である。佐太郎は畑に出て麥の種子をまいた。麥は秋の末から冬にかけて蒔くものであるから大方は寒い日のことであつたに違ない。佐太郎は畑にウネを立て肥をやりその上に丁寧に種子を下してゐた。もう日も暮れかゝり、大方仕事も引上げようと思ふ頃に、急に、變な空模様クモに變つたかと思ふと、俄かに黒雲が現はれ、今にも大雨が降つて来さうになつた。佐太郎は『之は大變だ。この上に雨が降つて来ては折角施した肥料がみんな流されてしまふ』と獨語を云ひ乍ら大急ぎで今までやつた肥料に土をかけた。大方自分の畑の肥料には土をかけ終つてしまふと一先づ安心した。そしてふと隣の畑を見た。するとこの畑にも肥料が施してあるが土がかけない。やれ／＼今すんだと思ふと誰の畑か知らないがこの始末である。

『之は大變、この畑もこのまゝにして置いたのでは肥料はみんな流されてしまふ』とつぶやき乍ら、恰も自分の畑のやうに土をかけるはじめた。愈々日は西の山に入つてしまつた。だん／＼暗くなつて来た。それでも土はまだ全部かぶせおふせない。



並々の人なら自分の仕事さへ終れば他人の畑を見ても「あ、こゝにも土のかぶせてない畑がある。みんな肥料は流れてしまふがな」位の所でさつさと家へ歸つて行く所である。日頃心掛けの行届いた佐太郎は自分の畑同様他人のものまでも土をかぶせてやつた。何でもない事のやうな、一寸した事のやうでもあるが、之程まで他人のために働いてやると云ふ人は餘程立派な人でなければ出来ないことである。それも一寸位手を下す位ならやつてやる人もないでもあるまいが、日も暮れてしまへば「やつては見たが日が暮れてしまつてとう／＼止めてしまつた」といつた位の所が關の山で否々そこまでも行き得ない人が普通であらう。

然し、佐太郎は決してさうではなかつた。人の畑の土をかぶせてゐたがとう／＼日は暮れてしまつた。もう自分の手先もはつきりしないやうになつてしまつた。それでも佐太郎はやめなかつた。炬火をともして熱心にその麥畑に土をかぶせてやつた。そして恰も自分の畑の仕事を終つたがやうにこの仕事を終つてから家へ歸つた。何と感すべき話ではないか。

□ 他人の田の用水を世話す 稲をよく實らせて澤山なよい收穫を得るに大事な事の一つは先づ第一に用水である。田の水のかけ引きがうまく行かないと田は不作に極つてゐる。大早拔に饑饉があるのもそのため用水に缺乏を來たせば稲は實らない。田を植えてつて早々から水がかゝらねば苗は枯れてしまふ。ついても穂が出ない。又反對に時には水を落して日光にあてないと肥料が利かない。それであるから百姓たちは田を植付けると日に幾回となしに田を見まはつて用水の加減に氣をつける。

そのやうに用水の如何は米の收穫に非常に影響する所が大であるから、用水の不足する時や、缺乏を來すやうな場合は百姓達は自分の死活問題でも起つたやうに騒出す。又實際それは農民の死活問題となることが多いのである。

農民の騒立てるのも無理はない。そして、揚句の果ては水争ひや、水喧嘩となつて大變なことになるてしまふものである。それは昔から現在に至るまで決して變りはない。そして人の田などはどうでもよい。自分の田にさへうまく水がかゝればそれでよいといつたやうなさもしい利己心になつてしまふのである。自分の田にばかり水を引くといふことは何よりもはげしく利己心が働くので日頃どんなよい人物もこの田の用水のことになるとどうしたものか自分の田の事ばかりが氣について、ついぞ人の田のことなどはどうでもよいといふことになるのが常である。それでこそ『我田引水』といふ言葉さへも生れて來たのであると思はれる。何でも我利々々で通すことをかう云ふのである。

然し佐太郎はこの田の用水のことについても決して日頃の立派な心がけをみだすことはなかつた。彼は田を植えつけると日に幾回となく田を見廻つた。そして水のかげ落しに氣をつけた。その際、他人の田の水までも世話をしやつた。自分の田ばかりに氣をつけるやうな事はしない。他人の田に水がかゝつてゐないと必ずその水口を改めて、塵やゴモクを取除いてちゃんと水をかけてやるといふ有様であつた。

世には、水の少ない時には他人の田にかゝつてゐる水でも、之をせき立て、自分の田にばかり水をかける人さへ少くないのに佐太郎の如きは全く之とは段違ひであつた。人々が佐太郎に感じたのも無理もない。

ハ 佐太郎組頭となり一層村のため働く 佐太郎の家は貧しかつたがその行は實に村の人々の感心する所であつた。それで遂に村の人々に推されて村の役人となることになつた。佐太郎のつとめたのは名主の下に立つて村の色々な世話をする組頭であつた。佐太郎の家は代々この組頭の家柄であつたのが家がおちぶれてからは外の人がつとめてゐたのである。所が又もと通りに佐太郎がつとめることになつた。之全く佐太郎の日頃の心掛けが村の人々を感心させる程立派であつたからである。



佐太郎は組頭に上げられてからは一層その責任を感じて村のために身を粉に砕いても働きたいものと決心した。そしてこの心を着々と実行したのである。その当時、村の名主は年が若くてまだよく村の事情が分り兼ねてゐた。それで村の世話は組頭である佐太郎がやる外なかつた。佐太郎が村のために働いたことは一通りや二通りではなく一々數へあけることも出来ないがその中でもこのやうな話が残つてゐる。

村の中には三つか四つかの土橋があつた。村人はこの土橋を渡つて色々と用を辨するのであつた。所がこの橋は土橋のこと、少し水が出たりすると流されたり又腐れて壊れたりすることが度々であつた。橋を損じて困るのはどこでも同じことである。土橋が落ちると村の人々は非常な不便不自由を感じた。佐太郎は何とかして之を石橋の丈夫なのに架けかへたいものといつも考へてゐた。然し石橋に架けかへるには澤山な費用がかかるので村人にその負擔は堪へ切れないであらう。そこで佐太郎は色々と考へた末、村の役人達と相談の上、自分達の受くる村の給金の中から幾分かづゝを割いて之を毎年々々貯へてをいてその費用に當てることにした。そして幾年かかゝつて遂に土橋を石橋に架けかへることが出来た。——兒童用書の挿繪を提出して見せるがよい。羽織を着て色々と指圖をしてゐるのが佐太郎である——かうして架けかへた石橋は二つか三つもあるといふ事である。そのため之からは村の人々は橋が落ちる心配はなし、橋が落ちて不便不自由をする憂がなくなつた。これから今に百幾十年、其の當時架けかへられた石橋は今にちやんと残つてゐて代々村人達は佐太郎のこの大きな恩恵に浴してゐるわけである。佐太郎は逝いて今はこの世の人ではないが彼が残した石橋は今に残つて村の人々を便利にしてゐる。この橋の恩恵に浴した人々は幾人幾百人幾千萬人否幾百千萬人の多きに達してゐる事であらう。之から先又幾年幾十年幾千年も永久にその恩恵に浴する人々は數へ切れない事であらう。之を思ふと一人の人の働はかくまでも澤山な人々に幸福を與へ便利を與へるものである。

#### 4 佐太郎の名譽

佐太郎の感ずべき行、即ち親に事へては至孝、近所の人に對しては親切、村の人のために對しては骨身惜しまず働いた事がいつしか領主大久保加賀守に聞えた。藩主も殊の外に感心されて、「世の人々の手本である」といつて大いに之を賞し其の褒美として持高全部に對してその租税を生免免することにしてやつた。之佐太郎五十一歳の時のことである。佐太郎一家の名譽この上もないことである。この後前に述べた通り組頭に推され後には更に村一番の頭である名主にまで推されることになつた。之全く佐太郎日頃の心掛のよかつたことに依るものであるといふの外ない。

かくて人のため、村のため、世のために一生を捧げた尊い生涯は彼七十五才を以て終りこの世を去つた。彼が逝去の報を一度傳へ聞くと村人達は恰かも自分の父を失つたが如く歎き悲しんだといふことである。

#### 乙 公益の大切なること

##### 1 佐太郎の例話考察

主なる説問

- 佐太郎は家の仕事についてはどんなにして働きましたか。
  - それでは佐太郎は自分の家の仕事にばかり働きましたか。
  - 人のために働いたことにはどんなことがありましたか。
  - 村のために働いたことにはどんなことがありましたか。
  - 佐太郎について感心することはどんなことですか——前課と本課をまとめて復習する——
- 以上の如き問答を試み、家業に勉勵し且つ人のため、村のために働いたことを十分に納得させて次の如き訓辭に



入る。

## 2 人に迷惑をかけぬやう心掛けること

佐太郎がよく人のために世話し村のために盡したことは實に感心なことである。我々は佐太郎のやうによく人のため、世の中のために働くことに心がけねばならぬ。が又一方人に迷惑をかけぬやう、みだりに人の厄介にならぬやう氣をつけることも大變大切なことである。尋常一年生の修身でお千代が塵を往來に棄てようとしたときその父が「塵を往來に棄てると通る人が困るから道に棄て、はいけない」と教へた話を聞いたが、これに限らず人の迷惑になるやうなことは一切之をさけるやう心がけることが大切である。「では、どんなことをしたら人に迷惑をかけることになるだらうか?」——この間に對しては「一々事實をあげて兒童をして答へしめる——

我々はともすると自分よがりのために、人に迷惑をかけて恬として恥ぢないことすら少くない。常に社會全體の生活といふ大きな考を以て他人に迷惑をかけぬやう、世の人に不便、不自由を興へないやう先づ心がけることが大切である。

## 3 傳染病に對する注意

人に迷惑をかけることの中で最も大きな一つは傳染病に關することであらう。自分の衛生に關する不注意から赤痢とか、チブスとか、又はコレラ等其の他の傳染病に罹れば隣近所は云ふに及ばず、更に廣くは町中、村中にも非常な迷惑をかけることになる。それで、吾々は日頃衛生に注意してかゝる病氣に罹らぬやう、注意することが先づ第一に大切なことである。然し、萬々一罹つたらどうするか——その處置を考へさせて發表させるがよい——それは早速醫師に診察を乞ふて之に對する消毒なり、一切の適當な手當を講じなければならぬ。そして當局の指圖に従ひその蔓延を絶對に防止するやう心がけねばならぬ。

然し「あの家からチブスが出た」とか「かしこからは赤痢が出たさうな」といふことになるやうな非常な不名譽なことになる。又避病舎に收容されたりすると非常な恥辱に考へられる。そのために怪しい病氣に罹つても一時的な名譽心とか世間體をはちて、之を隱蔽する等の事が、まだ日本中には可なり少くない。そのため、その家族その近隣に病氣を傳染せしめ、漸次擴がつて非常な慘害迷惑を他に及ぼすといふことは決して少くないことである——かうした慘害の實例をその町村内とか出来るだけ兒童の經驗に近い處に求めて話すがよい。但現在の人に對しては決して迷惑をかけるやうに話すべきである——我々は一旦さうした傳染病に罹ることがあつたならば、かゝる狹量な考は一日も、否一刻も早く取除いて、人に迷惑をかけぬやう、直ちに醫師に診察を乞ふて適當の處置に出づべきである。

## 4 進んで人のため、世のために盡すこと

佐太郎が自分の仕事に力一杯精を出して、誰よりもよく田畑の作物を作り出したのは誠に感すべきことである。我々はどこまでも自分の職務、自分のなすべき仕事にはあらん限りの力を盡して働かねばならぬ。そして又、世の人に迷惑をかけず、厄介をかけることのないやうに日々の生活に氣をつけねばならぬ。それは何よりも大切なことであつて誰もが務めなくてはならぬ事である。

が、然し、單にそれだけではまだ人の務はすんだとはいへない。吾々はそれと共に更に進んで社會のため、世のため、人のために盡す所がなくてはならぬ。この點についても佐太郎は實に世の中の人々のよき手本である。内にあつては家業に精を出して他人の厄介にならぬやう獨立の生計を立て、外に向つては人のために計つて倦むことを知らなかつた。私達も常に佐太郎を手本にして、さうありたいものと考へる。



然し世の中のために盡すといつてもそれは大事業を起して人のために盡すことも大切であるがそれは誰にも望めることではない。それではさうした大事業、大きな仕事をせねば世の中の人のためには盡せないかといふと決してさうではない。もしもさう云ふやうに考へてゐる人があるならばそれは大變な考へ違ひである。道路の壞れを一寸繕つても、道に落ちてゐる硝子の破片を一つ拾つて棄て、も一つの大きな公益である。そのため、どんなに世の中の人々が助かるか知れない。それで人のため、世の中のために私達がなすべき事は澤山、目の前にころがつてゐる。私達はさうした、小さい事も見のがさず人のため、世のためを思つてつくす所がありがたい。

子供達にも出来る事は澤山ある。例へばどんなことがあらうか？ ——考へさせて答へさせ、その實行を鼓舞獎勵する。——

## 第二十六 生き物をあはれめ

### 一 目的及び教材観

「我が身をつめつて人の痛さを知れ」といふ諺があるが、我々は我が身をつめればその痛さを直接に體驗する。この我が身をつめつて痛さを覺える心を押し及ぼして、他の人も亦つめつたならば痛いに相違ないといふことは誰もが容易に首肯することの出来る明瞭な直感である。この理を眞に體驗し理會し得た時、即ちそれは單に概念的に知るのでなしに身にこたへて理解し了解した時他一切の人は我が自我の懷の中に入つて来る。人の痛きは我が痛苦である。我が生みの子が病痛に苦惱してゐる時、その苦惱は全く我が苦惱であるやうに。

かくの如くにして自我が愈々社會の人全體に擴大すればそれ程その人は眞の人間性に目覺めたことになる。一切が單に自己のみを中心として行はれて行く時、それは結局私欲によつて行はれる生活であつてこれは自然的な欲からの支配で未だ眞に人間性の眞實性に徹底せぬ生活である。

自我が愈々擴大されて人間以上に及び、生をこの世に享受してゐる生物、例へば禽獸草木にまで及び更に無生の石片土塊にまでも及べば愈々その自我は廣くして深きものとなつて来る。我々が修養に徹底すれば恐らくはこゝまで達し得るものであらう。

動物を無暗に酷使し、虐待するが如きは實に文明人の恥づべきことである。我が身をつめつて人の痛さを知り、更



に吾々は自我を擴大して動物の痛きをも知らねばならぬ。酷使される動物の身の上は一掬の同情の涙を注いで見なくてはならぬ。こゝに眞に人間性の豊かさが見られ、これ亦人間の常にあるべき生活である。

近來よく『動物愛護』の聲を聞く。誠にうれしいことの一つである。或る地方では特に動物愛護デーを設定して一般民衆にもこの尊い精神を徹底させんと勤めてゐる所もある位である。吾々は慈愛同情の精神をこの生物までもおし及ぼして行きたいものである。

然し、兎角、人は動植物に對しては何等の同情もなきもの、如き場合が少くない。之を酷使し、虐待しても尙且つ恬として恥ぢざるもの、如くでもある。特に兒童期には一種の争鬪性と征服感とに左右されて用もなきに動物を虐待しいぢめさいなんて得々然たる所があるものである。修身書教師用書に

『生き物を憐むべきことを教へて仁愛の心を深からしむるを以て本課の目的とす』とある通りかうした兒童に向つて特に生き物を憐むべきことを教へて仁愛の心を深からしめんとするのが本課の目的であつて子供にとつて大事なことである。

## 二 教材系統

尋一、生きものを苦しめるな。 尋四、生き物をあはれめ。 高一、同情。

## 三 指導要項

甲 孫兵衛の例話

- 1 孫兵衛よくその馬をいたはる
  - 2 その妻も亦よくその馬をいたはる
- 乙 生き物を憐むべきこと

- 1 孫兵衛の例話考察
- 2 動物愛護の消極的方面——いぢめぬこと——
- 3 動物愛護の積極的方面——進んでいたはること——

## 四 指導計畫

- 1 動物を虐待した兒童の経験及び之についての感想等を發表せしめ之を教授の出發點とするもよからう。
- 2 又孫兵衛の例話をいきなり説いて聞かせ之から教授を漸次深めて行くもよいと思ふ。
- 3 生物の愛護については特に兒童の経験を十分に顧慮して、その實際生活を指導することが大切である。
- 4 理科教授其の他研究のために動物を無理に取扱ふことがあり、又害虫を驅除する場合等に於ては他により大なる目的の存することに氣づかせて、それは動物愛護の精神にもとらぬことを納得せしめねばならぬ。
- 5 特に兒童には動物をいぢめぬといふ消極的方面を十分に説いて聞かせその精神を徹底させる事が大切である。

## 五 教材解説・説話要領

甲 孫兵衛の例話

第二十六 生き物をあはれめ



## 1 孫兵衛よくその馬をいたはる

昔、木曾路といへば有名な難所の一つであつた。まだ鐵道の通ぜない明治以前に於ては江戸と京都との間を往來する人々は必ずこの木曾路を通らねばならぬ。京から東に下るには近江を過ぎ美濃を通り信濃の木曾街道を通つたものである。所がこの木曾路はかの日本三急流の一つである木曾川の上流で、木曾山の谷合を通ずる街道でつゞら折りに曲りくねつた道で見通しはきかず、それに坂の上り下りははげしく随分險呑な所が多い。

今のやうに道路の修復や手入も十分でなし、少し雨でも續くと道も荒れて旅人は随分なやまされたものであつた。それに今のやうに自動車があるでなし、宿場宿場に馬がゐて、その馬を雇つて馬に乗るのが唯一の交通機關であつた。

所が昔この木曾山中に孫兵衛といふ一人の馬子がゐた。孫兵衛は毎日この木曾街道を往復する旅人を馬に乗せて生計を立て、ゐる者であつた。所が感心なことにはこの孫兵衛は非常に馬を可愛いがる馬子で丁度自分の家族の者と同じやうに大事がつてゐた。

或時の事である。一人の僧が江戸から京への歸りに、この木曾街道にさしかゝつた。僧は一人の馬子を雇つて馬に乗つて木曾路を下つた。この時に雇はれたのが孫兵衛であつた。孫兵衛は馬の手綱をとつて先に立つて馬をひいた。所が道がけはしくなると、すぐ馬の側に寄り添つて馬の荷物の下に自分の肩を入れ、その荷を支へて軽くしてやり、「ハイシイ ハイシイ」と調子を取り乍ら、更に「親方あぶない！ 親方あぶない！」と恰かも人にでも話すやうにして馬を助け乍ら下つて行く。漸く道が平坦になると、又手綱をとつて先に立つてひいて行く。漸くにして又峻はしくなると、又前のやうにして馬の側に寄り添つて肩を荷物の下に入れ「ハイシイ、親方あぶない、ハイシイ、親方あぶない」と調子を取り乍ら山道を下つて行く。馬の上にある旅僧は「變な馬子もあればあつたものだ、馬に向つて親方あぶないとは一體どうしたわけだらう」と不思議に考へながらこの山路を下つて行つた。暫くして道がけはしくなると又例の通り「親方あぶない」をやり出す。それが一度や二度ではない。道がけはしくなる毎にそれを繰返すので僧は愈々以て不思議に思つて「馬子さん、あなたはさつきから變なことをいつて、親方あぶない」と調子を取つてゐられるが、あれは一體どうしたわけか。馬に向つて親方もありますまいに」と尋ねた。すると馬子の答へが感心である。「いや別に深い仔細のあるわけでもありませんが、實は私は親子四人暮しの者でございます。この親子四人の者が毎日有難い日暮しの出來ますのは全くこの馬のお蔭であります。それでよく／＼考へて見るとこの馬こそは私共にとつては親方同様であります。私はこの一匹の馬を私共の親方と思ふて峻はしい道にさしかゝると、この馬に間違が起らぬやう、怪我がないやうにと思ふて、實はかく云ふのでございます」

はじめて今までの不審の解けた僧は、「成程」と感心し誠に有難い話であると感入つたといふことである。

かくして、やがて次の驛に着いた。僧は馬から下りて約束の賃金を支拂つた。孫兵衛は喜んでこの賃金を受取つた。賃金を受取つた孫兵衛はその賃金の中からいくらかの金を取り出してすぐに餅屋へ行つて餅を食つた。僧は孫兵衛は餘程お腹がへつてゐたものだと思つて見てゐると、こは又如何に、孫兵衛が食つたと思ひの外、自分は少しも食はないで大事に馬をいたはり乍らその馬に買った餅を食はせるのであつた。この有様を見た彼の僧は益々孫兵衛の心掛けに感心してしまつた。

## 2 その妻も亦よく馬を受す

やがて孫兵衛は馬をひいて自分の家へ歸つて行つた。馬は自分の家の前まで行くと威勢のよい聲で嘶いた。孫兵衛の妻はすぐに自分の家の馬の嘶く聲を聞きつけて表に走り出て、その馬に秣をやつて恰も自分の子供でも遠方から歸



つて来たやうに心からいたはつてやつた。

僧は夫婦乍ら揃ひも揃つてよく馬をいたはるものかなと、この有様を深く感じ入つて見てゐた。

## 乙 生物を憐れむべきこと

### 1 孫兵衛の例話考察

主要なる設問

- 孫兵衛は馬をひいて道の悪い所に行くかどうかどうしましたか。
  - なぜ『親方あぶない』といつたのですか。
  - 坊さんが賃金を拂つた時、孫兵衛はどうしましたか。
  - その妻はどうでしたか。
  - 孫兵衛について感心する所はどんなことですか。
- 等の如く發問し兒童に答へしめ孫兵衛夫妻がどこまでも馬を大事にした精神を十分に了得せしむる。

### 2 考察動物愛護の消極的方面

孫兵衛夫婦がその馬をよく可愛がつて大事にしたのは誠に感すべきことである。生き物は馬に限らずかやうに可愛ゆがつてやらねばならぬが第一に之をいぢめぬやうに心がけるといふことが大切である。子供達は馬を使人が、或は重い荷物を背負はせたり又は車をひかせたり、或は田を耕したりする時、或は鞭で非道に打ち、又は手綱の端ではげしく打つのを見たことがあるに違ない。かゝる場合、あゝ可愛さうにと思はなかつたであらうか。私たちは決して牛や馬をひどくいぢめたりしてはならない。

牛や馬、猫や犬、その他生き物は、なる程人間程の尊い魂は持つてゐないことは誰でも知つてゐるが、決して魂がないとはいへない。一寸の蟲にも一寸の魂がある。無理非道なことをしていぢめると、いつの間にかその性質が荒々しくなつて人を見れば噛みつき蹄で蹴つたり、後足ではねたり、角で突いたりするやうになるといふことである。反對に之を常に可愛いがつて養ひ育てるとその性質もいつとはなしに温順になつて人にもよく馴れ人の云ふこともよく聞き、その命令にもよく従ふやうになる。

それは決して家畜ばかりではない。どんな生き物でも我々は之をいぢめてはならぬ。蛇を見つけると用もないのに石を投げつけ、蛙を見ると棒をもつてたゞき、猫や犬をいぢめ、鶏や、小鳥をいぢめ、追ひまはすが如きことはつしまねばならぬ。子供はよく生き物をいぢめたがるものである。諸子もいぢめたことがあらう。——経験を發表せしめるがよい——然しそれは決してよい事ではない。自分がそんな目にあつたらどうであらうかと考へて見れば、可愛想だと思ふ心がすぐに起つて來るに違ない。吾々はどこまでも生物をいぢめぬやうに氣をつけることが大切である。然し、理科の實驗に用ゆるとか又は害虫や害になる鳥類をとつて之を殺すとか云ふ場合には他に大事な用があるのであつてかゝる場合は決して生き物をいぢめるといふことにはならない。それは、いぢめるといふよりも大事な用に用ひるといふことになる。時によると人間だつて死んだからだをそのまま、解剖して研究の材料にするといふこともあるのであるからかゝる場合は決して遠慮するには及ばない。

唯我々の氣につけることは用もないのに之をいぢめてはならぬといふことである。

### 3 動物愛護の積極的方面

生き物は之をいぢめぬと共に之を可愛がつてやることが大切である。牛や馬などの家畜に荷物を運ばせても決して



無理なことをさせないやうに、又時々休養を興へてやるやうに又食せる秣類も十分考へて出来る文けよい飼料を興へるやうに心がけねばならぬ。又夏の暑い盛りに喝を醫するため水をあたへ、又日蔭の所で休息させるなどは決して忘れてならぬ大切なことである。家畜は特に人の役に立つ大事な動物であるから、殊によく氣をつけて可愛がつてやる事が大切である。

又家畜類でなくても之をいつも可愛がつてやるといふことは忘れてならぬ事である。

## 第二十七 よい日本人

### 一 目的

「これまで教へたる各課を取纏めて復習せしむるを以て本課の目的とす」と修身書に掲げあるによつて本課の目的は明瞭である。よい日本人といふ大題目によつて今まで教へた所を取纏めて復習しようといふのである。

### 二 本學年度教材分類

徳目分類	課	題目	要	領	主眼點
(道るす對に家國室皇)	第一	皇后陛下	皇后陛下の規律正しくましまし、御仁慈に富ませられ且御孝心深く在します等其の御徳の御高く遊ばすこと。		尊皇の心
	第二	忠君愛國	明治十年の役に於て谷村計介が熊本城の急を官軍に告げ且つ花々しい戦死を遂げたこと。		忠君愛國
	第十五	皇大神宮	皇大神宮の御祭神・神域・國民の心得等。		忠君愛國
	第十六	祝日	天長節、新年、紀元節、明治節のいはれを説き國民としての心得。		愛國心



分徳類目						分徳類目					
社 会 に 對						家 庭 對 (に 道 する)					
課	題	目	要	領	主眼點	課	題	目	要	領	主眼點
第十	規則に従へ	儀	松平好房が常に行儀を正しくし父母のいます方にはかりそめにも足を伸ばしたことなく他所へ行く時又歸つた時は一々その旨を告げ物を受けたりする時にも行儀を棄したことのなかつた話。(家に對する道、個人としての道と關係す)	禮	違	第八	師をうやまへ	行	上杉鷹山、その師細井平洲を迎へて非常に歡待した話。過失のために工場を追はれた信吉のため、その友人友藏が機械發明の賞をも受けずその歸參を望んだ友情に富める話	敬	師
第十一	行	儀	鈴木今右衛門一家がかの天明の大饑饉の際罹災民に慈善を施した話。	禮	違	第九	友だち	行	春日局が江戸城大奥に於て權威並なき身柄でありながら門番の申付ける規則に柔順に従ひ却つてその門番を賞した話 (國家に對する道と關係す)	信	愛
第十八	慈	善	永田佐吉がかつて御世話になつた名古屋の紙屋の恩を忘れず、常にその家を訪ねその家のおちぶれた後はその生活を助けて其の恩を報じた話。	慈	報	第三	孝	行	二宮金次郎が家業の手助をし、特に父の病後は甲斐々々しく働いて父母に事へ兄弟を世話し更に父の歿後は弟等を大切にし母の仕事を助け親類に傾けた末弟を取戻すやうに母にすゝめた。	孝	行
第十九	恩を忘れるな	報		報	恩						

分徳類目							分徳類目						
す る (道							個)						
課	題	目	要	領	主眼點	課	題	目	要	領	主眼點		
第二十	寛	大	貝原益軒が若者が徒らをして愛育の牡丹を折つたのを許してやつた話。	寛	大	第二十六	生物をあはれめ	仁	木曾山中の馬子、孫兵衛がその馬を可愛いがり、山坂がけはしくなると『親方あぶない』といつてまで之を大切に話	仁	愛		
第二十二	自分のものと人のもの	正	河原市の馬子が飛脚を乗せて次の驛まで行き歸つて馬の鞍の上から財布を發見し苦心して之を飛脚に返しその禮を受けなかつた話。	正	直	第二十五	公益	公	佐太郎が、大雨の來らんとする時夜おそくなりしにか、はらず隣の畑に土をかけ又田の用水は人のまで世話し、村の役人になつてからは村のために働き土橋を石橋にかへた話	公	益		
第二十三	共同	共同一致	毛利元就がその三子をいまして共に力を合すべきをさとし兄弟又よく共同して毛利家の武運長久につとめた話。	共同一致		第二十四	近所の人	隣保團結の精神	佐太郎が近所の人の屋根の修繕につとめ又火災にかゝりし人の世話をした話。	隣保團結の精神			
第四	仕事にはけめ	勤	二宮金次郎が一方では薪をとり、繩をなつて家業に精を出し又他方村の仕事には土手の修理に一心に働き特に自分の力の不足を感じて草鞋を造り與へた話。	勤	勉	第二十六	生物をあはれめ	仁	木曾山中の馬子、孫兵衛がその馬を可愛いがり、山坂がけはしくなると『親方あぶない』といつてまで之を大切に話	仁	愛		
第五	學問	勉	二宮金次郎が薪取りの往復又米つきにもよく勉強し、又萬	勉	學								



分徳目	課	題	目	要	領	主眼點
人	第六	整	頓	兵衛の家に行つてからは自ら油菜を植え之を燈油とかへて勉強した話。 本居宣長が澤山の本を部類を定めてよく之を整頓し暗夜でも燈火なくとももとむる本を探し得たといふ話。 呉服屋の丁稚が反物にきずあることを客に告げ主人に解雇されたが正直を旨として商賣をはじめ大いに成功した話。 木村重成が大阪冬の陣で大いに奮戦し、且つ講和誓書の血判取りに少しも臆する所なくその使命を立派に果たした話。 木村重成が茶坊主にはづかしめられたのをよく堪忍した話 毛利吉就夫人が火災の際女中共のうろたへさはぐのをいましめ、よく事を處理して事なきを得た話。 徳川光圀がその居室、衣食に至るまで凡て質素を旨とし、且つ女中共が紙を粗末にするを紙漉場を見せて之をいませめた話。 貝原益軒が生來病弱な身體でありしにか、はらず、養生に心がけ、或は養生に必要な事を本に見れば之を書き記すなどしてよく八十五歳の長壽を保ちし話。	整頓	整頓
對	第七	正	直		正直	正直
す	第十二	勇	氣		勇氣	勇氣
る	第十三	堪	忍		堪忍	堪忍
道	第十四	物事にあは	は		沈着	沈着
	第十七	儉	約		儉約	儉約
	第二十一	健	康		健康	健康

### 三 指導計畫

- 1 本課の取扱上の第一着眼は各課の復習といふことである。然し、その復習といふことが單に概念的に各徳目を羅列的にその意義なり、例話なりを記憶させるといふことに限るならば人格陶冶といふ核心にふれた修身教育といふ上からはさして價值あるものとは思はれない。それでその復習といふことが第一課から順々に徳目を追ふてなされて行くやうでは價值は少ない。
- 2 それは單に徳目の羅列的な記憶にあらずして過去二十六課に互つて取扱つた各徳目を系統立て統一するといふ見地に立つてこの課を取扱ふやうにすることが大切である。
- 3 二十六の徳目——徳目といつては少しく當らぬものもあるが——を系統立て統一するとすれば如何なる原理を以て之を統一するか、そこに私は二つの原理が存すると思はれる。
- 4 其の一は即ち本課の題目となつてゐる『よい日本人』である。私達は日本人である。日本人でもよい日本人たらねばならぬ。よい日本人、之こそ私達日本人の目標であり、目的であり、理想である。然らば『よい日本人たらんためにはどうするか』そこに次の如き徳目が統一的に表はされて来る。即ち
  - (イ) 皇室國家に對しては——皇室の有難いこと、御恵み深きことを畏み、皇大神官を敬ひ忠君愛國の誠を致し。
  - (ロ) 家庭に於ては——親に孝養を盡し、兄弟よく友愛の道を全ふし、
  - (ハ) 社會に對しては——師を敬ひ、友だちとは信義を守り、規則に従ひ、行儀を正し、慈善の心深く、受け



た恩を忘れず、人に接するには寛大に、人のものと自分のものとをよく辨へ、共同一致して事をなし、近所の人々には親切にし、公益を計り、生物を可愛がつてやる等の道を守ることが大切である。又

(ニ) 個人としては——常に自分の仕事に勵み、學問に勵み、整頓に氣をつけ、人と交つては正直にし、勇氣を以て事に當り、よく堪忍の徳を守り、物事にあはてず、儉約を守つて無駄を省き、健康に注意して身體の強壯をはかる等のことにつとめねばならぬ。

かう云つたやうにまとめることが出来る、かうした徳目をよく體驗する者が實によき日本人である。

5 いま一つの統一の原理は、かゝるよき日本人はかゝる徳目を體驗するがしかもそれは一切「至誠」の赤心を以て體驗するのである。純粹無難な心から、皇室を尊び、忠君愛國の道を盡し、親には孝、朋友には信、一切の行がそこから出づるやうにこの原理から統一するのである。

6 この二つの原理を以て一切の徳目を統一的に復習する所に本課の最も大切な意義の存する事を取扱者は知らねばならぬ。

7 それで實際の指導に於ては、よき日本人といふことを目標にかゝけて、皇室國家に對する道、社會に對する道家庭に對する道、個人としての道といふやうに分類的な進み方にし、しかもその説く中心に至誠を以つて一切に當るといふ見地を織込んで取扱つて行くことが大切である。

實際の取扱上の手續は以上の考を以て行つてほしいものである。

—(終)—

# 附 録

## 一 尋常小學修身書内容一覽表 (昭和三年度修正)

課	學年	一	二	三	四	五	六
尋	一	よく學びよく遊べ 教室内の心得 運動場の心得	孝行 おふさのお話	皇后陛下 忠 皇后陛下の御事蹟	明治天皇 忠君 明治天皇の御事蹟	我が國 國體の理會、忠君愛國の志氣	皇大神宮 皇祖尊崇の念
尋	二	時刻を守れ 規律の習慣 正太郎のお話	親類 正雄の一家と親類との話	忠君愛國 忠君 谷村計介	能久親王 忠君 能久親王の御事蹟	皇太后陛下 忠君 皇太后陛下の御事蹟	國運發展 維新以後の國運發展の有様を知らせる
尋	三	なまけるな 勤勉 兎と龜のお話	兄弟仲よくせよ 友愛 お八重とお三郎との話	孝行 二宮金次郎の實話	靖國神社 義勇 靖國神社の由來	忠義 忠君 正成の實話	國運發展(續き) 右に同じ
尋	四	友だちは助けあへ 親切 おたけのお話	自分の事は自分でせよ 自立 お八重とお三郎との話	仕事にはけめ 勤勉 二宮金次郎の實話	志を立てよ 立志 秀吉の幼時の實話	舉國一致 忠君 明治三十七年戰役當時の國民の活動	國交 列國との交際
尋	五	喧嘩をするな 和合 二兒の争論せしお話	勉強せよ 勤勉 二人の幼友達ののお話	學問 勤學 二宮金次郎のお話	皇室を尊べ 尊皇 秀吉の實話	公民の務 關係團結の心 訓辭	忠君愛國



六	元氣よくあれ 活潑 子供等が 野原に遊 んだこと つべもの にきを つけよ 攝生 たべん とし	きまりよくせよ 規律 話 お竹の お	整頓 本居宣長 の實話	孝行 渡邊登の 實話	公益 公共の福利 古橋源六郎の 實話	忠孝 正行の實 話
七	自慢するな 謙遜 鷺にかま れた牡鶏 談話	正直 或丁稚の お話	正直 の實話	兄弟 渡邊登の 實話	衛生 公衆の衛生 訓練(傳染病 の有様)	祖先と家 尊祖訓辭
八	行儀よくせよ 禮儀 お文が行 儀よくし た話	臍病であるな 勇氣 或臍病者 のお話	師を敬へ 師に對する禮儀 上杉鷹山の實 話	勉學 渡邊登の 實話	節約 上杉鷹山 の實話	沈勇 沈久問 長の實話
九	始末をよくせよ 禮儀 お文が行 儀よくし た話	からだを丈夫に せよ 二人の兄弟 健康に注意 せし話	友だち 一友人の 不幸を救 ひし實話	規律 渡邊登の 實話	産業を興せ 國家社會の福利 右に同じ	進取の氣象 高田屋嘉兵衛 の實話
一〇	物を粗末に扱ふ な 物を丁寧に扱 ふ 勇吉の石磐 をわりし話	友だちに親切で あれ 小太郎文 吉を助け しお話	規則に従へ 遵法 春日局の 實話	克己 高崎正風 の實話	孝行 職兵衛の實 話	工夫 井上でん の實話
一一	親の恩 お八重の登 校と病氣の 時の話	不作法なことを するな 禮儀 おまたぎし お話	行儀 松平好房 の實話	忠實 おつなの 實話	兄弟 伊藤小左 衛門の實 話	自立自營 フランク の實話
一二	親を大切にせよ 孝行 親猿を打 たれし子 猿の話	人の過を許せ 寛容 文吉小太郎 の秘を許す 話	勇氣 木村重成 の實話	健康 伴信友の 實話	進取の氣象 進取の氣象 右に同じ	公益 フランク の實話

一三	親のいひつけを まもれ 孝行 お梅と一 郎のお話	わらうす、めに 従ふな 信文吉と小太郎の二人 はなかつたこと に從	堪忍 木村重成 の實話	自立自營 高田善右 衛門の實 話	勤勞 作兵衛の 實話	共同 共同の福利 築後川の堰工 事
一四	きやうだい仲よ くせよ 友愛 お梅と一 郎のお話	正直 松平信綱 の實話	忍耐 毛利吉就 の夫人の 實話	自立自營 同前	勉學 勝安芳の 實話	慈善 石井十次 の實話
一五	家庭の樂しみ お梅と一 郎の一家	天皇陛下 今上天皇陛 下の御こと	皇大神宮 忠君愛國	志を堅くせよ 忍耐 ジエンナ の實話	勇氣 右に同じ	清廉 乃木大將 の實話
一六	天皇陛下 忠君 天皇陛下 天長節	忠義 廣瀬中佐 の實話	祝日 愛國心	仕事に勤め 勤勉 岡山應舉 の實話	忍耐 コロンプ スの實話	良心 誠實 林子平の 實話
一七	忠義 木口小平 の實話	約束を守れ 信義 廣瀬中佐 の實話	節約 徳川光圀 の實話	迷信に陥るな 迷信に陥るな 眼病をわづら つた人のお話	自信 吉田松陰 の實話	憲法 憲法の大意と遵 法
一八	過をかくすな 謝罪 寅吉のお 話	恩をわすれるな 報恩 お鶴のお 話	慈善 鈴木今右 衛門のお 話	禮儀 訓辭	主婦の務 松陰の母 杉瀧子の 實話	國民の務(其一) 兵役の務
一九	うそをいふな 正直 うそをいふな 狼にかみ ころされた話	祖先を尊べ 尊祖 稻生はる の實話	恩を忘れるな 報恩 佐吉の實 話	よい習慣を作れ 修養 瀧鶴台の 妻の實話	朋友 新井白石の實 話	國民の務(其二) 納税の務



二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇
物 正直 話 清吉のお	物 同情 お話 小三郎の	物 公共心 のお話 お千代	物 仁愛 お話を たお話	物 同情 お話 小三郎の	物 同情 お話を たお話	物 正直 話 清吉のお
としよりに親切 であれ 敬老 話 おたきと 五郎のお	辛抱強、あれ 忍耐 もつれし 糸を解く	規則に従へ 違法 二人の學 童立札に 従ふ	工夫 十吉のお 創作 話	工夫せよ 忍耐 もつれし 糸を解く	召使をいたはれ 同情 水をたのん だお話	としよりに親切 であれ 敬老 話 おたきと 五郎のお
寛大 寛大 の實話 貝原益軒	健康 健康 の實話 貝原益軒	近所の人 隣保團結の心 佐太郎の實話	共同 毛利元就三 めしこと	正直 或馬子の お話	健康 健康 の實話 貝原益軒	寛大 寛大 の實話 貝原益軒
生き物をあはれ め 仁愛 グアイチン の實話	博愛 グアイチン の實話	公益 栗田定之 の實話	祝日・大祭日 祝祭日の心得	國旗の意義と取 扱心得	博愛 グアイチン の實話	生き物をあはれ め 仁愛 グアイチン の實話
禮儀 公衆に 對する 調辭	度量 寛容 の實話 西郷隆盛	謝恩 秀吉夫婦 の實話	誠實 右に同じ	信義 加藤清正 の實話	寛容 寛容 の實話 西郷隆盛	禮儀 公衆に 對する 調辭
國民の務(其三)	男子の務と女子 の務 男女の本分 調辭	教育の 調辭	師弟	勤勉 伊能忠敬 の實話	男子の務と女子 の務 男女の本分 調辭	國民の務(其三)

二七	よい日本人	よい日本人	よい日本人	教育に關する勅 語(つとまき)
----	-------	-------	-------	--------------------

二 高等小學修身書内容一覽表 (昭和三年度修正)

高 一	高 一 女生用	高 二	高 二 女生用
一	大日本帝國 我が國體の理會	一	建 國 建國の由來
二	大日本帝國(續) 我が國體の理會	二	御歴代天皇の御盛徳 御歴代天皇の御盛徳
三	忠君愛國 忠君 非常時平時に於 愛國 ける心得を説く	三	國體の精華 我が國體の精華の理會
四	家 家の性質と家に対する道	四	忠 忠
五	孝 行 孝の意味及その道 について説く	五	孝 孝
六	孝 行(續) 孝 平重盛の例話	六	友 愛 兄弟友愛の道 (頼氏兄 弟の例)



七	親類 親類相互の道	同上	夫婦 夫婦の道(小山大助の例)	同上
八	敬老 敬老 類香坪の例話	舅姑 舅姑に對する道 (稻生はる)	朋友 朋友 (南宮大淵と伊藤の道 (冠峯との交り))	同上
九	至誠 至誠 二宮尊徳櫻町采邑興復	貞操 貞操 (はんの例話)	恭儉 恭儉の意味とその心得	同上
一〇	正直 正直 右に同じ	同上	博愛 博愛	同上
一一	勇氣 勇氣の必要を説く	同上	修學 修學の必要 (石田梅巖の例)	同上 (小林しちの例)
一二	勉學 勉學の必要とその心得	身體 同上	習業 習業の必要 (賀集珉平の例)	同上 (永井しかの例)
一三	身體 健康の必要とその方法	職業 同上	智能 智能啓發の必要	同上
一四	職業 職業の人生に於ける意味及びその心得	勤勉 同上	徳器 徳徳修養の必要 (中村正直の例)	同上
一五	勤勉 勤勉 吉松の例話	規律 規律の必要とその心得	公益世務 公益世務 (一) 公益をはかり世上有利の業務を開くこと	同上

一六	自立自營 自立自營の必要	反省 同上	公益世務 (二) 角倉了次の例話	同上 (牛島のしの例話)
一七	反省 反省の修徳上の必要 (前田綱紀の例)	質素 同上 (乃木静子の例)	國憲國法 (一) 國憲の大意	同上
一八	質素 質素の必要とその心得 (前田綱紀の例)	禮儀 同上	國憲國法 (二) 國法の大意	同上
一九	禮儀 禮儀の必要	公正 同上	義勇奉公 (一) 一朝事ある場合の國民の覺悟	同上
二〇	公正 公正の必要	寛容 同上	義勇奉公 (二) 明治三十七八年戦役當時に於ける國民の活動につき説きその念を養ふ	同上
二一	寛容 寛容の必要	同情 同上	皇運扶翼 皇運扶翼に對する國民の覺悟	同上
二二	同情 同情の必要 (瓜生岩の例)	共同 同上	忠孝一致 忠孝一致の國民道德の理會	同上
二三	共同 共同の必要	主人と召使 主人と召使に對する道 主人に對する道	皇祖皇宗の御遺訓 (一) 皇祖皇宗の御遺訓の理會	同上
二四	修養 修養の必要とその方法	女子の本分 女子の本分	皇祖皇宗の御遺訓 (二) 右に同じ	同上



二五	戊申詔書	同上	一 徳の意義	同上
二六	忠良なる臣民	同上	勅語下賜 勅語下賜の由來	同上

備考 ×は其の本特殊の徳目なり。

### 三 國定小學修身書徳目系統表(題目彙報一覽)

—本表は文部省圖書監修官藤本氏の調製に依る—

#### 備 考

- 一 本表は國定小學修身書の徳目を其種別と學年配當との二點より見て其系統を示したものである。
- 二 各徳目を教育に關する勅語の語句に歸結せしめたのは本修身書が勅語に基づく根本方針を明らかにせしめんがためである但し勅語の御旨趣に大體包括せしめたるに過ぎず。
- 三 心得の四大分類は最初の國定小學修身書の採れる區分法なれども、現行教科書は之を採用せず。本表は分類の便宜上當初の區分法に従つた。
- 四 徳目の所屬分明ならざるものは其の最も關係多き所に配し比較的關係少なき所には( )を附して意出した、なほ表中(女)とあるは高等小學修身書女生用の略、(複)とあるは尋常小學修身書複式編制學校用の略で(一)(二)とあるは同一題目の二

課又は三課に亘れるを示す。

- 五 同一徳目の繰返さるゝものも其の教訓の内容は同じからず。兒童の道德意識の發達に伴ひ或は例話を掲げ或は訓辭を用ひ以て兒童の心情を養ひ知見を啓き且實踐を指導する事に留意した。

#### 一 家庭に於ける心得

勅語ノ語句	高 三	高卷二	高卷一	尋卷六	尋卷五	尋卷四	尋卷三	尋卷二	尋卷一
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン	家 祖先	孝 家	家 孝行(二)	祖先と家 (忠孝)	孝行	孝行	孝行	祖先を尊べ 孝行	家庭 親の恩を大切に
克ク孝ニ父母ニ孝ニ	親子 (忠孝)	孝 (忠孝一致)	孝行(二) 舅姑(女)	(忠孝)	兄弟	兄弟	兄弟	兄弟を尊べ 孝行	親の恩を大切に 親のいひつけをまもれ
兄弟ニ友ニ	(親族) 夫婦	友愛 夫婦	女子の本分 (女) 貞操(女)	男子の務と 女子の務	兄弟	兄弟	兄弟	兄弟を尊べ 孝行	親の恩を大切に 親のいひつけをまもれ
夫婦相和シ	夫婦 親族	夫婦	親類 主人と召使 (女)	主婦の務	主婦の務	親類	親類	親類を尊べ 孝行	親の恩を大切に 親のいひつけをまもれ



二 社會に於ける心得

勅語の語句	朋友相信シ	高 三
高 三	恭儉己レヲ持シ	社交
高 卷二	朋友	(恭儉)
高 卷一	敬老	禮儀 寛容
尊 卷六	師弟	(女子の本 分)と女子の務 (貞操)(女 務)
尊 卷五	朋友 信義	禮儀 度量
尊 卷四		謙遜(複)
尊 卷三	友だち 師をうやま	近所の人 行儀 寛大
尊 卷二	友だちに親 切であれ 約束を守れ	近所の人 親切であれ としよりに
尊 卷一	友だちは助 けあへ	近所の人 行儀をよく せよ 不法なこ とをするな 人の過をゆ るせ 自慢するな 自分の物と 人の物

三 個人としての心得

博愛衆ニ及ホシ	名譽	博愛
公益ヲ廣メ 世務ヲ開キ	公益	公益世務(二)
	公正	同情 共同
	慈善	(學國一致) 共同 公益 (工夫) 産業
	博愛	謝恩 公益 産業を興せ (衛生)(二) 社會衛生
	人の名譽を 重んぜよ	博愛 生き物をあ はれめ 公益
	慈善	生き物をあ はれめ 恩を忘れる な 共同 公益
	わらわす めに従ふな	人の難儀を すくへ 恩をわすれ るな
	喧嘩をする な	生きものを 苦しめるな 人に迷惑を かけるな



勅語の語句	高三	高卷二	高卷一	尋卷六	尋卷五	尋卷四	尋卷三	尋卷二	尋卷一
恭儉己レヲ持シ		恭儉	正直 至誠 (反省) 規律(女)	清廉 良心	誠實 人(よい日本)	忠實 人(よい日本)	正直 人(よい日本)	正直	うそをいふ な 過をかくす な
		(義勇奉公) 勇氣		沈勇 進取の氣象	勇氣 忍耐 進取の氣象	克己 造れ よい習慣を 規律	整頓	辛抱強くあ れ 臆病である な	時刻をまも れ 始末をよく せよ
						(忠勇) 勇氣	堪忍		元氣よくあ れ

學ヲ修メ	職業(二) 財産	(習業)	職業(勤勉) 質素 身體	自立自營	自信	志を立てよ 志を堅くせ よ 自立自營(二)	(辛抱強く あれ) 自分の事は 自分でせよ	(なまける な) 物を粗末に 扱ふな
業ヲ習ヒ		修學	勉學	勤勉	勤勞	(仕事に勵 め)	(仕事には げめ)	物をつま きをつけよ からだを丈 夫にせよ
智能ヲ啓發シ		習業	勤勉	勤勉	勤勞	迷信に陥る な 仕事に勵め め	仕事にはげ め	なまけるな
徳器ヲ成就シ		徳器	徳器	工夫	徳行			

四 國民としての心得

三 國定小學修身書總目系統表(題目彙報一覽)



勅語ノ語句	高 三	我カ皇祖皇宗國ヲ 肇ムルコト深ニ 厚ナリ	皇位	建國 御展代天皇 の御感徳	高卷二	徳光心ヲ一ニシテ 世々厥ノ美ヲ濟セ ルハ此レ我カ國體 ノ精華ニシテ教育 ノ源亦實ニ此ニ 存ス	臣民	忠君愛國 忠義一致 能久親王 (皇室を尊 べ)	高卷一	大日本帝國 (二)	皇大神宮	忠君愛國 忠義一致	高卷六	國運の發展 (二)	我が國	忠君愛國 忠義一致	高卷五	我が國	忠君愛國 忠義一致	高卷四	明治天皇 (能久親王)	皇大神宮 皇后陛下	忠君愛國 忠義一致	高卷三	天皇陛下	忠君愛國 忠義一致	高卷二	天皇陛下	忠君愛國 忠義一致	高卷一	天皇陛下	忠君愛國 忠義一致
獨リ朕カ忠良ノ臣 民タルノミナラス 又以テ爾祖先ノ遺 風ヲ顯彰スルニ足 ラン	忠 孝	常ニ國憲ヲ重シ 國法ニ遵ヒ	憲法 權利義務 公務	國憲國法(二)	義勇奉公(二)	義勇奉公 (皇運扶翼)	忠 孝	忠 孝	憲法 國民の務(三) 教育	公民の務	法令を重ん ぜよ	(規則に従 )	(規則にし たが)																			
一旦緩急アレハ義 勇公ニ奉シ	地方團體																															

天壤無窮ノ皇運ヲ 扶翼スヘシ	皇運扶翼	斯ノ道ハ實ニ我カ 皇祖皇宗ノ遺訓ニ シテ子孫臣民ノ俱 ニ遵守スヘキ所之 ヲ古今ニ通シテ認 ラシテ之ヲ中外ニ施 シテ悖ラス	皇祖皇宗の 御遺訓(二)	皇運扶翼	忠良なる臣	朕爾臣民ト俱ニ拳 々服膺シテ成其徳 ヲ一ニセンコトヲ 庶幾フ	忠 孝	忠 孝	教育に關す る勅語(三)	よい日本人	皇室を尊べ 靖國神社 祝日・大祭 祝日 國旗	よい日本人	よい日本人	よい日本人	よい子供	よい子供
戊申詔書	戊申詔書(三)	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交	國交
忠良ノ臣民	總括															



新尋常小學修身教育書

三年用

奧付



著作  
所有

昭和五年三月十日印刷  
昭和五年三月十五日發行

【定價金貳圓五拾錢】

著者

堀之内恒夫

發行者

永田與三郎  
大阪市東區內安堂寺町一丁目二十八番地

印刷者

松本米藏  
大阪市東區區橋南之町一丁目五七八五

發行所

東京市神田區錦町三丁目九番地  
大阪市南區內安堂寺町一丁目廿八番地

東洋圖書株式合資會社

振替東京一〇三七番・振替大阪三九五五六番

大賣所

(東京) 文修堂  
(大阪) 賣文館・盛文館  
(名古屋) 川瀬・星野

(京都) 京都書籍・博省堂  
(佐賀) 大坪書店  
(久留米) 菊竹書店

(熊本) 長崎書店  
(奈良) 木原書店

印刷所 桃谷印刷株式會社

製本所 瀧本製本所



# 書圖洋東は書育教

版重	版十	版五	刊新最	刊新最
<p>立正大 教正大學 授千葉命吉先生著</p> <p>「問題」の 教育心理學的考察</p> <p>送定料價 〇・二六</p>	<p>九州帝大 文科教授 松濤泰巖先生著</p> <p>學習心理と學習樣式</p> <p>送定料價 〇・二六</p>	<p>東洋大學 教授關寬之先生著</p> <p>兒童學原論</p> <p>送定料價 〇・二六</p>	<p>東洋大學 教授關寬之先生著</p> <p>兒童宗教教育</p> <p>送定料價 〇・二六</p>	<p>東京女高師教授 文種教育科委員 下田次郎先生著</p> <p>人間味の教育</p> <p>送定料價 〇・二六</p>
<p>□ 往年獨創學の樹立を叫び傳統の教育界に奮 筆を打たれた先生は歐米留學實に五年其の 根本的研究を遂げて歸朝された。 □ 「問題」は獨創學の中心點であり自發學習の 出發點である。</p>	<p>□ 學習主義の根柢をなす學習心理を詳説し、 教師中心より兒童中心への新思潮の基調を 闡明された邦文唯一の良書である。 □ 兒童心理上より學習樣式を分説し、學習の 新指導法をも示されてゐる。</p>	<p>□ 本書は我國兒童心理學の泰斗で現に文部省 顧問である關先生が兒童の身體及精神の兩 方面及其の發達の實際と機能とを詳細に研 究された一大良書で我國には勿論歐米に も求め難い現代教育界の一權威書である。</p>	<p>□ 兒童生徒の宗教教育を如何にすべきかを根 本的實際的に解決された新著。 □ 著者は兒童學者として權威ある斯界の泰斗 宗教教育は修身教育特に個知教育の時弊救 済の必要上最近教育上の重要問題。</p>	<p>□ 人間味の教育は冷に非ずして暖、知に非ず して情意高潮、部分に非ずして全體の教育 □ 著者自身最も人間味に富む教育界の耆宿温 厚篤實多藝多趣味にて定評ある典型的紳士 □ 本書は一朝一夕の作に非ず永年の體驗記録</p>
<p>並教育學術的參考書</p>				
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安內區南市阪大</p>				



書圖洋東は書育教

版重	版四	版重	版五	版六	刊新最
<p>關西學院 砂川寛榮先生著</p> <p><b>進歩的教育の諸問題</b></p> <p>送料 二〇六</p>	<p>大阪家なき幼稚園長 顧問 橋詰せみ郎先生著</p> <p><b>家なき幼稚園</b></p> <p>との主張と實際</p> <p>送料 二〇六</p>	<p>奈良女高師教授 兼附屬幼稚園主事 森川正雄先生著</p> <p>幼稚園 育兒法</p> <p>送料 二〇三</p>	<p>奈良女高師教授 兼附屬幼稚園主事 森川正雄先生著</p> <p>保姆教育學</p> <p>送料 二〇六</p>	<p>奈良女高師教授 兼附屬幼稚園主事 森川正雄先生著</p> <p>幼稚園の理論及實際</p> <p>送料 二〇八</p>	<p>奈良女高師教授 小川正行先生著</p> <p>最新訓練原論</p> <p>送料 二〇六</p>
<p>□本書は教育の社會的方面の強調學校家庭の連絡進み行く教育の實相と之が對策を詳述せる必讀の良書である。</p> <p>□讀方に算術にテストに準備教育に幾多の新研究を詳説せる必讀の良参考書。</p>	<p>□吾が橋詰先生の御創案になる「家なき幼稚園」は世界的大事業として彼のパーカースト女史をして驚嘆せしめた。</p> <p>□本書は創設以來先生の御體驗に基く主張と現に經營される七幼稚園の實際とを詳述。</p>	<p>□保姆は幼稚園施行規則に基き「育兒法」の心得が必要で、其の資格試験の必須科目である本書はその唯一の参考書である。</p> <p>□附録 一工場法、二健康保險法、三種痘法四産前産後の訓令、五六七其他諸規定諸表</p>	<p>□幼稚園令施行規則第十一條保姆檢定試驗規則による教育・兒童心理・教授法・管理法の大要を全部網羅せる保姆檢定用唯一の良書である。共に保姆須要の二大科目の良参考書に依る。</p>	<p>□奈良女高師の勲任教授兼附屬幼稚園主事たる先生が、幼稚園の理論及實際を説かれた本邦唯一の書物である。□内外の實際、古今の理論委しくこの一巻に收められてゐる保姆檢定唯一の良参考書。</p>	<p>□訓練の重要なことは論なけれども東西兩洋を通じて近代見るべきの良書なき折柄遠詣深き著者が蘊蓄を傾倒せられたる一大快著古き訓練は個人を主とし團體あるを顧みず特に此點を力説せられたるも本書の一特色</p>
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					

書育教の書圖洋東

版五	版重	版五	版十	版五十	版五
<p>東京帝大 入澤宗壽先生著</p> <p><b>教育者と教育精神</b></p> <p>送料 二〇六</p>	<p>奈良女高師 西本三十二先生著</p> <p>討式論 教授法原論</p> <p>送料 二〇八</p>	<p>奈良女高師 校長 横山榮次先生著</p> <p><b>教授新論</b></p> <p>送料 二〇〇</p>	<p>奈良女高師教授 兼附屬小學主事 木下竹次先生著</p> <p><b>學習諸問題の解決</b></p> <p>送料 二〇六</p>	<p>廣島高師教授 兼附屬小學主事 久保良英先生序 守田保先生著</p> <p><b>實際的個性調査法</b></p> <p>送料 二〇六</p>	<p>野村教育 研究所長 大伴 茂先生著</p> <p><b>教育科學の諸問題</b></p> <p>送料 二〇〇</p>
<p>□教育最終の問題は教師其の人の人格にあるとは千古不變の教育の根本問題である。</p> <p>□この第一義語につき斯界の權威人澤先生が現代教育者の進むべき本道につき其の蘊蓄を傾倒せられたる唯一の良書である。</p>	<p>□本書は教育學の權威たるコロンビヤ大學の教授キルパトリック博士の教授法を誰にも解り易く譯した稀有の良書である。</p> <p>□内容は數人の教師が打寄り座談的に教授法の問題を討論せる形式により平明に記述する。</p>	<p>□我が國教育界の重鎮たる先生の著書、論説は現代實際教育の羅針盤である。</p> <p>□本書は先生が學習法新教授法につき(1)根源を明かにし(2)之に到切なる批判と(3)實際的指針とを加へられたる名著である。</p>	<p>□本書は天下の教育界を風靡したる學習法創始者木下先生が學習法の根本並に其の實際上の諸問題につき一々詳解されたる良書。</p> <p>□従つて實際學習上の難問題につき具體例により説明せる點に於て學習原論以上の名著</p>	<p>□著者が實際教育家として苦節十年内外の學理を究め日々致學に立ちながら實際的個性調査を試み之に成功し之を體系立てたのが本書である。□本書の特色は(1)實際的である(2)内外同類書の要點を知り得る事。</p>	<p>□行詰れる現代の獨斷・主觀の教育に置換へらるべき教育科學の測定・實驗・診斷につきき詳述せる本邦唯一の良書で將に直面せる教育界の新しい目標を示すに教育科學の各分野に亘り日本の實際事例により例證してゐる</p>
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					



# 書育教の書圖洋東

版重	刊新最	版重	版八	版重
<p>映畫教育</p> <p>文部省社會教育課編</p> <p>大阪市視學 野中吉光 奈良女高師訓導 塚本清 先生共著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□兒童の見たがる活動寫眞は止めるよりも之を活用し善導すること現代の眞教育である □本書は映畫を活用、實施監督すべき教育者、社會教育警察官等の爲に我國に於ける現代世界の各權威の執筆による唯一の名著。</p>	<p>歐米教育の實際</p> <p>奈良女高師 前教諭 上島直之先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□奈良女高師前教諭たりし先生が、先に命により親しく英・米・獨・佛に遊學され専ら其初等教育、補習教育の實際を研究されたる結果を公にされたもので、其の精細と深淵とを極めた點に於て他に例を見ない。</p>	<p>表現と鑑賞</p> <p>奈良女高師 教授 岩城準太郎先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□創作と批評、表現と鑑賞との二者を一に渾融して説いた文學の新作品である。 □現代文學の權威たる先生が永年練られた新文章論である。□現代文學の研究者にとつては此上なき良參考書である。</p>	<p>現代詩鑑賞</p> <p>東洋大學教授 小林好日先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□文學は人生の餘技ではない人生其のものゝ表現であり人間の批判であり人生の省察である。□本書は詩の味ひ方新體詩自由詩民謡童謡短歌泰西名詩篇の研究等現代詩のあらゆる方面に研究を及ぼした良書である。</p>	<p>學校經營參考書</p> <p>學級經營參考書</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東  
番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大

# 書圖洋東は書育教

版重	刊新最	刊新最	版五十	版一十
<p>續實施と各學年の學級經營</p> <p>奈良女高師 訓導 清水甚吾先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□正篇に盡くし得ざりし點を悉く本書に收む 1 學級經營と新時代の修身訓練問題 2 學級經營と主要教科の指導方法 3 尋常低學年の學級經營法 4 尋常上學年學級經營法 5 高學年の學級經營法 6 學級經營上の諸問題の解決。</p>	<p>各學年の學級經營</p> <p>奈良女高師 訓導 清水甚吾先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□二十年の訓導生活中學級王國の建設を以て其の信條とされた著者が、更に最近學習法の創始者としての體驗に基き最新の學級經營の理論及び實際を詳述された一大力作で既に五十版を突破せる大好評の名著。</p>	<p>尋一の教育</p> <p>東京女高師 訓導 田原美榮先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□著者は多年作業主義の實施實現に苦心殊に低學年教育に造詣深く本書は其體驗記録。□直觀を重視し作業を本位としたる新尋一教育の實際は詳細を盡し具體的に示さる。 □作業主義教育並に低學年教育の新好侶伴。</p>	<p>學級經營</p> <p>東京女高師 教授 北澤種一先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□昭和新时代的の要求に適應せる學校經營書眞に兒童を善導し國家の要求せる國民教育の達成を目標とする學校經營の實際を詳説するに學校教育のみならず社會教育等地方の實際を詳説せる經營上の最良書である。</p>	<p>學級經營</p> <p>奈良女高師前教諭 花田甚五郎先生著</p> <p>送料價 二・八〇</p> <p>□新學級經營法を心理的社會的等科學的立場より詳述し而も組織立てらる。 □學級經營の實際に付原理運用の妙を闡明指示教師兒童等々諸方面の問題を解決さる。 □近時學級經營書續出の時に際し最高權威書</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東  
番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大



# 書圖洋東は書育教

版七	版十	版重	版八	版五	版五
岡崎師範附屬小學校著 <b>生活深化の眞教育</b> 送料價 〇・六	奈良女高師前教官 三好得惠先生著 福井三國小學校長 <b>自發教育案と其の實現</b> 送料價 〇・八	文部省社會教育課長 小尾範治先生序 奈良縣高田高等女學校長 井上嘉三郎先生著 <b>社會 一日女學校</b> 送料價 〇・三	陸軍大臣陸軍中將 阿部信行閣下序 文部省社會教育課長 小尾範治先生序 <b>青年訓練所の經營</b> 送料價 〇・六	文部省實業 補習教育主事 岡 篤郎先生著 <b>産業教化補習學校經營原論</b> 送料價 〇・八	文部省實業 補習教育主事 岡 篤郎先生著 <b>産業教化補習學校經營原論</b> 送料價 〇・八
□ 天下の優良附屬たる岡崎師範附屬小學校が新を街はず奇に走らず努力又努力血と汗と熱と涙とを以て築き上げられたのが本書である。 □ 言々句々苦しき經驗と尊き體驗との結晶。	□ 學習法を地方の一學校へ理想的に實施して我國未開の好成绩を収めた實際實績である現制度の下に實施し得る穩健着實な新教育法である。 □ 長くも今上陛下の天覽を賜ふ。	□ 本書は處女教育女子青年教育の實際に成功されたる社會教育方法の實際記録である。費用尠く特別の努力なくして新教育思潮に添った簡易有効の教育法として推賞される。小學校・實業學校に利用すれば甚だ妙也。	□ 長くも待從御派遣の榮を得たる名譽ある模範訓練所の實際詳述である。□ 内容充實、記述所悉く青年訓練所經營に成功したる眞の體驗記録。□ 著者は奈良女高師前顧問にして視學校長として普通教育界知名の士。	□ 「補習學校經營原論」に基きその實際として具體的實例の經營方法を詳述する。 □ 兩書相俟つて補習學校經營の双璧をなすもので、地方改善産業教化の任にある者の必讀すべき良著である。	□ 著者は文部當局者たる以外、又補習學校研究のため特に洋行し、又嘗て其の實際經營に當り成功されたる權威者である。 □ 實業補習教育は愈内容充實期に入り其の實際經營方案は之が成否の分るゝ重要問題也
兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東 番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大					

# 書育教の書圖洋東

刊新最	版五	版五	版八	版一十	版五十
奈良女高師 山路兵一先生著 <b>指導生活 尋六の學級經營</b> 送料價 〇・六	奈良女高師 山路兵一先生著 <b>指導生活 尋五の學級經營</b> 送料價 〇・六	奈良女高師 山路兵一先生著 <b>遊びより 尋四の學級經營</b> 送料價 〇・六	奈良女高師 山路兵一先生著 <b>遊びより 尋三の學級經營</b> 送料價 〇・六	奈良女高師 山路兵一先生著 <b>遊びの 尋一の學級經營</b> 送料價 〇・六	奈良女高師 山路兵一先生著 <b>遊びの 尋一の學級經營</b> 送料價 〇・六
□ 又其の一舉手一投足は凡てそれ以下の子供たちに何ものかの響をもち全校の學風を左右する彼等である。此の學年をよりよく指導することはいはゆる義務教育を完成する所以で本書は其の實際記録集である。	□ 尋五六は學年系統上の高學年部である。最早象牙の塔の中の子供ではない。正に實社會の實生活を唯一の生活場學習題材として生長しやうとする子供たちである。	□ 健全なる社會の基礎をなすものは中産階級である。依て具眼の政治家は健全なる中産階級の振興に全力を注ぐと。尋三四は又實に學校内に於ける中産階級である。	□ 著者は尊き體驗に基き各學年に互つてその學級經營を完成された。 □ 尋三四は「遊びより仕事へ」入る學年である本書は兎角等閑にし勝ちな此の中學年の學級經營を模範的に解決した良書である。	□ 遊びの善導は學校の家庭化であり家庭生活の繼續であり子供達の生長の繼續である。從來の岸に馬を乗りかけた様な激變生活の苦しみ代ふるに坦々の水平路を辿らしむるものである。	□ 學校教育の効率のあがると否とは一つに學級經營の如何に懸ること言をまたぬ。 □ 本書は低學年經營に多年の體驗と獨自の手腕とを有せられる先生が兒童心身の發達を基礎とし環境の利用善化に努力せられたる唯一の良參考書である。 □ 遊びの善導は學校の家庭化であり家庭生活の繼續であり子供達の生長の繼續である。從來の岸に馬を乗りかけた様な激變生活の苦しみ代ふるに坦々の水平路を辿らしむるものである。
兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東 番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大					



書圖洋東は書育教

刊新最	刊新最	刊新最	版六	版八	版五
<p><b>修身教育原論</b></p> <p>調廣島高師 堀之内恒夫先生著</p> <p>送料 二・八〇</p>	<p><b>各科學習の作業化と其方案</b></p> <p>調東京女高師 益谷五味 岩下先生共著</p> <p>送料 二・八〇</p>	<p><b>低学年作業主義の諸様式</b></p> <p>調東京女高師 坂本 田代 齋藤先生共著</p> <p>送料 二・八〇</p>	<p><b>最新各科成績考査法</b></p> <p>調奈良女高師校長 横山榮次先生著</p> <p>送料 二・八〇</p>	<p><b>各科復習新指導法</b></p> <p>調奈良女高師 坂本 山路 清水先生共著</p> <p>送料 二・八〇</p>	<p><b>各科學習指導案實例集</b></p> <p>調奈良女高師 清水訓導其他執筆</p> <p>送料 三・三〇</p>
<p>□□著者は修身教育實際家としての權威者。本書は修身教育に對する根本の立場を明かにし例話調辭格言道歌作法法的教材等の本質を明かにし其の陶冶價值を決定し取扱の原理と取扱の實際問題とを解決す。</p>	<p>□□作業主義新教育實際篇其の二。等三四、等五六、高等科に於ける各科作業主義教育の實際を各其の體験者が各科研究主任として具體的に詳述されたる唯一無二の新著。</p>	<p>□□本書は換言すれば作業主義教育實際篇其の一。作業主義による第一二程度の教育を如何にするかその實際的諸様式を各體験者が合議力作されたる新著。</p>	<p>□□本書は従来の無意識なる考査法に覺醒を與へたるものである。□□本研究の特色は診斷的指導的にて各科につき 1 本質と目的とより考査の要素を決定す 2 要素毎に問題を作製す 3 之により個的に兒童を理解する一讀明瞭ならしめたものである。</p>	<p>□□復習は眞の學習に等閑し得ざる肝要問題。復習も眞に忘るべからざる重大問題。□□豫習復習の新指導は即ち實力養成の正道。豫習復習の新指導は即ち自學自習力の培養。□□新豫習復習は入學試験なき現在の重要問題</p>	<p>□□學習主義の教育は今や全世界を風靡す。□□本書は東京女高師・東京兒童の村小學校・奈良女高師の代表的三學校三十有七名の先生が各其の得意とされる各科の學習指導案を詳記されたる實際的實例である。</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東

番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大

書育教の書圖洋東

版十	版五	版重	版五	版重
<p><b>各科教育法 參考書</b></p> <p>調奈良女高師 清水訓導其他執筆</p> <p>送料 三・三〇</p>	<p><b>學習指導研究會編 本位 尋一教育資料大集</b></p> <p>送料 六・三〇</p>	<p><b>ホーム組織の學校經營</b></p> <p>調富山師範附屬小學校著</p> <p>送料 二・六〇</p>	<p><b>新學校の實際と其の根據</b></p> <p>調東京兒童の村 志垣 寛先生著</p> <p>送料 二・六〇</p>	<p><b>合科學習原論</b></p> <p>調奈良女高師 鶴居滋一先生著</p> <p>送料 四・三〇</p>
<p>□□學習主義の教育は今や全世界を風靡す。□□本書は東京女高師・東京兒童の村小學校・奈良女高師の代表的三學校三十有七名の先生が各其の得意とされる各科の學習指導案を詳記されたる實際的實例である。</p>	<p>□□本書は學習指導研究會が各高師訓導指導の下に編纂せる一大力作で、尋一教育に關するあらゆる資料を蒐集し加ふるに其の取扱法につき詳述せる眞に初等教育家座右の友として至便なる一大寶典である。</p>	<p>□□澤柳先生の國民教育獎勵會より其功績を表彰され多額の獎勵金を得られたる世界の初等教育會に誇るべき眞面目の研究書である。□□實績を収めつゝある實際的記録で昭和新时代に即したる眞の學校經營法である。</p>	<p>□□新學校の行はれる新しき學校とは何か。其意義、組織、校舍、教師、兒童、學級、材料、方法等を明かにし、實に歐米に於ける新學校並に我國に於ける新學校の實際と其の根據を教育的哲學的見地より詳論されてゐる。</p>	<p>□□奈良女高師に於ける合科學習の先驅者たる先生が新を街ふことなく、慎重に慎重を重ねて研究せる、こと茲に數ヶ年、初めて筆を執られたる力作で尋常一、二、三年程度の新教育集、新學校經營法の一權威である。</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東

番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大



書圖洋東は書育教

版重	版重	版重	版五	版十
<p>調 奈良女高師 岩瀬六郎先生共著 兼 用目 尋一國語教育精義 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 岩瀬六郎先生著 兼 用目 尋一二國語教育精義 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 岩瀬六郎先生著 兼 用目 尋一國語教育精義 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 河野伊三郎先生著 學習本位 國語讀本指導精案 定價 卷一 一〇・〇〇 卷二 一〇・〇〇 卷三 一〇・〇〇 卷四 一〇・〇〇 送料 卷五 一〇・〇〇 卷六 一〇・〇〇 卷七 一〇・〇〇 卷八 一〇・〇〇 卷九 一〇・〇〇 卷十 一〇・〇〇</p>	<p>調 奈良女高師 山路兵一先生著 讀方學習活動 その實際と説明 送料 〇・六〇</p>
<p>調 奈良女高師 岩瀬六郎先生共著 書方學習原論 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 岩瀬六郎先生著 兼 用目 尋一二國語教育精義 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 岩瀬六郎先生著 兼 用目 尋一國語教育精義 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 河野伊三郎先生著 學習本位 國語讀本指導精案 定價 卷一 一〇・〇〇 卷二 一〇・〇〇 卷三 一〇・〇〇 卷四 一〇・〇〇 送料 卷五 一〇・〇〇 卷六 一〇・〇〇 卷七 一〇・〇〇 卷八 一〇・〇〇 卷九 一〇・〇〇 卷十 一〇・〇〇</p>	<p>調 奈良女高師 山路兵一先生著 讀方學習活動 その實際と説明 送料 〇・六〇</p>
<p>□ 本書は著者永年奮道を研究し且永年實際指導したる體験に基き書方教育の根本より末葉に至る迄悉く實際に詳述されたる良書。現時の問題たる鉛筆、ペン、毛筆の三種共に徹底的具體的良法を示さる。</p>	<p>□ 尋一國語教育精義と同主義にして初に學習細目の精密なるものを附し而して其の教育法精義に及ぶ。□ 各學期各月の順に従ひ體験に基き引例豊富に而も實際的に説明さる。□ 總方語方讀方書方の全部に亘る。</p>	<p>□ 學習法の眞精神に則つて編まれた詳細なる國語の細目を中心とせる秩序整然たる大著述。□ 内容は聽方語方讀方書方の全部に亘る。□ 教科書の各課の取扱は勿論、補充文、參考書迄廣く集めて一々叮嚀な解説を附す。</p>	<p>□ 本書は我が初等國語教育の權威者たる河野先生が造詣深き文章觀を基調とし多年研究をつまねたる實際の筆記記録で世間ありふれたる日案的時間配當のものとは全然趣を異にするものである。□ 本書によりてこそ初めて時代に順應せる國語教育の目的は達せらる。□ 文字文章の乾燥無味な傳統より脱し強烈な國民精神を培ひ豐潤な民族的情緒を養ひ國語教育を眞人教育にまで引上げ得るのが本書の使命である。</p>	<p>□ 先生が讀本中の各種文章を指導された實際を最も大膽に、赤裸々に叙述されたもので兒童學習力伸張の有様は、手に取るが如く明かにされてゐる。文章は面白く不知不識の間に讀方學習指導の眞髓を掴み得る。</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東  
番六五五九三阪大替振。目丁一町寺堂安内區南市阪大

書育教の書圖洋東

版九	版十	版重	刊新最	版重	版三十
<p>調 奈良女高師 河野伊三郎先生著 國語學習上の諸問題とその解答 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 秋田喜三郎先生著 國語讀本の縱斷的研究 送料 〇・六〇</p>	<p>調 廣島高師 堀之内恒夫先生著 新小學修身教育書 各冊 送料 〇・六〇 高一用 高二用</p>	<p>調 廣島高師 堀之内恒夫先生著 新小學修身教育書 各冊 送料 〇・六〇 一年用 二年用</p>	<p>調 東京高師 川島次郎先生共著 尋常小學 例話原據と其解説 上巻 下巻 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 野中吉光先生著 修身學習の根本と其の實際 送料 〇・六〇</p>
<p>調 奈良女高師 河野伊三郎先生著 國語學習上の諸問題とその解答 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 秋田喜三郎先生著 國語讀本の縱斷的研究 送料 〇・六〇</p>	<p>調 廣島高師 堀之内恒夫先生著 新小學修身教育書 各冊 送料 〇・六〇 高一用 高二用</p>	<p>調 廣島高師 堀之内恒夫先生著 新小學修身教育書 各冊 送料 〇・六〇 一年用 二年用</p>	<p>調 東京高師 川島次郎先生共著 尋常小學 例話原據と其解説 上巻 下巻 送料 〇・六〇</p>	<p>調 奈良女高師 野中吉光先生著 修身學習の根本と其の實際 送料 〇・六〇</p>
<p>□ 凡そ國語學習上の問題となるべきあらゆる問題について多年研究された二千有餘の問題を精選して一書とされた稀に見る實際中の實際篇である。下・中・上學年、形式、内容取扱上、各方面に亘つた具體事例集である。</p>	<p>□ 國語讀本全十二巻を縱斷的に研究し、其精神、其美點其長所を徹實的に研究されたる讀方學習指導者に必須の良書である。□ 國語學習指導の根本は讀本研究にあるとの見解から形式内容共丹念に研究されてゐる。</p>	<p>□ 新に修正された高等小學校修身書の實際取扱の懇切なる手引としての力作。□ 一般向兒童用書を主として之に女生用を併設して男女兩用の使用に供す。□ 系統的解説並に體験的の説明懇切、引例豊富を極む。</p>	<p>□ 尋一、二の修身を取扱つて時間が餘り又は方法分らぬ爲に苦しむ士はなきか——本書は之を解決したるもの。□ 本書は著者自らの體験を記録したるもの、補充例話を加へ抽象的の教科書を眞に活用</p>	<p>□ 獨特の資料公開——文部省修身書編纂員たる著者が長年月蘊蓄の天下一品の好資料を披露す。□ 例、木口小平の原據は前岡山司令官たりし山下少將將下に親しく面接してその爲人を聴取して記述さる。</p>	<p>□ 根柢を近代の倫理に置き生活本位兒童本位に實生活に觸れた修身學習の大記録である。□ 私の修身教育法は傳統的な教授法から得たものでない。僅みに憫んだ實際修身教育の間に築き上げた方法であるとは先生の言。</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東  
番六五五九三阪大替振。目丁一町寺堂安内區南市阪大



# 書圖洋東は書育教

版九	版重	版々重	版六	版八	版五
<p>教 奈良女高師 池内房吉先生著</p> <p><b>尋六新算術書の活用</b></p> <p>送料 二五〇</p>	<p>教 奈良女高師 岩下吉衛先生著</p> <p><b>珠算教授</b></p> <p>送料 二八〇</p>	<p>調 奈良女高師 清水甚吾先生著</p> <p>於ける上學年に</p> <p><b>算術自發學習の實際</b></p> <p>送料 三〇〇</p>	<p>調 奈良女高師 塚本清先生著</p> <p><b>最新算術學習指導法</b></p> <p>送料 四〇〇</p>	<p>教 東京高師 佐藤良一郎先生著</p> <p><b>算術教育新論</b></p> <p>送料 二五〇</p>	<p>調 成城小學校 奥野庄太郎先生著</p> <p><b>聽方教育の原理と實際</b></p> <p>送料 二五〇</p>
<p>□ 學習主義に基き多年研究された體験より歸納された、獨特の國史學習法を詳述されてゐる。□ 講義式、注入式舊教授法を捨て、創作的學習法を樹立されて既に刻々効を収めつゝある實際的記録である。</p>	<p>□ 新教科書に即したる新學習指導法である。尋六算術を如何に取扱へば成績が擧るかを如實に指示された良書。</p> <p>□ 前篇——新教科書の研究。</p> <p>後篇——活用の實際案詳説。</p>	<p>□ 算術教育界の權威清水先生の獨創的體験的研究で前後八ヶ年心血傾注の結晶である。□ 就中上學年等四以上の指導法。學習發展の實際を示されその自發學習指導に解決を與へ更に下學年との連絡を詳説された良書。</p>	<p>□ メートル法、實驗實測、空間教授の取扱、代數的取扱等の新問題を初め算術心理など他書に求め得ない新方面まで開拓されてゐる。□ 著者は頭腦明晰、博學を以て開え徹底的意見と、指導方法の妙とを有する新人である。</p>	<p>□ 算術に關する参考書多しと雖も本書の如く根本原理より實際に及ぼせるものは少い。□ 各學年の教材配當はアメリカ、イギリス、フランス、ドイツの例を取り、算術遊戲の諸種を引例し、メンタルテストを解詳せる等は本書の特色である。</p>	<p>□ 話方聽方は人生生活の本質にして根本的重要事項である。□ 話方聽方の研究書は從來絶無なりしが著者は斯界に定評ある研究家にて茲に穩健なる實際的の參考を示さる。</p> <p>□ 話方聽方の原理は茲に初めて體系づけられ初等教育界を裨益し延いては本書が昭和教育史に残さるべき特色を有す所以である。</p>
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大醫振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					

# 書育教の書圖洋東

版々重	版々重	版六	版々重	版重	版重
<p>調 奈良女高師 秋田喜三郎先生著</p> <p><b>綴方新學習法</b></p> <p>送料 二六〇</p>	<p>調 奈良女高師 山路兵一先生著</p> <p><b>綴方の自由教育</b></p> <p>送料 三〇〇</p>	<p>調 成城小學校 奥野庄太郎先生著</p> <p><b>話方教育の原理と實際</b></p> <p>送料 二五〇</p>	<p>調 奈良女高師 岡本清徳先生編</p> <p>等一用〇・三(見本) 等二用〇・三(通呈)</p> <p><b>鉛筆書方練習帖</b></p> <p>送料 二六〇</p>	<p>教 奈良女高師 大塚治六先生著</p> <p>硬毛兩様</p> <p><b>書方の指導書 尋一</b></p> <p>送料 一〇八</p>	<p>調 成城小學校 奥野庄太郎先生著</p> <p><b>聽方教育の原理と實際</b></p> <p>送料 二五〇</p>
<p>□ 本書は秋田先生多年の研究を代表せる力作。□ 綴方學習法は課題法—系統案—自由選題法等の變遷を重ねた、而も今や生活表現を基調とするとは何人も肯定するに至つた此の過程を明にし實際指導を詳述す。</p>	<p>□ 分析分析を旨とせず、生活其のものに即して建設された新しき綴り方學習指導法で、學習法の原則の上に築かれた自由綴り方法である。□ 著者多年の思索を、兒童の伸びて行く事實を借りて巧に表現されてゐる。</p>	<p>□ 話方聽方は人生生活の本質にして根本的重要事項である。□ 話方聽方の研究書は從來絶無なりしが著者は斯界に定評ある研究家にて茲に穩健なる實際的の參考を示さる。</p> <p>□ 話方聽方の原理は茲に初めて體系づけられ初等教育界を裨益し延いては本書が昭和教育史に残さるべき特色を有す所以である。</p>	<p>□ 特徴 (1) 安價 (2) 頁數多い (3) 繪表紙 (4) 基本練習、應用文字とを別つ (5) 手本文字、漢書文字を青色となす (6) 隨意練習、視寫、聽、自運の欄を置く (7) 書方手本、國語讀本と連絡を取つた優良書である。</p>	<p>□ 文部省の根本方針に基き、硬毛兩様共に文字は形を主とし、實用を主眼として其の書法の詳細に互り述べてある。</p> <p>□ 材料は書方手本の全部に就て硬毛兩様の説明指導を詳記せる外補充材料を加へてゐる。</p>	<p>□ 算術に關する参考書多しと雖も本書の如く根本原理より實際に及ぼせるものは少い。□ 各學年の教材配當はアメリカ、イギリス、フランス、ドイツの例を取り、算術遊戲の諸種を引例し、メンタルテストを解詳せる等は本書の特色である。</p>
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大醫振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					



# 書圖洋東は書育教

版々重	版々重	版五	版八十二	版八	刊新最
<p>奈良女高師 幾尾純先生編 幾尾式カード 教師用</p> <p>送料 〇・〇六</p>	<p>奈良女高師 幾尾純先生編 練習譜 幾尾式カード</p> <p>送料 〇・〇五</p>	<p>奈良女高師 幾尾純先生編 小學唱歌の指導書</p> <p>送料 〇・〇三</p>	<p>奈良女高師 幾尾純先生著 私の唱歌教授</p> <p>送料 〇・〇六</p>	<p>東京高師 青柳善吾先生著 音楽教育</p> <p>送料 〇・〇六</p>	<p>奈良女高師 横井曹一先生著 圖畫學習原論</p> <p>送料 〇・〇六</p>
<p>□本書は第一に児童作曲法を載せて平易に其の手解きをされてゐる。□第二に先生の教へる手になる児童作曲模範集を載せてある。□第三に「本譜練習幾尾式カード」を全部本譜を以て参考に載せてある。</p>	<p>□一名本譜ヨメルと稱し、本譜の讀譜力、記譜力養成の良カードである。□幾尾式唱歌教授の秘訣は、本書であつて、唱歌教授成功への鍵である。□各小學校各女學校に御採用多し。</p>	<p>□本書は先生が二十餘回生徒に教へられた事實の記録に洗練又洗練を加へられたエキスである。□理論の方面はその學習上の諸問題を實際的取扱中に巧に具體化して繰り込まれてゐる。</p>	<p>□我國唱歌教授界の第一人者を以て誰かが許す幾尾先生の唯一無二の力作は即ち本書である。□御創始の本譜教授法、獨特のタクト法、新しき作曲指導法等悉く寫眞、凸版を以て説明されてゐる。</p>	<p>□本書は先生の音楽教育に關する力作で著書幾尾先生の唱歌教授法精義である。□先生多年御研究の唱歌教授法に音楽教育に關するあらゆる御意見は悉く本書に收められてゐて本邦音楽の權威書である。</p>	<p>□本書は圖畫教育の本質を闡明にし新しき而も本道を見出すことに努め殊に鑑賞教育構成圖案等々の新方面迄詳説した多年の大作。□圖畫教育の各分野に互に論究し且つ要目等詳細を示したる良参考書。</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東

番六五五九三阪大替振・目一町寺堂安内區南市阪大

# 書育教の書圖洋東

版重	版八	版七	版重	版八	版七
<p>奈良女高師 神戶伊三郎先生著 理科學習指導實錄</p> <p>送料 〇・〇八</p>	<p>奈良女高師 大浦茂樹先生著 理科學習指導實錄</p> <p>送料 〇・〇八</p>	<p>奈良女高師 神戶伊三郎先生著 理科學習原論</p> <p>送料 〇・〇六</p>	<p>東京高師 齋藤英夫先生著 新地理書學習指導精説</p> <p>送料 〇・〇八</p>	<p>奈良女高師 清水甚吾先生著 地理學習指導法精義</p> <p>送料 〇・〇六</p>	<p>奈良女高師 椿井弘先生著 國史學習上の諸問題と其の解答</p> <p>送料 〇・〇八</p>
<p>□指導方案が各材料毎に詳述してある。□教材を精説し細微な點まで明かにしてある。□各課に互に(1)題意の要旨(2)學習の主眼點(3)學習用具(4)學習準備(5)教材の内容(6)指導法及び學習發展の狀を詳述せる斯界の名著。</p>	<p>□學習主義に基き理論と實際を巧に取合せ、實際の立場から理論を顧み、理論に基いて實際を眺めた理察著實の實際的著書である。□月並の問題を他書に譲り實際に觸れたる點のみを力説された良書である。</p>	<p>□本書は先生が多年實際に子供を指導せられた體験の結晶で多くの指導例をあげ加ふるに自然科學の本質を明かにし理科學習の實を開かれたものである。□先生は本書に蘊蓄と研究の總てを注がれた。</p>	<p>□本書は地理學習の指導と材料の精説との兩方面に互に詳説せられた最新最良書である。□本書は文部、内務、農林、商工等の各省につき新編にして得難き材料を蒐集詳説して新時代の地理指導につき活資料を提供す。</p>	<p>□著者が福岡師範以來二十年の間専ら研究された地理教授を總として最近研究されたる學習法を緯としてその著書を披瀝されたる名著である。□地理學習指導上のあらゆる重要問題は悉く解決されてゐる。</p>	<p>□本書は前者國史學習の根本及其實際をよりよく徹底する爲に一々具體事例を附した名著。□尋常高等四ヶ年に互る國史の資料學習指導の趣旨を明かにし國民精神の涵養民族的純情の陶冶を力説された良参考書である。</p>

兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東

番六五五九三阪大替振・目一町寺堂安内區南市阪大



書圖洋東は書育教

版六	版十	版十	版五	寛台賜	版重
<p>奈良女高師 教諭兼調導 横井曹一先生著</p> <p>児童美術 粘土彫塑と木彫</p> <p>送料 〇・八</p>	<p>奈良女高師 教諭兼調導 横井曹一先生著</p> <p>手工學習原論と新設備</p> <p>送料 〇・六</p>	<p>大阪府立 清水谷高女 結城親學先生著</p> <p>詳メートル裁縫</p> <p>送料 〇・三</p>	<p>大阪府立 清水谷高女 結城親學先生著</p> <p>可愛らしき 女子供服の縫方</p> <p>送料 〇・三</p>	<p>奈良女高師 前教授 錦織竹香先生著</p> <p>古今服装の研究</p> <p>送料 〇・六</p>	<p>奈良女高師裁縫研究會著</p> <p>裁縫精義(單衣篇)</p> <p>送料 〇・六</p>
<p>□ 學習主義に基く児童生活の立體的表現なる手工指導の新指針である。□ 手工教育の根本的改革の叫であり否先驅的實際的記録で児童の作品、著者の作品など数多の寫眞を以て載せられてゐる。</p>	<p>□ 手工教育の全體に亘り其の本質を明かにし新時代の新手工を詳述した良書である。□ 手工の再興時代に際し新手工の指導細目、指導法を具體的に示し加ふるに新手工の理想的經濟新設備の實例と費用を示してゐる。</p>	<p>□ 和服裁縫に必要なメートル法の寸法を悉く集め本裁四ツ身から一ツ身羽織袴、袴袴等の裁ち方を悉く圖を以て示し、誰でもメートルの寸法で裁縫が出来れば説明した良書！□ 小學校女學校の裁縫科生徒用に良し。</p>	<p>□ 和服裁縫の力を利用し □ 自分で裁てる □ 獨りで縫へる □ 手縫で出来る様、親切に説明した良参考書！ □ 色刷全圖二十四、説明圖畫百有餘。 □ 洋服裁縫教授の参考書！</p>	<p>□ 本書は總ての方面に亘り綿密なる説明と多くの圖解を用ひて専ら學習者の理解に便した日本一の最高最良の参考書である。 □ 本書には又大幅物裁方を多く加へ、且用布節約の爲に經濟裁をも記載してある。</p>	<p>□ 本書は總ての方面に亘り綿密なる説明と多くの圖解を用ひて専ら學習者の理解に便した日本一の最高最良の参考書である。 □ 本書には又大幅物裁方を多く加へ、且用布節約の爲に經濟裁をも記載してある。</p>
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					

書育教の書圖洋東

版重	版重	版七	版六	版八	版重
<p>東京女高師 調導 松尾まきを先生著</p> <p>裁縫學習の根本と其實際</p> <p>送料 〇・八</p>	<p>奈良女高師 新井つた女史著</p> <p>體育としての薙刀</p> <p>送料 〇・三</p>	<p>奈良女高師 助教 御世政重先生共著</p> <p>教育ダンス</p> <p>送料 〇・八</p>	<p>東京市 藤本光清先生編</p> <p>改正要目標準 小學校體操教程</p> <p>送料 〇・八</p>	<p>東京女高師 調導 寺谷朝藏先生著</p> <p>改正要目標準 小學校遊戯指導書</p> <p>送料 〇・六</p>	<p>奈良女高師 調導 川口英明先生著</p> <p>體育學習の實際</p> <p>送料 〇・六</p>
<p>□ 悉く著者の體験的記録になる新裁縫教育法指導の原理及方法及と兒童心理に適合したる教材配列とは他にその比を見ず。 □ 作業主義に基き圖解を本位とし給多し。</p>	<p>□ 最も困難なる形の説明に百五十有餘の寫眞を用ひ誰人にも其の要領を會得し得る様になされてゐる。</p>	<p>□ 第一から高女まで五十七種、寫眞凸版百餘を挿入して懇切に説明し樂譜三十餘種を添へてある。 □ 種類の多いダンスの中で獨りこの教育ダンスのみが學校に取入れられ且生涯實行さるべきものである。</p>	<p>□ 課程は體操科死活的の體、從つて本書は改正要目活用の寶典である。 □ 本書は各學年十一種計八十八種の教程を其難易と運動量を考慮し編述せるものである。 □ 實際指導に至便な携帶用の此上なき良書。</p>	<p>□ 改正要目に準據し各學年別に體操、教練、遊戯、競技の全部に亘り生理的、解剖的、心理的解説と其の指導法とを詳述せる良書。 □ 體操については號令の掛け方より運動量の多少、遊戯については其の解説を詳述。</p>	<p>□ 従来の體操を體育と改稱して其の範圍を擴め受動的の教授を發動的の學習となし、一齊的劃一的のものなりしを個別的に兒童本位に迄進めて獨自學習を新設した、學習主義に基く體育學習の實際の新生面である。</p>
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					



# 書圖洋東は書育教

<p>版二十</p> <p>奈良女高師 前教 官 永田與三郎先生著</p> <p>新聞記事を説明したる</p> <p><b>經濟の活</b></p> <p>送料 二・三〇</p>	<p>版六</p> <p>白井繁太郎先生著</p> <p><b>東洋史物語</b></p> <p>送料各 二・四〇</p> <p>上下巻</p>	<p>版六</p> <p>宮道馨先生著</p> <p><b>理化學史物語</b></p> <p>送料 二・五〇</p>	<p>版三十</p> <p>清水英一先生著</p> <p><b>數學史物語</b></p> <p>送料 二・五〇</p>	<p>版五</p> <p>奈良女高師 教授 石澤吉廣先生著</p> <p><b>家事學習上の諸問題</b></p> <p>送料 三・五〇</p>
<p><b>物語類・其の他</b></p>				
<p>□ 無味乾燥の算術に興味を添へ情味を加へ算術好きにするは數學史にしくはない。</p> <p>□ 本書は數學の發達及發明見につき極めて興味深く書いたもので數學を授くるもの學ぶ者の必讀の良書である。</p> <p>□ 先生は斯界に於ける我が國の權威で其の深き造詣と廣き研究とは周知の事である。</p> <p>□ 本書は先生が家事學習の各方面大小幾多の事實問題につき詳細懇切なる解決を與へられたもので家事學習上類例なき良書である。</p> <p>□ 本邦唯一の簿記教授の指導書生る。□ 要目材料解説、方法提示、並に練習問題等々悉く實際的に詳示す。□ 本書は組織的に精密に解説せるを以て本書を使用すれば簿記の専攻をせぬ人も巧に教授し得又獨習に便す。</p> <p>□ 本邦唯一の簿記教授の指導書生る。□ 要目材料解説、方法提示、並に練習問題等々悉く實際的に詳示す。□ 本書は組織的に精密に解説せるを以て本書を使用すれば簿記の専攻をせぬ人も巧に教授し得又獨習に便す。</p> <p>□ 本邦唯一の簿記教授の指導書生る。□ 要目材料解説、方法提示、並に練習問題等々悉く實際的に詳示す。□ 本書は組織的に精密に解説せるを以て本書を使用すれば簿記の専攻をせぬ人も巧に教授し得又獨習に便す。</p>				
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>				

# 書育教の書圖洋東

<p>刊新最</p> <p>文部省主事 松本喜一先生共著</p> <p>大阪市視學 高橋福三先生共著</p> <p>高等小學 補習學校</p> <p><b>簿記指導書</b></p> <p>送料 二・三〇</p> <p>送料各 〇・二六</p>	<p>版重</p> <p>文部省主事 松本喜一先生共著</p> <p>東京市視學 足達丑六先生共著</p> <p>高等小學 補習學校</p> <p><b>商業指導書</b></p> <p>送料 二・三〇</p> <p>送料各 〇・二六</p>	<p>版五</p> <p>文部省實業 補習教育主事 千葉敬止先生著</p> <p>高等小學</p> <p><b>農業指導書</b></p> <p>送料 二・三〇</p> <p>送料各 〇・二六</p>	<p>刊新最</p> <p>文部省實業 補習教育主事 千葉敬止先生著</p> <p>高等小學</p> <p><b>農業教育原論</b></p> <p>送料 二・三〇</p> <p>送料各 〇・二六</p>	<p>版五</p> <p>文部省督學官 九州大學教授 小出滿二先生著</p> <p><b>農業教育</b></p> <p>送料 二・三〇</p> <p>送料各 〇・二六</p>	<p>版五</p> <p>東京女高師 訓導兼教諭 山形寛先生著</p> <p>最新 手工教材</p> <p><b>さびびら細工</b></p> <p>送料 二・三〇</p> <p>送料各 〇・二六</p>
<p>□ 本邦唯一の簿記教授の指導書生る。□ 要目材料解説、方法提示、並に練習問題等々悉く實際的に詳示す。□ 本書は組織的に精密に解説せるを以て本書を使用すれば簿記の専攻をせぬ人も巧に教授し得又獨習に便す。</p> <p>□ 本書は文部省の商業教授要目案に準據し其委員たる著者が商業科の教材及び指導法の解説書として編纂されたものである。</p> <p>□ 圖解、諸様式等を例示し内容豊富、説明懇切にして實地指導上の良参考書である。</p> <p>□ 文部省制定の新高等小學農業科教授要目作成の委員が其趣旨により指導書を編纂する指導の方法と内容の解説とを巧に織混ぜ、説明懇切、挿繪多く、必要用具をも示す。</p> <p>□ 實驗實習を特説して實地指導に便した。</p> <p>□ 高等小學に於ける農業教育の目的本質教材方法教師實習地經營等々凡そ高等小學の農業教育に關する一切を闡明したる唯一書。</p> <p>□ 著者は文部當局として高等小學農業科新要目決定の局に當り全國の實際を觀察指導す。</p> <p>□ 著者は我が國農業教育の最高權威である。</p> <p>□ 九大勅任教授と文部督學官を兼ね、而も農業科實業教員檢定委員の重職にあられる。</p> <p>□ 本書は先生の農業教育に關する最高唯一の著書で尙有益なる幾多の論文を添へてある。</p> <p>□ 本邦唯一の簿記教授の指導書生る。□ 要目材料解説、方法提示、並に練習問題等々悉く實際的に詳示す。□ 本書は組織的に精密に解説せるを以て本書を使用すれば簿記の専攻をせぬ人も巧に教授し得又獨習に便す。</p> <p>□ 本邦唯一の簿記教授の指導書生る。□ 要目材料解説、方法提示、並に練習問題等々悉く實際的に詳示す。□ 本書は組織的に精密に解説せるを以て本書を使用すれば簿記の専攻をせぬ人も巧に教授し得又獨習に便す。</p> <p>□ 本邦唯一の簿記教授の指導書生る。□ 要目材料解説、方法提示、並に練習問題等々悉く實際的に詳示す。□ 本書は組織的に精密に解説せるを以て本書を使用すれば簿記の専攻をせぬ人も巧に教授し得又獨習に便す。</p>					
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					



# 書圖洋東は書育教

刊新最	刊新最	刊新最	版五	版二十	生徒・児童参考書
<p>臨時調査會發表 漢字整理案</p> <p>漢語假名遣整理案</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>奈良女高師 岩城準太郎先生著</p> <p>江代八大家文</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>奈良女高師 木枝増一先生著</p> <p>高等國文法講義</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>東洋大學 關寛之先生著</p> <p>高等心理學</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>廣島大學教授 佐藤充先生著</p> <p>高等物理學</p> <p>上巻 二〇〇 下巻 二〇〇 送料各 〇・〇〇</p>	
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					

# 書育教の書圖洋東

版三	版四	版五	版重	版四	版六
<p>京大 小西重直先生序、青木女子女史抄譯</p> <p>母より先生へ</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>奈良女高師 秋草ちか先生 中原イネ先生共著</p> <p>寫真に作法實習記録</p> <p>本膳の饗應</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>奈良女高師 須山法香齋先生著</p> <p>投入の花の活け方</p> <p>定料 一〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>奈良女高師 永田與三郎編</p> <p>正初等教育史上に残る人々と其の苦心</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>奈良女高師 池田こぎく先生著</p> <p>私の教育記録</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>	<p>關西學院 砂川寛榮先生著</p> <p>養成學生新學習法</p> <p>定料 二〇〇 送料 〇・〇〇</p>
<p>譯者青木夫人は母となる前接子供の問題についてこの原著ほど暗示と開發とを興へたものはありまじんと申してをられる。</p> <p>□小西博士は子供を眞の子供にまで育てあげ情熱の巨火であると推獎してをられる。</p>	<p>我が國古來の崇高優雅な作法中特に古典的代表たる本膳の饗應につき一々詳細な寫真により一目瞭然たらしめたものである。</p> <p>□本膳饗應の什器を初め進撤の次第、食事の作法、獻立・料理法のすべてを詳説す。</p>	<p>奈良女高師にて附屬高女、附屬實女の教科書に採用す。</p> <p>□一流に備せず各流共通の基礎事項を網羅す</p> <p>□價低廉にして而も生涯携帶し得る美本。</p> <p>□女學校活花教科書の外一般參考書に良し。</p>	<p>明治の模倣を脱却し學習主義教育の殿堂を開いたのは幾多實際家の努力の賜である。</p> <p>□本書記する二十餘家の表面華々しき成果の裏面には慘憺たる苦心を秘めてゐる。此書敬すべき記念塔は後進者指導の無二の良書</p>	<p>教育の根本態度に初まつて、教育上の改革方針と其の實例とを獨特の明文を以て示され。□更に其體験されたる各科學習の實際を丹念に記録されてゐる。□首々何々何物かを暗示する力の充ち満ちた名著。</p>	<p>競爭激甚の今日眞の學習法を會得し全我を伸すものが最後の勝者である。</p> <p>□本書は新教育の精神を如實に示された良書で此を會得せば誰人も自ら伸び自らたる獨學生勉學指針たるのみでなく處世の必讀書</p>
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振・目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					



# 書圖洋東は書育教

<b>中 等 教 科 書</b>	版 十	版 十	版 六 十	版 重	版 重
	<p>文 學 博 士 成 城 學 校 訓 導 松 本 浩 記 先 生 編</p> <p><b>童 兒 副 修 身 書</b></p> <p>定 價 上 一 各 〇・五 下 一 各 〇・六 補 習 一 各 〇・六</p>	<p>東 京 高 師 教 諭 佐 藤 良 一 郎 山 本 政 治 鍋 島 信 太 郎 松 尾 正 夫 四 先 生 共 著</p> <p><b>代 數 講 義</b></p> <p>定 價 上 一 各 〇・五 下 一 各 〇・六 補 習 一 各 〇・六</p>	<p>愛 知 一 中 教 諭 中 山 久 吉 先 生 著</p> <p><b>本 問 最 新 化 學</b></p> <p>定 價 〇・三</p>	<p>大 阪 清 水 谷 高 女 教 諭 中 村 邦 治 先 生 著</p> <p><b>子 女 物 理 學 講 義</b></p> <p>定 價 〇・六</p>	<p>横 濱 高 等 工 業 教 諭 山 下 誠 太 郎 先 生 著</p> <p><b>内 燃 機 關</b></p> <p>定 價 〇・六</p>
<p>□ 著者の權威 本書は本邦数理の學府として最も權威ある東北大學講師にて且第二高等學校の數學主任全部柴田博士、大石學士、田中學士、市原學士の四教授が各年の體験をコンデンスして生み出されたる前例なき力作名著である。</p> <p>□ 内容の特色 頗る多いが其の主なるもの。(一)體系的統一的にて高等數學の各分科が關聯的に學習し得ること。(二)文部省制定の高等學校高等科數學教授要目に則り詳細懇切を極めたる事。(三)著者は各専門學者としての權威たる以外高等教授の實際に永き體験を有せられ従て最も瞭解し易く編纂されしこと。(四)最近發達の新數學の部分を挿入されし事。(五)脚註により熟語其他の説明を懇切にし小活字文挿入により主副輕重を明かにし索引を附して至便ならしめ定理公式類を太文字にする等あらゆる親切なる編纂手段を盡し居ること。(六)復習問題、練習問題を多く載せたこと</p> <p>□ 愛讀者必讀書</p> <p>(一)高等學校教科書、參考書。</p> <p>(二)大學入學試驗の最良參考書。</p> <p>(三)高工其他男女専門校の教科書、參考書。</p> <p>(四)師範專攻科高等師範の教科書、參考書。</p> <p>(五)文檢受驗者の最良參考書。</p> <p>(六)中等諸學校教師の參考書。</p>					
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振。目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					

# 書育教の書圖洋東

版 三	刊 最	刊 新 最	刊 新 最	刊 新 最	刊 新 最
<p>東 京 高 等 工 業 教 諭 佐 藤 富 治 先 生 著</p> <p><b>工 場 管 理 學</b></p> <p>定 價 〇・六</p>	<p>東 北 大 學 講 師 理 學 博 士 柴 田 寬 先 生 共 著 印 刷 中</p> <p><b>高 等 數 學</b> (立體幾何及三角法篇)</p>	<p>東 北 大 學 講 師 理 學 博 士 柴 田 寬 先 生 共 著 印 刷 中</p> <p><b>高 等 數 學</b> (座標幾何學篇)</p>	<p>東 北 大 學 講 師 理 學 博 士 柴 田 寬 先 生 共 著 印 刷 中</p> <p><b>高 等 數 學</b> (代數學篇)</p>	<p>東 北 大 學 講 師 理 學 博 士 柴 田 寬 先 生 共 著 印 刷 中</p> <p><b>高 等 數 學</b> (微分積分學篇) 下卷</p>	<p>東 北 大 學 講 師 理 學 博 士 柴 田 寬 先 生 共 著 印 刷 中</p> <p><b>高 等 數 學</b> (微分積分學篇) 上卷</p>
<p>□ 著者の權威 本書は本邦数理の學府として最も權威ある東北大學講師にて且第二高等學校の數學主任全部柴田博士、大石學士、田中學士、市原學士の四教授が各年の體験をコンデンスして生み出されたる前例なき力作名著である。</p> <p>□ 内容の特色 頗る多いが其の主なるもの。(一)體系的統一的にて高等數學の各分科が關聯的に學習し得ること。(二)文部省制定の高等學校高等科數學教授要目に則り詳細懇切を極めたる事。(三)著者は各専門學者としての權威たる以外高等教授の實際に永き體験を有せられ従て最も瞭解し易く編纂されしこと。(四)最近發達の新數學の部分を挿入されし事。(五)脚註により熟語其他の説明を懇切にし小活字文挿入により主副輕重を明かにし索引を附して至便ならしめ定理公式類を太文字にする等あらゆる親切なる編纂手段を盡し居ること。(六)復習問題、練習問題を多く載せたこと</p> <p>□ 愛讀者必讀書</p> <p>(一)高等學校教科書、參考書。</p> <p>(二)大學入學試驗の最良參考書。</p> <p>(三)高工其他男女専門校の教科書、參考書。</p> <p>(四)師範專攻科高等師範の教科書、參考書。</p> <p>(五)文檢受驗者の最良參考書。</p> <p>(六)中等諸學校教師の參考書。</p>					
<p>兌發 社會資合式株書圖洋東 阪大・京東</p> <p>番六五五九三阪大替振。目丁一町寺堂安内區南市阪大</p>					







# 皇族殿下の賜覧

文部省御認一定・茗溪會御推獎  
兒童讀物の一オソリチ

## 學習資料 百科全書

奈良女高師教授 神戶伊三郎先生著 兒童の植物學	奈良女高師教授 神戶伊三郎先生著 續兒童の植物學	奈良女高師教授 神戶伊三郎先生著 兒童の動物學(獸類篇)	奈良女高師教授 神戶伊三郎先生著 兒童の動物學(鳥類篇)	奈良女高師教授 神戶伊三郎先生著 兒童の昆蟲學	奈良女高師教授 神戶伊三郎先生著 兒童の礦物學	奈良女高師教授 桑野久任先生著 兒童の生理學(營養篇)	奈良女高師教授 桑野久任先生著 兒童の生理學(活動篇)	奈良女高師教授 西田與四郎先生著 兒童の地文學	奈良女高師前教授 清水半吾先生著 兒童の天文學
----------------------------	-----------------------------	---------------------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------	--------------------------------	--------------------------------	----------------------------	----------------------------

錢八料送・錢拾八圓壹 册各價定

東京・大阪 東洋圖書株式會社發兌

大阪市雨區安堂寺一丁目・振替大坂三九五六番

□最良最善最強—印刷鮮明、紙質上等、挿畫豐富、體裁藝術的、製本強堅優美、日本一の兒童書

□學校學級家庭必須の良書—學校圖書館、兒童文庫、優良兒童の友として責任を以てお勧めし得る良書



